神秘学ポエジー 風遊戯 mediopos 128

【神秘学ポエジー〜風遊戯 第 261集】media-poesieヴァージョン

mediopos 3176–3200

2023.7.29〜 2023.8.22

神秘学遊戯団

☆mediopos-3176　2023.7.29

リルケの『オルフォイスへのソネット』を
はじめて読んだのは四五年以上まえのことで
中央公論社の「世界の文学 36　リルケ」の
手塚富雄訳によるものだったが

そのときは詩の理解どころか
オルフォイス／オルフェウスのことも
まるで知らないまま
その門の前で佇むばかりだった

その後オルフェウスのことを知るにつけ
なんとか『オルフォイスへのソネット』に
身を寄せてその門を少しでも開きたいと
おりにふれて複数の訳とその解説に
目を通してみたりもしていた

そして数十年経ってようやく
その扉をひらくきっかけとなったのが
沓掛良彦『オルフェウス変幻』（2021）の刊行である
（そして読み始めて二年以上）

それは沓掛良彦でなければなしえなかった
世界ではじめて
ヨーロッパ文学におけるオルフェウス像の
変容と変遷が綴られた一書

本書は詩人・鷲巣繁男に捧げられている
鷲巣氏の亡くなる少しまえ
氏から「古典学者の立場から
オルフェウスについて本を書いてみませんか」
と言われたのがきっかけだそうだ

ほんらいなら鷲巣氏自身
オルフェウスに関する書を「宿願」
としていたようだが
その後まもなく亡くなったことで
それが沓掛良彦に託されたことになる

鷲巣氏が亡くなったのが昭和五七（一九八三）年
六七歳のときだから
そこから四〇年近く経ったことになる

なお、本書刊行というきっかけもあり
鷲巣繁男という稀有の詩人についても
ようやく少しだけ道がひらけてきたところで
鷲巣繁男についても
いずれとりあげてみたいと思っている

さて本書のなかでリルケは
オルフェウスを歌った近代の詩人の筆頭に
挙げられている
『オルフォイスへのソネット』である

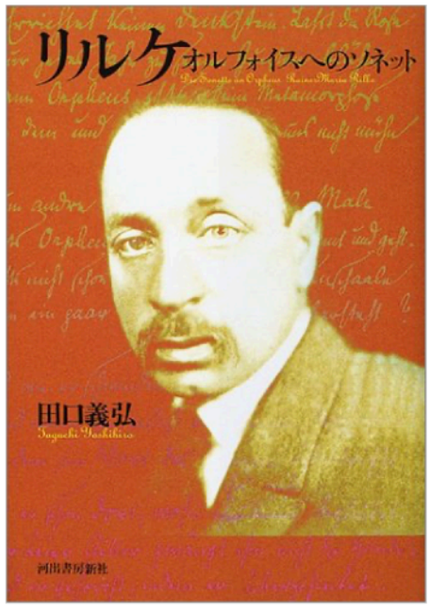
リルケはその晩年の一九二二年
「ほとんど天恵を受けたかのごとく
創造の嵐に見舞われ、
第一部はわずか四日間、第二部は九日間という、
信じがたいほどの短時のうちに」
その五五篇を書きあげたという

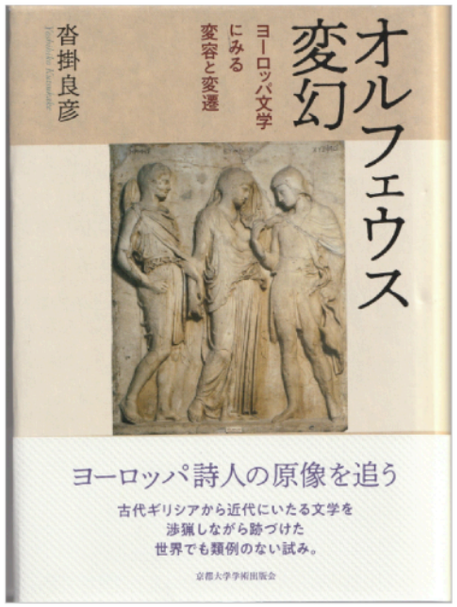
本書で示唆されているリルケの
『オルフォイスへのソネット』における
オルフォイス像への理解を広げようとした矢先
その全訳と註解のおさめれらた
田口義弘の『リルケーオルフォイスへのソネット』に
古書店で出会うことになる
（そこからもほぼ二年経つ）

リルケの築いたオルフェウス像は
「生者と死者の世界を来往して、
自然界の超自然的な力を及ぼす
古代のシャーマン的な面影」を残しながらも

「その歌の力によって、神話的宇宙、
純粋な存在を創り出す歌の神」である

「生と死の世界を自由に来往する者として」
「この地上世界の輝きを
死者の国へまで運んでゆく者」
それがオルフォイス





■沓掛良彦『オルフェウス変幻／ヨーロッパ文学にみる変容と変遷』
（京都大学学術出版会 2021/1）
■田口義弘『リルケ―オルフォイスへのソネット』（河出書房新社 2001/10）

かつてのオルフォイスの歌さえ
無常のうちに消えてゆくものだとしても
（「オルフォイスのために
記念碑を建てることは無駄である」）
歌（詩）のはたらきそのものは
永遠のものだと詠う

そのように
原初の詩人の死を悼みながらも
「歌というものの遍在と永続、絶えざる再生」が
歌われることによるオルフォイス賛歌
それがリルケの『オルフォイスへのソネット』のようだ

ようやくその主題への理解へと
門がひらかれはじめたことを悦びたい

▪沓掛良彦『オルフェウス変幻／ヨーロッパ文学にみる変容と変遷』
（京都大学学術出版会 2021/1）
▪田口義弘『リルケ―オルフォイスへのソネット』（河出書房新社 2001/10）

（沓掛良彦『オルフェウス変幻』～「序章　オルフェウス像変遷の軌跡ーーーー古代から近代までの概観」より）

「「その名も高きオルフェウス」、前六世紀半ばのギリシアの抒情詩人イビュコスが、このわずか一行残った断片でこう讃えて以来、実に二五〇〇年あまりにわたって、オルフェウスはヨーロッパの文学・芸術に巨大な影を落としている。文学・芸術の世界におけるオルフェウスはまさしく不死鳥のごとき存在で、古代から現代にいたるまで、さまざまな形をとり、多彩な様相のもとに再生し続けてきた。今後もおそらくこの現象は続くであろう。リルケは『オルフォイスへのソネット』一九番の中で原初の詩人(Urdichter)であるオルフェウスを、

変化と移ろいを超えて
さらに遠く　さらに自由に
なおもおんみの原初の歌がつづいている
竪琴をもった神よ
（富士川英郎・『リルケ詩集』３、彌生書房）

と歌っているが、確かに原初の詩人の原初の歌(Vorgesang)は、さまざまな変容をとげながら、時空を超えてヨーロッパ全土の詩の中に、いや微かながらもわが国の詩の中にさえも響いていると言ってよい。欧米の文学・芸術はこの原初の詩人にまつわる神話に深く浸り、それを創造の源としてきた。亡き詩人鷲巣繁男は、文学における不死なる存在としてのオルフェウスと、世界文学におけるその遍在について、こんな卓見を述べている。

ギリシアの神々、それがいわゆるオリュンポス系であらうがなからうが、現代の世界の人々にとって、もはや過ぎ去った神々であるのに対し、オルペウスのみは国家や民族を超えて、わたしが曽て「彼一人が世界市民権をもつている」と表現したやうに、わが日本の詩人も屢々「オルフェウスよ」などと呼びかけてゐるのである。
（「オルペウスについて」、鷲巣繁男『遺稿集ーーーー神聖空間』、春秋社、一九八三年）

文学、芸術の世界で「世界市民権をもつ」ただ一人の存在、それがオルフェウスである。」

（沓掛良彦『オルフェウス変幻』～「第六章　ヨーロッパ近代詩に見るオルフェウス像」より）

「オルフェウスを歌った近代の詩人で、その筆頭に置くべきはリルケである。」

「リルケが歌ったオルフェウスの真髄をなすものは、言うまでもなく晩年近くに書かれた『オルフォイスへのソネット』五五篇である。」

「全編がオルフェウス的なものの表現であり、それに充たされているとは言えようが、神話上のオルフェウスそのものをテーマにした詩はさほど多くはなく、とりわけ第二部になると、神話・伝説上の伶人（うたびと）としてのオルフェウスがテーマとなっている詩はほとんど見受けられない。オルフェウスそのものを歌った詩は第一部の冒頭からの九篇として集中的にあらわれ、それらはオルフェウスの歌のはたらきを告げる頌歌であるソネット第一番に始まり、それと呼応する。この楽人・詩人の死と変身を歌った鎮魂歌とも言うべき、第二六番のソネットとは、この詩集における二本の柱であり、アーチであり、通路であって、その間を抜けて全篇にオルフォイスの声が響き渡っているのである。」

リルケがここで築いたオルフェウス像は、生者と死者の世界を来往して、自然界の超自然的な力を及ぼす古代のシャーマン的な面影をとどめながらも、その歌の力によって、神話的宇宙、純粋な存在を創り出す歌の神であり、「オルフォイス的世界」の創造者としてのそれである。その歌の力で、獣たちばかりか山川草木、岩さえも魅惑したという超人的な音楽家としてのオルフェウス神話・伝説を踏まえながらも、この詩においてリルケはその古来の神話・伝説の意味内容を一変させたのだと言ってよい。つまりはこのオルフォイス鑽仰の原理そのものとして提示したのである。これはまさにオルフェウス像の構築と呼ぶに足るものだ。第六番のソネットで、

彼はこの地上の者だろうか　いな　二つの世界から
彼の広い本性から生まれてきたのだ（一–二行）

と言われ、またソネット第七番では

彼こそは滅びることのない死者のひとりだ
死者たちの戸口のなかへ奥深く
彼は讃うべき果実を盛った皿をささげてゆく（一二–一四行）

と歌われているのが、リルケの創造したオルフォイス像なのである。二つの世界にまたがり、生と死を超越した存在、生と死の世界を自由に来往する者として、「讃うべき果実」つまりはこの地上世界の輝きを死者の国へまで運んでゆく者が、オルフォイスだというのだ。」

「第五番のソネットではオルフォイスのどのような姿、その本質が歌われているのであろうか。先学の口を借りてそれを述べれば、次のようなことになる。

歌われているのはオルフォイスの歌の、ひいてはそのはたらきによって生まれるすべての歌（詩）の永遠性の問題である。オルフォイスの歌にしても万古不易、この現世にいつまでもとどまっているものではなく、生々流転のうちにあり、常に動態にあって、絶えざる変身（Wandlung）によって生まれ、また消えてゆくものであるということがテーマとなっている。それゆえ、その名をとどめようとして、オルフォイスのために記念碑を建てることは無駄である。なぜなら「歌うものがあるとき／それは必ずオルフォイスだ」(Ein für alle Male/ists es Orpheus wenn wen es singt)。だから記念碑なぞよりは、美しく咲いてははかなく散って行く薔薇の花を咲かせることこそが、オルフォイスにはふさわしいのだよリルケは言う。」

「さて最後に、その歌の力によって、「世界・内部・空間」を生み出し、新たな「オルフォイス的世界」を創成する存在としてのオルフォイス鑽仰の歌であり頌歌であるソネット第一番と呼応する「鎮魂歌」とも言えるソネット第二六番の眼を写して一瞥し、そこに歌われているオルフェウスの姿を窺ってみることとしよう。

（･･･）

それはオルフォイスの死によって生じた、歌というものの遍在と永続、絶えざる再生を歌った一篇なのである。それは歌の司、原初の詩人の死を悼む鎮魂歌であると同時に、その最終的な勝利を讃える頌歌であり、第一番のソネットと同じく、リルケによって声高く歌い上げられたオルフォイス鑽仰の歌にほかならない。」

（沓掛良彦『オルフェウス変幻』～「あとがき」より）

「「あんた、古典学者の立場からオルフェウスについて本を書いてみませんか」、詩人は私の眼をのぞき込むようにして静かにそう言われた。一九八二年頃、教えを請うために、私が埼玉の寓居を訪れた時のことである。詩人が白玉楼中の人となられるしばらく前のことであった。鷲巣さんはそれ以前に『饗宴』という高踏的で瀟洒な同人誌に、オルフェウスについてのエッセイを連載しておられ、私もそれを読んでいたので、オルフェウスに関する深い関心と知識をおもちのことは知っていた。当時私はサッフォーを中心にギリシアの叙情詩を勉強していたので、それならばこの男はオルフェウスについても関心があるがずだと思って、そんなことを言われたのだろう。
（･･･）

「これはこの国の古典学者の誰かが書かなければいけない本ですよ、日本の文学者、特に詩人たちがヨーロッパの詩の伝統を理解する上でもね」と詩人は強調したが、それについてのなんの心構えも準備もなかった私は、自分がそんな本を書けるとも思わず、「はあ、いつか機会があったらやってみたいと思います」というような曖昧な答えをしたように記憶している。

それからしばらくして、鷲巣さんは亡くなられた。オルフェウスについての本を書くことは鷲巣さんご自身の宿願だったようである。だが詩人の早すぎる死によってそれは実現せず、生前に発表された文と、未完のまま遺稿として残された原稿のみが、後に『神聖空間』に収められ、世にでることとなった。詩人の亡き後、残された詩集や著書を読み返すたびに、オルフェウスのことが脳裡に浮かんだ。

（･･･）

出来映えはともかく、私の知るかぎりでは、刊行された書物としては本書が、古代から現代までの文学におけるオルフェウス像の変遷を追った、世界最初の本ではないかと思う。いかにも大風呂敷で気恥ずかしいが、そういう試みをしたこと自体は無意味ではなかったと思いたい。」

（田口義弘『リルケ―オルフォイスへのソネット』より）

※〈第一部　１）

「すると一本の樹が立ち昇った　おお　純粋な超昇！
おお　オルフォイスが歌う！　おお　耳のなかの高い樹よ！
そしてすべては沈黙した。だが　その沈黙のなかにすら
生じたのだ、新しい開始と　合図と　変化とが。

静寂よりなる動物らが押しよせてきた、澄んだ
解かれた森のねぐらから　巣から。
そしてわかった、かれらがそんなにも静かだったのは、
企みや不安からではなくて

じっと聴きいっているからだった。唸りも　叫びも　吠え声も
かれらの心のなかでは小さくおもわれていた。
そしていまさっきまで　これを受けいれるための小屋も、

暗い欲望からの、戸口の柱が揺れ動く
隠れ家すらもほとんどなかったところーーーーそんなかれらの
聴覚のなかにあなたは神殿を創られた。」

※〈第一部　２６）

「しかし神々しい存在よ　最後にいたるまでも鳴り響く者よ、
しりぞけられたマイナデスの群れに襲われたとき、
彼女らの叫喚に秩序をもって響きまさったうるわしい存在よ、
打ち毀す者たちのさなかから　あなたの心高める音楽は立ち昇ったのだ。

あなたの頭と竪琴を打ち毀すことのできる者はいなかった、
いかに騒ぎ　足掻こうとも。そして彼女らが
あなたの心臓をねらって投げつけた鋭い石はみな
あなたに触れると　柔らいでそして聴く力を授かった。

ついに彼女らはあなたを内下してしまった、復讐の念にいきりたち。
しかしそれでもあなたの響きは　獅子や岩のなかに
樹々や鳥たちのなかに留まった。そこでいまなおあなたは歌っている。

おお　失われた神！　無限の痕跡よ！
敵意がついにあなたを引き裂いて　遍在させたからこそ、
私たちはいま　聴く者であり、自然のひとつの口なのだ。」

◎沓掛良彦
1941年長野県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。文学博士。東京外国語大学名誉教授。専門は西洋古典文学。
主な著訳書
『サッフォー―詩と生涯』(平凡社、後に水声社)、『讃酒詩話』、『和泉式部幻想』(以上、岩波書店)、『陶淵明私記―詩酒の世界逍遥』(大修館書店)、『西行弾奏』(中央公論新社)、『エラスムス―人文主義の王者』(岩波現代全書)、『式子内親王私抄―清冽・ほのかな美の歌』、『人間とは何ぞ―酔翁東西古典詩話』(以上、ミネルヴァ書房)、『古代西洋万華鏡―ギリシア・エピグラムにみる人々の生』(法政大学出版局)、『ギリシアの抒惰詩人たち』(京都大学学術出版会)、『ピエリアの薔薇―ギリシア詞華集選』(水声社、後に平凡社ライブラリー)、『ホメーロスの諸神讃歌』(ちくま学芸文庫)、エラスムス『痴愚神礼讃―ラテン語原典訳』 (中公文庫)、オウィデイウス『恋愛指南―アルス・アマトリア』(岩波文庫)、『黄金の竪琴―沓掛良彦訳詩選』 (思潮社、読売文学賞受賞)、『ギリシア詞華集』全4冊(西洋古典叢書、京都大学学術出版会)、など

☆mediopos-3177　2023.7.30

甲野善紀と方条遼雨による
『上達論』に続く二冊目の共著
『身体は考える／創造性を育む松聲館スタイル』

（『上達論』については
mediopos2906（2022.11.1）でとりあげています）

「松聲館（しょうせいかん）スタイル」とは
甲野善紀の生み出した
「自分の体で動き、自分の頭で考える」を核とする
武術の稽古・探求する方法だが

その視点は武術の領域に限らず
日々私たちが生きていくうえでのさまざまな課題に
どのように対していくかについて
創造的な視点を得るためにも示唆的である

ぼくはとりたてて武道等にかかわってはいないので
武術に関する具体については想像の域を超えないが
ぼく自身の生きてきたありようと
多くの視点で深く共振できるところが多くある

本書は第一部と第二部に分かれ
第一部は方条遼雨よる
「松聲館スタイル」から体得したこと
第二部では両者の対談となっている

本書で「考える」といったとき
それは頭で考える「思考」ではなく
身体全体で考えるということであり

そうすることで論理や言語で説明可能な領域ではなく
むしろ「分からない世界」にふれ
「自分の枠組みの外側にあるもの」へと踏み出し
「枠組みの外側」へと
自分の領域を「拡張」することができる

その学びは失敗しながらも
まさに自分で「考え」そして「やる」ことであり
それらを「外部委託」してしまうことではない
（その点ＡＩ的なものの「枠組みの外側」でのそれである）

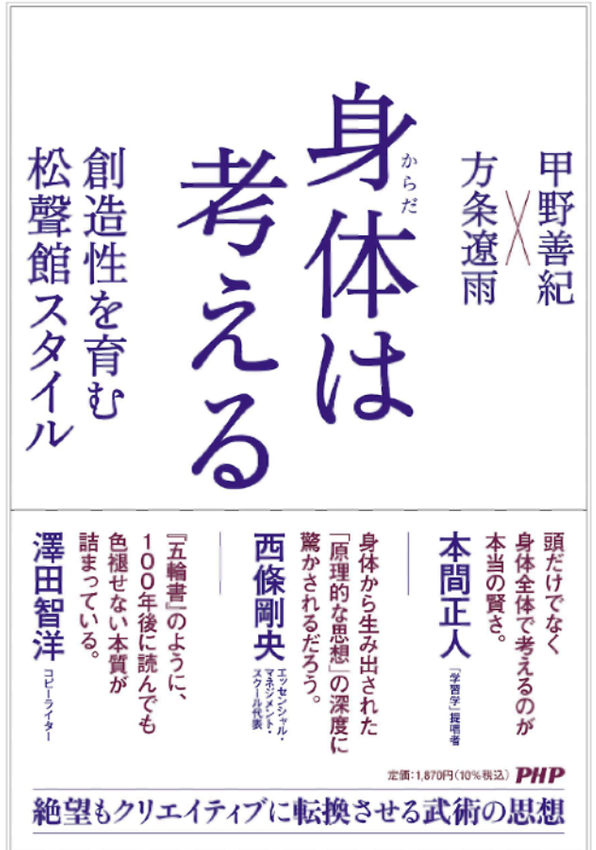
「外部委託」すると
「知の家畜化」へと向かってしまう
それは「カルト宗教のような、
洗脳して従わせる方法に通」じ
「事象を事象のまま見てみる」ことができなくなる

教育とされるものの多くはそうした「知の家畜化」であり
「あらゆる可能性に自己を開いた状態」をつくるのではなく
「思想に固定点を作」り
教えられたことを教えられたままに行い
そのなかで評価を得ようとするものだともいえる

「外部委託」に過剰適応してしまうと
「分からない世界」にあるものを感じられなくなり
「何かおかしいぞ」という「違和感」を
感じることもできなくなってしまう

第二部の対談の終わりのほうで
コロナ禍のことにも言及されているが
方条遼雨の周りではむしろ
「コロナ禍でいい事があった人がすごく多い」という
それは現象を「良い」「悪い」でとらえず
そうした枠組みの外において
「訪れた「運命のポテンシャル」を
最大限「使い切りたい」という発想があったからのようだ

甲野善紀は「二十一歳の時
「人間の運命は完全に決まっている」っていうのと、
「自由だ」という事が同時にある、
という事に気付い」て以来
「それを実感しようという事を
人生のテーマにしてきた」というが



▪甲野善紀・方条遼雨
『身体は考える／創造性を育む松聲館スタイル』
（PHP研究所 2023/7）

その実感を深めていくためにも
「自分の体で動き、自分の頭で考え」ながら
自分の領域を「枠組みの外側」へと
「拡張」しようとしてきたのだろう

重要なのは「自分」という枠組みを
特定領域に閉じ込めないで
その外の「分からない世界」へと向かうことだ
論理や言語はともすれば
その外部にあるものを排し
そうした「枠組みの外側にあるもの」を
感じとることをできなくさせてしまう

▪甲野善紀・方条遼雨
『身体は考える／創造性を育む松聲館スタイル』（PHP研究所 2023/7）

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「はじめに」より）

「本書は二〇二〇年に甲野善紀先生との『上達論』（ＰＨＰエディターズ・グループ）を刊行して以来、二冊目の共著となります。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「分からない世界」より）

「物事の理解や上達に役立つ思考法をご紹介しておきましょう。
それは、「分からない世界に触れる」ということです。
（･･･）
ところが、人間にはもう一方の性質があります。
「理解できないものを恐れる」という本能です。

理解できないものは取り扱いがわかりません。
どう接して良いか、どう向き合って良いかが分からず、拒絶してしまうのです。
これは、生命の根源的なシステムに根ざした防衛本能とも言えます。
このような良き、人は多くの場合、二種類の対応で済ませようとします。
「無かったことのする」か「枠組みに押し込む」かのどちらかでです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「枠組み」より）

「どちらも、「自分の枠組みの外側にあるもの」を切り捨ててしまっているのです。

先ほど、「自己の拡張とは自己の外側に踏み出す事」と書きました。
そして「理解できないこと」は、いつでも「自分の理解できる枠組みの外側」にあります。
つまり「理解できないこと」とは、本来「自分の枠組み」を拡げるための、最高の材料なのです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「栄養」より）

「学習のこつ・上達のこつは、
・ほどほどの理解で、とりあえずどんどん前に進んでしまう
・「理解できない領域」にも、「理解できないまま」触れておく
ということです。

「理解できないこと」を「理解できないまま」吸収すれば、情報は「理解できない領域」で栄養となってくれます。
「枠組みの外側」で、自分の一部となってくれるのです。
それが、新たな「自分」の範囲となります。
つまり、「拡張」です。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「舌触り」より）

「この吸収法に最も適しているのは「非言語化情報」です。」

「こうした学習法を当たり前のようにしている存在がいます。
それが「幼児」と「天才」です。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「身体感覚」より）

「『上達論』では、「論理は後追い」だと説明しました。
感覚は本来「論理」よりも「十年以上先を行くもの」なのです。
磨けば磨くほど、「先」へと行きます。

本来、論理は直観や感覚を裏付け・説明するためのものであり、「創造的飛躍」には適していません。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「わかる」より）

「本来は、誰にでもできる事なのです。
では、多くの人にそれが出来ないのはなぜか。
まず理由の一つは、先ほど述べた「一〇〇点思考の呪い」です。
もう一つの理由は、「論理の呪縛」です。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「野生」より）

「「論理」という呪縛から自らを解放する事。
これは「人間」という「理性」ある生物でありながら、眠っている「野生」の能力を引き出すという事を意味します。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「違和感」より）

「「何かおかしいぞ」と感じることのできる人間がどれだけ存在するか。」

「「違和感」を感じる事ができない人々が一定割合を超えた時、大多数の「なんとなく」はいつしか「熱狂」となり、熱狂は「狂気」へと変貌します。
大多数の「なんとなく」には、どんな天才も、英雄もかないません。
狂気となったうねりは加速がついているので、後戻りはできないのです
いつも間には加担者となっていた自分自身が「おかしい」と思う頃にはすでに崩壊が確定していれ、気づいた頃には将棋で言えば「一〇〇手」ぐらい後れています。
逆に言えば、本来なら一〇〇段階ぐらい前に「違和感」を察知し、早々に「手」を打っておかねばならなかったのです。

そうした「違和感」をいち早く察知するのが「身体感覚」であり、「想像力」です。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「芸術家」より）

「論戦で勝利すれば多数派に立ちやすいので、短期型思考の人は感覚肌の人達の「違和感」には「馬鹿」と断じ、見下す視点を持ちやすくもなります。

しかし、本当の「馬鹿」とは「待てない」人たちなのです。

序盤戦では「短期型」の方が圧倒的に強いですが、本質的に「掌握している領域」は「感覚肌」の方が広いからです。
その構造に、感覚肌の人たち自身も気づいていません。
「論理的」に構造が説明出来ないからです。
しかし、その違和感を見える形にできる人達がいます。
「芸術家」や「表現者」です。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「自分でやる」より）

「見回せば、「この世界」という最高に優秀な「教育者」に我々は囲まれている。
にもかかわらず、「大人の了見」で余計な事をしようとしてしまう。
それが、「教育」というものの根本的な問題だと私は考えます。」

「自分の手で「やる」事により、この世界の面白さ素晴らしさを。「失敗する」事により、この世界の「厳しさ」を、自ら学ぶことができるのです。」

「問題はそれほど難解でも複雑怪奇でもなく。できるだけ「早い段階」から、できるだけ「自分自身」でやらせ、考えるようにさせれば良いだけです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「外部委託」より）

「「自分の意志による選択」に伴うのは、そこに至るまでの考察。可能性の予測、経過の観察。結果の検証、反省、それらの経験の蓄積。蓄積の転用といった要素です。

こうしたサイクルは、「知識」や「セオリー」を無思考・無条件に使用する事と違って、「自分の頭で考える」という、本当の知性を磨いてくれます。
「ただ誰かの選択に従う」というのは、これらのサイクルの多くを放棄することになります。
「俺の言う事を聞いていれば上手くいくよ」という指導者と、「無条件で従う人」の間には。目先の結果と引き換えに、「従う人の知性を削いでいく」という関係性があります。

それは、カルト宗教のような、洗脳して従わせる方法に通じます。」

「「優れた思想」に自分の思考を「外部委託」してしまい、「自分で考える機会」をどんどん削り取られ、「知性」が空っぽになって行ってしまうのです。」

「カルト集団による、外部からしたら滑稽にしか見えない奇行も、妄想型殺人や集団自殺も、元をたどれば「知の外部委託」から始まっています。

そしてその動機は「優れている」こと、「救いになる」こと、「素晴らしい」こと、「恍惚」、つまり、
「正しいこと」
です。

「正しい事こそ、一番危ない」のです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「家畜化」より）

「正しさに従い、美しさに感動し、正義に共振し、成果に目を奪われている間に、知性は空洞化し「依存構造」は深まります・
　度合いや形は違えど、我々はこの見えない呪縛に絡め取られているのです。

　それは「知の家畜化」とも言える現象です。
　これまで繰り返し述べてきたのは、「家畜」となった知性を「人」へと戻す思考法なのです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「三短思考」より）

「これまで述べてきた、人の知性を損なう三大要素が、「知の家畜化」と「無いことにする思考」、短気・短期・短絡的の「三短思考」です。
　これらの要素は、全て密接に関連しています。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「目先」より）

「「プライドが高い人」も要注意です。
「待つ」というのは、「プライド」の向こう側を見据える行為だからです。
　目の前の「勝ち」は譲るけれど、広い視野で見たメリットを取りに行く。
　一旦恥を受けいれ、次なる成長につなげる。
　こうしった思考がなかなか出来ず目先のプライドを守る事が最優先となり、同じ原理で行動を繰り返す度に、その精神性が増強されてゆきます。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「装置」より）

「「疑う」という行為は「猜疑心」「否定する」といったマイナスなイメージがあるかも知れませんが、「この世の全ての可能性に肯定的な行為」でもあるのです。
「目の前に存在するもの」「自分が最も信じがたいもの」に留まらず。それ等も含めた「あらゆる可能性に自己を開いた状態」だからです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「固定点」より）

「人間の知性を最も低下させる原因の一つは、「思想に固定点を作る」ことです。
　これがあると、実像と認識の間に大きな「ずれ」があっても、それを修正する事ができません。

　結果、「事実」の方を脳内で編集し始めます。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「点検」より）

「人は、「信じるべきもの」と「信じたいもの」を混同して処理しがちです。
　これが、世に対する視点の混乱や視野の狭窄を生むのです。

「信じるべきもの」とは、疑いや否定的見解を投げかけても耐え得るものです。
「信じたいもの」とは、疑いや否定を拒絶するものです。

　この「振り分け」ができない人間にとっての聖域は、本来「聖域」ですらないのです。」

（方条遼雨「第一部　身体という思想）～「原点」より）

「我々は言わば「自分」の専門家です。
「自分の日常」の専門家です。
「自分の常識」の専門家です。
　つまり、「自分」「自分の日常」「自分の常識」の専門馬鹿と言えます。
　この自覚かた始めない事には、「正確な状況認識」などできようはずもなく、「適切な行為」も程遠くなります。
　そして、そのために必要なのが「当たり前」を見直すことであり、「当たり前」を実行する事です。
　前者の「当たり前」とは、自分の中に凝り固まった常識のことです。
　後者の「当たり前」とは、「相対思考」「比較思考」をやめ、「事象を事象のまま見てみる」ということです。」

（甲野善紀・方条遼雨「第二部　対談　身体的運命論）～「クリエイティブ」より）

「方条／先ほど先生が、身体の上手な使い方みたいなものは「学校の教育では教えてくれない」と仰っていましたけれども、欠点をプラスにするって「クリエイティブ」な事だから、学校で教えてくれないですよね。
　学校では「いろんなものを変えないように再現しろ」っていうのが現在のほぼ教育ですから、クリエイティブと正反対なんですよ。
　クリエイティブってある意味、極みは「不要なものを有効にする」事ですから。
　それって思考回路の「反転装置」なんです。
　もうほとんど、ごみレベルのものを価値あるものに変えてしまう、錬金術みたいなものですから。で、それを自分の内部の搭載する。
　それ自体が、すごく創造的な過程ですから。」

（甲野善紀・方条遼雨「第二部　対談　身体的運命論）～「運命のポテンシャル」より）

「一般的に言ったら「悪い」とされる事にも、自然と反転装置を使っていたんじゃないかってだんだん自分でも分かってきて、
　そうするとそもそも、構造的に「悪いこと」ってあんまりないんです。
「長所即欠点」と同じように「欠点即長所」ですから。
　どんな状況でも見方によっては良い側面が必ず存在するはずなんです。

　だから新型コロナウイルスで世界的にパニックが起きた時に、すごく分かれるなって思ったのは、コロナ禍ですごくマイナスになった人と、むしろプラスになった人がいるなって、周りを見ていて思いました。

　端的に言えば、コロナ禍でいい事があった人がすごく多いんです、周りに。
　でも考えてみるとウイルスって「現象」に過ぎないから、「良い」も「悪い」も本当はないんですよね。
　それは人間が善でも悪でもなく、いろんな要素が中にあるように、いろんな要素の集合体ですから、現象って。
　病気が悪いとか、死ぬのが悪いとか決めちゃっていると、その状態の中にある「いい要素」が見えないんです。
　価値観に照らし合わせて、「悪いところ」を作っちゃいますからね。」

「だから身体も。「使い切りたい」って思うんですよね。おそらく。
　「運命」にもそういうのがあって、訪れた「運命のポテンシャル」を「善し悪し」で選別なんかしたらもったいないと、どこか思っている。」

（甲野善紀・方条遼雨「第二部　対談　身体的運命論）～「役割」より）

「甲野／私の今までの人生を振り返ってみても、二十一歳の時「人間の運命は完全に決まっている」っていうのと、「自由だ」という事が同時にある、という事に気付いてこの時以降は、それを実感しようという事を人生のテーマにしてきたわけですから。
　このことを言葉を換えて言えば「わが身に起こることがすべて必然」って納得出来るかどうかを問われているようなものですから。
　だから、この感染症対策で「なぜあんなおかしなことを言っているのだろう？」と私が思う発言や行動をしている人達に対しても、ある面では本気で「しょうもないな」と腹も立つんですけど、同時に「あぁ、この人はそういう事を言うお役目なんだ」っていう思いが、常にどこかにありますから、心の底からは腹が立たないんですよ、その人達に対しても。
　この人生の中で、「人は様々な役割が振り当てられているな」っていう感じがしていますから。」

◎甲野善紀
1949年東京生まれ。武術研究者。20代の初めに「人間にとっての自然とは何か」を探求するため武の道に入り、1978年に「松聲館道場」を設立。以来、剣術、抜刀術、杖術、槍術、薙刀術、体術などを独自に研究する。2000年頃から、その技と術理がバスケットボール、野球、卓球などのスポーツに応用されて成果を挙げ、その後、楽器演奏や介護、ロボット工学などの分野からも関心を持たれるようになった。2006年以降、フランスやアメリカから日本武術の紹介のため招かれて講習を行なう。2007年から3年間、神戸女学院大学の客員教授も務めた。2009年から森田真生氏と「この日の学校」開講。
著書に『剣の精神誌』、『できない理由は、その頑張りと努力にあった』、『自分の頭と身体で考える』（養老孟司氏との共著）、『薄氷の踏み方』（名越康文氏との共著）、『巧拙無二』（土田昇氏との共著）、『古の武術から学ぶ 老境との向き合い方』、『古武術に学ぶ 子どものこころとからだの育てかた』など多数。

◎方条遼雨
天根流（あまねりゅう）代表。エッセンシャル・マネジメント・スクール顧問・講師。
身体思想家／心体カウンセラー／玄武術家／身体思想によるアドバイザー
甲野善紀、中島章夫に武術を学ぶ。両師の術理に独自の発見を加え、「心・体の根本原理の更新」と「脱力」に主眼を置いた「玄運動（げんうんどう）」「玄武術（げんぶじゅつ）」を提唱。師の甲野と共著の出版・合同講師も務める。「心と体は完全に同一である」という独自理論から、「心体コーディネート」「ふかふか整体」を考案。分野を問わず「心・体の使い方」を伝える。提唱する理論を元に組織・ビジネス・政治・芸術・体育など分野を問わないアドバイザーとしても活躍している。

☆mediopos-3178　2023.7.31

「食べる」のは
口から摂取する「食べもの」だけではない

宮沢賢治がじぶんの童話が
読む人の「すきとほつたほんたうのたべもの」
になることを願ったように
物語も食べものになる

「食べる」ということは
私たちの感官や心を充たす
あらゆる「欲望」や「願い」を
「食べる」ということでもある

赤坂憲雄は現在『ユリイカ』で
「物語を食べる」を連載している
（『奴隷と家畜』という本になっている）

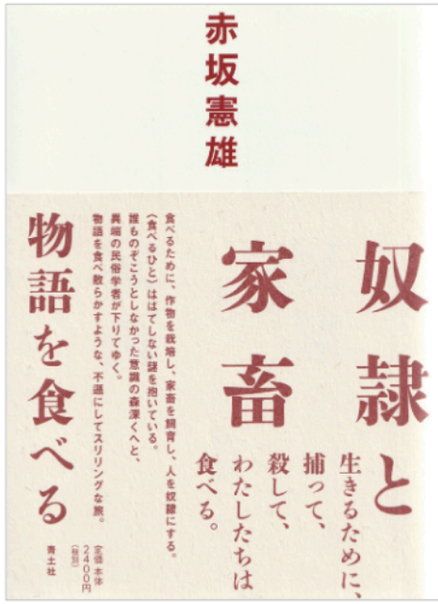
それは「食べることをめぐる膨大なテクスト」を
読み解いていくエッセイだが
その最初に寺田寅彦の随筆「詩と官能」から
「食べることと詩とが複雑、精妙にして、
官能的な交歓の関係を底に沈めている」こと
についてふれている

寺田寅彦は「食べることに特異な関心を寄せ、
できごとの記憶と食とは密接に絡んでいたらしい」

そしてそれはその「詩」とも深く関係しているようで
「どうも自分の詩の世界は
自分のからだの生理的機能と密接にからみ合っていて
直接な感官の刺激によってのみ
活動しているのではないかという気がする」のだという

ちょうど美術評論家・椹木野依のエッセイ
「音を食って物がなくなる」（新潮2023年08月号）にも
「食べる」ことについての興味深い示唆がある

椹木氏（1962年生まれ）はそれまで
音楽に魂を取られたようになっていたのが
「なにを聴いても心に染み渡ることがなく」なり
「自分でも驚くほど新しい音楽を求めなくなった」
のだという



▪赤坂憲雄『奴隷と家畜／物語を食べる』（青土社 2023/4）
▪寺田寅彦「詩と官能」
　『寺田寅彦随筆集 5』（岩波書店; 改版 1963/6）
▪椹木野依「音を食って物がなくなる」（新潮2023年08月号）

「耐用年数」を超えたからなのだろうか
そう自問しながら
どうしてそうなったのかを

洲之内徹が「いい絵かどうかは盗んでも
自分のものにしたいと感じるかどうか」
つまり「鑑賞というよりも摂取したい、
つまりは食ってしまいたい」
ということだったことから

自身のその変化を
「わたしの中でかつて音楽が果たしていた役割を、
今度は食が果たすようになった」のだろうと思いあたり

いまは「よい食に恵まれたとき」
「かつて音楽から得ていた感覚に極めて近いものを
享受している」という気がするのだという

洲之内徹も最晩年になって
音楽に耽溺しはじめたのだそうだが
椹木氏は「聴く」ことから
「食べる」ことのほうに変化したというのである

ひとはあらゆるものを「食べ」て生きているが
椹木氏の変化は
寺田寅彦の「食べること」への関心のように
もっとも直接的な「食べる」という体験を
求めはじめたということなのかもしれない

それが欲望の底なし沼ではなく
やがて「すきとほつたほんたうのたべもの」へと
向かう道でありますように

▪赤坂憲雄『奴隷と家畜／物語を食べる』（青土社 2023/4）
▪寺田寅彦「詩と官能」
　『寺田寅彦随筆集 5』（岩波書店; 改版 1963/6）
▪椹木野依「音を食って物がなくなる」（新潮2023年08月号）

（赤坂憲雄『奴隷と家畜／物語を食べる』〜「第一章／胃の腑と官能のあいだ」より）

「食べることについて、わたしたちは多くを知らないのかもしれない。『性食考』（岩波書店）のなかで、食べちゃいたいほど可愛いという愛の囁きを起点にして、食べること／交わること／殺すことが交錯する妖しい精神史的な景観に、眼を凝らしてみた。思いがけず、食べるという行為やできごとについてかぎりなく無知であることに気づかされた。まるでパンドラの箱をなんの準備もなく空けてしまったように、うろたえている。

　食べることの不思議を、あくまで文字や映像の織物を仲立ちにして追いかけてみたい。食べることをめぐる膨大なテクストの群れに取り巻かれながら、そこに埋めこまれた小さな物語を掘り起こし、つれづれにその読み解きを重ねてゆく。体系的な思考はもとより不可能であり、だから、これはなんなるエッセイである。

　物語を食べる、マンガを食べる、映像を食べる、なんでも食べる。いつだって、味わい深いテクストを探している。テクストの森のなかを、まるでお菓子の家を探すように徘徊している。さりげない随筆がときに、食べることへの迷宮の入口となる。エッセイという形式には、油断と隙間がつきものだ。それは無意識がつかの間顕れる採掘現場である。

　あるとき、寺田寅彦は帰朝したばかりの夏目漱石を訪ねた。寿司をごちそうになった。寺田自身は気づいていなかったが、あとでこんなことを聞かされた。師匠の漱石が海苔巻きに箸をつけると、弟子の寺田も海苔巻きを喰う。漱石が卵を喰うと、寺田も卵を取りあげる。漱石が海老を残したら、寺田も海老を残した。漱石の死後に出てきたノートのなかに、「Ｔのすしの食い方」という覚書が残されてあった、とか（「夏目漱石先生の追憶」」（『寺田寅彦随筆集』第三巻、岩波文庫）。漱石はじっと観察していたにちがいない。共食の場面では、とりわけ大切な人とのあいだでこうした共振れが起きやすいことは、経験的にもわからないではない。わずかな時間のズレを抱いて、あの人と同じものを口のなかに放りこみ、噛みしだき、呑みくだす。どこまでも無意識に、その薄暗い朱（あけ）色の劇場では、あの人と見えないドラマが共有されている。漱石はたぶん、それが師匠と弟子のあいだのホモソーシャルなまぐわいであることに気づいていたにちがいない。

　漱石は草色の羊羹が好きだった。レストランにいっしょに行くと、青豆のスープはあるかと聞いた、という。寺田の別のエッセイにも、自身の日記には喰い物の記事が多く。そうした漱石先生とどこでなにを喰ったというようなことが、やたらに特筆大書されている、と見える。どうやら、寺田にはできごとを、その時に食べた食物との連想で記憶するという嗜癖があったらしい。このエッセイは「詩と官能」（『寺田寅彦随筆集』第五巻）と題されていた。

　はじまりには、まるで錬金術の呟きのように、こんな捉えどころのないことが語られていた。あるとき、小さな炎が明るい部屋の陽光のした、鈍く透明にともると、その薄明のなかに細かい星屑のような点々が燦爛として青白く輝くが、その瞬間にはもう消えている。そうして突然、不思議な幻覚に襲われるころはしばしばある、という。言葉で表すことがむずかしい夢のようなものだ、ともいう。

　もしかすると、それは偏頭痛の先駆けのように、不意にやって来る極彩色の光の散乱なのかもしれないと、偏頭痛持ちのわたしは想像する。一瞬にして視野が狭まり、眩暈に襲われる、ぐにゃりと空間がゆがむ。どんな幻覚であったのかは語られていない。たしかなことは知らない。それでも、すぐあとに、こんなことが語られていた。詩的な、官能的でもある幻覚であったはずだ。

　　胃の腑の適当な充血と消化液の分泌、それかが眼底網膜に映ずる適当な光像の刺激の系列、そんなものの複合作用から生じた一種特別な刺激が大脳に伝わって、そこでこうした特殊の幻覚を起こすのではないかと想像される。「胃の腑」と「詩」の間にはまだだれも知らないような複雑微妙の多様な関係がかくされているのではないかと思われる。

　寺田寅彦は物理学者にして、随筆家・俳人として知られる。わたしなどは東日本大震災のあとに、その地震や天災をめぐる秀逸なエッセイを通してはじめて、この人との邂逅を果たしている。いかにも自然系の学者らしい語彙が重ねられて、あの幻覚の意味が説き明かされているが。なにやらあやしげではある。そして、胃の腑つまり食べることにと、詩のあいだには。いまだ知られていない「複雑微妙の多様な関係」が隠されているのではないか、というところに、唐突に着地している。食べることに特異な関心を寄せ、できごとの記憶と食とは密接に絡んでいたらしい。このマルチな奇才の文人学者にとって、食べることと詩とが複雑、精妙にして、官能的な交歓の関係を底に沈めていることの気づきは、避けがたい必然の帰結ではなかったか。」

（寺田寅彦「詩と官能」より）

「どうも自分の詩の世界は自分のからだの生理的機能と密接にからみ合っていて直接な感官の刺激によってのみ活動しているのではないかという気がするのである。これはあまり自慢にならない話のようである。しかし詩人の中にもいろいろの種類があって。抽象的精神的な要素の多い詩を作る人がある一方ではまた具象的官能的な要素に富んだ詩に長じた人もあるようである。自分の見るところでは、俳人芭蕉などはどちらかと言えば後者に属するのではないかという気がする。もしそうだとすると、官能的であるということ自身がそれほどいけない事でもなさそうである。

　科学的にもやはり抽象型と具象型、解析型と直観型があるが、これがやなり詩人の二つの型に対応されるべき各自に共通な因子をもっているように見える。

　詩人にも科学者にもそれぞれの型について無限に多様な優劣の段階がある。要は型の問題ではなくて、段階の問題だけであるらしい。（昭和十年二月、渋柿）」

（椹木野依「音を食って物がなくなる」より）

「あるときから、なにを聴いても心に染み渡ることがなくなった。音楽の話だ、と言って済ませられればよいのだが、わたしはおおよそ中学に入った頃から音楽に魂を取られたようになった身なので、かんたんではない。

（･･･）

　なぜそんなことになったのか。それはわからない。わからないのだけれども、その時々に自分の心に染み入る音楽が流れてくるとわたしはなにか陶然としたような気持ちになり、その世界に時間を忘れて没入した。だが、その感覚は同時に速乾性のものでもあって、自分のなかで次々と新しい音源を求める動機にもなっていた。ところが、30歳を過ぎた頃からだろうか。20歳代までとは打って変わって、自分でも驚くほど新しい音楽を求めなくなった。音楽から得られる刺激を貪欲に更新してきた自分も歳を重ね、「懐メロ」として心の底に居所を見つけたのだろうか。いや、それは違う。なぜなら、わたしは20歳代までに自分の心に植え付けた音楽を今度は繰り返し聴くことで、今度はそれに懐メロとなる余裕を与えなかった。かつての音楽はいつも今の音楽であり、今の景色とともにあり、回顧的な懐かしさを伴ういとまがなかった。

　思うに、音楽は小説や映画に比べて繰り返し体験するのが比較的しやすい。ある程度まとまった量の小説を読み切るには一日では足りないし、映画にして最低で１時間半はかかる。美術を観るには美術館まで行かなければならないし、演劇はもっと面倒だ。（ちなみにわたしは音楽のライヴにはめったに行かない）。美術も複製で良いと言うなら画集で済ませることもできなくはないが、しかし音楽のように聴きながらほかのことをすることができない。逆に言えば音楽は（事実、いまわたしが音楽をかけながらこの原稿を書いているように）なにかほかのことをしながらでも聴けてしまうのでーーーーたとえば小説を読みながら料理を作るのは極めて難しーーーー人生そのものでわたしが音楽に費やしてきた時間を考えると、驚くほどの総量となるはずだ。

　と言うことは、かつてわたしがあれほどまでに好きだったそれらの音楽が、なにを聴いても心に染み入らないということは、同じ音楽をあまりにも繰り返し聴き続けたことで、とうとう心のなかの耐用年数を超えたのだろうか。分野を問わず、名作は味わえば味わうほど深みが増すというけれども、そのようなもの言いが、たとえば小説を何百回も読むことを前提にしているとは思えない。でも音楽ならそれができてしまう。
（･･･）
音楽はすでに「摂取」と呼んだほうがふさわしいものにかなり前からなっている。そうして、もし同じ音楽が頭の中で何百回でも再現＝摂取可能になれば、それが持つ習慣性が擦り切れてしまって不思議はない。実際にわたしは、音楽をめぐる技術革新のおかげで、かつてなら寿命が何百歳にでも届けば可能になったはずのことを、せいぜいが還暦を迎えたくらいで達成してしまっている。

　だけれど、（･･･）実は単にそういうことでもないのではないか、と最近思うようになった。というのは、いま還暦をひとつの区切りに出したように、そして先ほど音楽を繰り返し聴くようになったのが30歳に差し掛かったあたりだったと書いたように、どうやら、どこには30年ほどを目安とする、耐用年数とはまた別の節目があるようなのだ。わたしが思い出すのは、頭抜けた絵の目利きで知られ、絶大な人気を誇った連作エッセイ「気まぐれ美術館」を残した画商、洲之内徹が、最晩年は音楽に耽溺し、余裕さえあればレコードを買って何時間でも聴き続けていたということだ。洲之内の絵の見方は評論家とは根本的に違っていて、いい絵かどうかは盗んでも自分のものにしたいと感じるかどうかであったが、それはようするに鑑賞というよりも摂取したい、つまりは食ってしまいたい、ということだ。

　そこで思い当たるのは。わたし自身、還暦に差し掛かってなにを聴いても心が動かなくなるのと相前後して、自分でもちょっと前とはっきり違うな、と思うくらい食に惹かれるようになったことだ。それをグルメと呼びたくはないし、呼ばない。というのは。わたしの中でかつて音楽が果たしていた役割を、今度は食が果たすようになったようなのだ。このような変化が、いったいどういうメカニズムによるものなのか、それは判然としないのだけれども、よい食に恵まれたとき、少なくともわたしは、かつて音楽から得ていた感覚に極めて近いものを享受しているという気がまちがいなくする。

　音楽も盗めなければ食も盗めない。それはどこまでいっても体験でしかない。絵が盗めるのは、それが物だからだ。わたしは洲之内に聞いてみたい。盗んでも自分のものにしたいのがよい絵だとしたら、あなたにとってよい音楽とはいったいどのようなものでしたか、と。そんなことを聞いて見たいのは。音楽に耽溺するようになるに従い、おそらくは洲之内の中でも、絵の持つ意味が大きく変化していたはずだからだ。もしも洲之内が、それは聴くだけではなく食ってしまいたいと感じるかどうかだ、と答えるとしたら、このエッセイももう終わりに近い。というのも、たとえ相手が絵であっても、盗んでも自分のものにしたいかどうかは、突き詰めれば、それを食ってしまいたいかどうかーーーーそうすれば物は物でなくなるーーーーであったはずだからだ。」

◎赤坂憲雄(あかさか のりお)
民俗学・日本文化論。学習院大学教授。福島県立博物館館長。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教授として東北文化研究センターを設立し、『東北学』を創刊。2007年『岡本太郎の見た日本』(岩波書店)でドゥマゴ文学賞受賞、同書で芸術選奨文部科学大臣賞(評論等部門)受賞.『異人論序説』『排除の現象学』(ちくま学芸文庫)、『境界の発生』『東北学/忘れられた東北』(講談社学術文庫)、『東西/南北考』(岩波新書)など著書多数。

◎椹木野衣(さわらぎ のい)
1962年埼玉県生まれ。故郷の秩父で音楽と出会い、京都の同志社で哲学を学んだ盆地主義者。美術批評家として会田誠、村上隆、ヤノベケンジら現在のアート界を牽引する才能をいち早く見抜き、発掘してきた。既存のジャンルを破壊する批評スタイルで知られ、蓄積なしに悪しき反復を繰り返す戦後日本を評した「悪い場所」(『日本・現代・美術』新潮社)という概念は、日本の批評界に大きな波紋を投げかけた。ほかにも読売新聞(2010-2011)、朝日新聞(2017-)の書評委員としてあらゆる分野にわたる書評多数。多摩美術大学教授にして岡本太郎「芸術は爆発だ! 」の精神的継承者。芸術人類学研究所所員も務める。1児の父。
おもな著書に、『シミュレーショニズム』(増補版はちくま学芸文庫)、『反アート入門』『アウトサイダー・アート入門』(ともに幻冬舎)、『太郎と爆発』(河出書房新社)、『後美術論』(美術出版社、第25回吉田秀和賞)、『震美術論』(美術出版社、平成29年度芸術選奨文部科学大臣賞)。

☆mediopos-3179　2023.8.1

外山滋比古といえば『思考の整理学』だが
本書『自然知能』は
九十歳を超えた頃書かれ
扶桑社内に保管されていた未完原稿である
（氏は二〇二〇年に亡くなるが
書かれたのはその三年前の二〇一七年の春頃）

刊行にあたっての経緯については
娘の外山みどりにより
「刊行にあたって」として
巻末に収められているが
人工知能が問題化されている今だからこそ
本書を刊行する価値があるとの判断だったそうだ

二〇一七年頃はまだ現在のように
ＡＩはクローズアップされてはいなかったので
当時の状況を背景としているが
その問題意識は現在のほうが
むしろより意味深い視点となり得ている

たとえば外山氏とほぼ同世代である
（二〇二三年の一二月で九五歳になる）
現代アメリカの言語学者・哲学者である
ノーム・チョムスキーは
二〇二三年二月八日の「ニューヨーク・タイムズ」紙に
「チャットＧＰＴという偽りの希望」という論考を投稿し
生成ＡＩをめぐる議論の不毛性を厳しく批判している

「自然知能」という言葉は
「人工知能」という言葉に対して
外山氏によって作られた言葉で
人間が生まれながらにしてもっている
知能のことを意味している

「自然知能」は
ＡＩの持ちえない能力であるが
「人工知能」が議論されるなかで
ともすればなおざりにされかねない

「人工知能」を先行させるかのごとく
「自然知能」をスポイルし
その発達によってひらかれる創造性を
閉ざしてしまいかねない教育さえ行われている

「人工知能」は
泣くことも笑うことも
「おもしろい」と感じることも
「気配」を察知することも
マイナスの経験から知恵を磨くことも
嗅覚で「おかしい」と感じることも
知的なものとも関わる味覚を育てることも
手や足で考えることも
耳の可能性を育てることも
意味ある雑談から学ぶことも
できない

できるのは
プログラムされていることだけだ

「人工知能」はあくまでも
それがどんなに優れた能力を発揮するとしても
人間の「道具」を超えるものではない

人間が人間でしか持ちえない「自然知能」を
たしかに育ていくことを怠ってしまうならば
その退化し衰えた五感をもった存在として
「人工知能」より劣った人間を演じるだけの
悲しい存在でしかなくなってしまうことになりかねない

▪外山滋比古『自然知能』（扶桑社 2023/7）

▪外山滋比古『自然知能』（扶桑社 2023/7）

（「01 〝自然知能〟が泣いている」より）

「人工というのは、自然に対比されることばである。人工知能というからには、自然知能がはっきりしていなくてはおかしい。
　その「自然知能」だが、ことばを聞いたこともない、というのは、明らかに順序が逆であると考える。
　自然知能はあって、そのあと、人工知能があらわれるのが順序である。人工知能が先行するのはおかしい。
　人間は生まれながらにして自然知能を持っている。
（･･･）
　昔、昔、そのまた昔から、自然知能は名もなく放置されてきたのである。そのため人間は進化がおくれた。そういうことを考える人もなかった。人工知能があらわれてようやく、自然知能が存在しなくてはいけない、ということがわかるようになった。
　それにもかかわらず、自然知能ということばもない。本書が書名にこれを掲げたのは冒険であるかもしれない。
　人工知能は大人の仕事である。
　自然知能は生まれて数年の間、最大の力を持っていて。賞味期間の間に、だんだん小さくなっていくように考えられる。
　運よく生き延びた自然知能は十五、六歳になると、〝天才〟として開花する。」

「いつまでも、自然知能を声なく泣かせておくのは人類の恥である。少しでも早く、自然知能に、本来の働きをしてもらえるようにするのが、いまの人間の務めであるように思われる。
　いま、自然知能は、名もなく、声もあげず泣いているようであるが、昔の人が言ったように、泣く子は育つ、と信じたい。」

（「02　生まれながら」より）

「いま、人工知能をよく理解するのは一部の専門家にとどまる。知識人でも文学的教養を持っている人は、人工知能に冷淡である。それに対して、自然知能は人間知能で、すべての人間が持っている能力である。
　そういう人間知能をとびこえて、人工知能を考えることは難しいのである。」

「キカイ的人間になりたいのなら別だが、人間らしい人間として生きるには、持って生まれた自然知能を高めなくてはならない。」

（「04　生得的能力」より）

「考えてみるよ、医療は人間の創り出した文化である。それによって、救われた命はおびただしい。
　しかし、医療は、病気を減らすことはできない。むしろ、新しい病気を見つける。新しい病気や故障を創出しているのかもしれない。医療が病気を増やし、それを治療するというのは人間にのみ与えられた力であろう。ほかの動物は、医療がないから、病気も少ない。病気になれば、自分の力で治そうとする。うまくいかなければ死ぬのである。
（･･･）
　そういう自然力頼みでも、多くの動物は生きることができる。余計な心配はしない。自然にまかせて、病気、怪我を乗り越えようとしている。自然力のままに生きているのだが、一概に不幸であるとは言えないであろう。
　人間は知識というものを持っている。技術というものを使うことができる。知識や技術を使えば、自然力だけではどうにもならないことを、うまく処理できる。
　それはありがたいことであるが、眠っているものを揺さぶり起こすということもないとは言えない。まして自然の力を殺してしまう。
　知識はまことに有用であるが、使い方を誤ると、不幸、病気を招き入れかねない。
　人間の不思議なところである。」

「人間の持っている自然知能を充分に発揮するには、よけいな知識を持たないことである。
　少し具合がおかしい、と言うと、すぐ病院で受診するというのは、常識ある人のすることだが、賢明とは言えないことがある。」

「人工知能をいくら高めてみても、おもしろい生き方ができる保証はない。無知、無力、自然まかせの生き方は人間らしい喜怒哀楽を生み出すことができる。」

（「05 気配察知」より）

「危険の予知は生きるものにとってきわめて重要な能力で、生後の努力などに委ねることができないから、生まれつき、本能的な知能としてそなわっている。文化、文明によって、その危険が少なくなるにつれて、少なくなったと考えると、退化するもののようである。」

「人工知能は恐ろしいまでの力を持っているが、ひとりひとりの前にあるおもしろさをとらえることはできない。この点で、自然知能は人工知能に勝つことができる。
　まず、すべての人間がそういう知能を持っていることを認めるところから、新しい生き方ははじまる。ひょっとすれば、自然知能は人工知能より大きな、おもしろいことをとらえることができる。」

（「07　計算力」より）

「自然知能より人工知能のほうがすぐれていると知った日本は、自然知能である暗算能力を捨てて、電卓にウツツを抜かすことになった。」

「せっかくすぐれた自然知能を持っていたのに、人工知能によって、ひどい目に遭っている。
　いったん捨てられた自然知能、ふたたび甦ることはないであろう。
（･･･）
　計算力は、自然知能の大事なひとつである。それがキカイによって破壊されようとしているのを、進歩と考える思想は万能であろうか、考える必要がある。
　未来に生きる子供にとって、自然知能を大切にしないことが、マイナスにならないか、吟味しないと、人間文化は危うい。
　ことに教育にかかわる人たちは、このことを深刻に考えないといけないように思われる。」

（「08 経験知」より）

「自然知能を助けるもっとも大きな力は経験値で、子供のときはほとんど見向きもされない。年とともに経験を積む。その経験が、自然知能の助けをしてくれるのである。
　経験といっても、なんでもよいのではない。思いがけない幸運に出会ったというような経験はひとときの喜びにすぎない。（･･･）
　それに対して、マイナスの経験は痛切である。滅多なことでは挽回など考えることもできず、失敗の後遺症はなかなか消えない。
　その間に、人間はいろいろなことを学ぶのであろう。二度と同じ失敗をすることは少ない。マイナス経験は苦労となって。心の中に居座るようである。苦労は賢く、用心深く、強情である。失敗する前より、失敗した後のほうが、人間がよくなり、賢くなっているのだが、失敗にこだわているうちは、なかなかそれに気付かない。しかし、その間に、確実に、人間性を高めているのが普通で、昔の人が「災いを転じて福となす」と言ったのも、この間の心の機微に触れたものである。
　経験値がマイナスから生まれるのは、人間の宿命なのであろう。生まれつき溢れるような天分を持ち、それをうまく伸ばして、驚くべき成功を収めた人が、中年になり、高年になってむしろ、みじめなことになる例は、自然知能の衰退を経験値で補い切れなかったのである。
　恵まれた環境で育った人は、不幸な生い立ちの人に比べて、経験が足りない。ものを考えない人は、不幸を憎むけれども、本当に人間の成長を考えるとき、不幸が足りない、失敗を知らないというのは、たいへんなマイナスであることがわかる。」

「一般には、記憶力が強く、いつまでも忘れないでいるほど頭がよいように考えられているが、本当にすぐれた頭脳は、不要なことをさっさと忘れる。いくら忘れるといっても、すべてが忘れられるわけではない。
　忘れきれなかったことから、新しいものが生まれる。記憶した通りを再生すれば、模倣ではあるけれどもそれを抜け出せない。忘れて忘れて忘れきれなかったことの中から、新しいことが生まれる。」

（「10　愉快力」より）

「実は、笑うことができるのは、たいへんなことで、人間の特技と言ってもよい。イヌやネコは笑わない。
　くすぐって笑わせるのは別として、笑うのは頭の働きである。知能によってヒトは笑うのであろう。知能がはっきりしない動物では笑いは生まれない。泣くのは人間と同じように泣くことができる。
　人工知能は泣くこともできないし、ましてや、おもしろいことがあっても、笑うことはできない。」

「われわれが、〝おもしろい〟ことを求めるのは決して退廃ではない。創造への泉であるといってよい。
　ただ、その〝おもしろさ〟の感覚が成長するのは、幼少のころに限るということがポイントで、万人が天才的可能性を持って生まれてくるのに、本当の天才が、きわめて少ないのは、自然知能を放置しているからで、惜しむべきこと言わねばならない。
　その〝おもしろさ〟の感覚から愉快力が生まれる。」

（「12　嗅覚」より）

「嗅覚は動物のみにある感覚である。」

「生まれたばかりの子は、母親をニオイで感知するらしいが、離乳するころには、その識別を忘れてしまうらしい。
（･･･）
　思春期になると、嗅覚ははっきり弱化する。そして、中年になると、香水を求めるほどになる。
　普通の大人は、嗅覚を意識することが少ないが、それで不便、不都合は少ないようである。」

「人間の嗅覚には心理的作用をともなっている。
　おかしい、臭い、ということを感知するのが心理的嗅覚である。はっきり正体を突き止めるこっとはできなくても、なんとなく、クサイと感じることがある。どことなくニオウ、ということもある。形而上的嗅覚で、ふつう、勘といわれるものである。
　この嗅覚的な勘は、悪いことに対して働くことが普通で、喜ぶべきことの予感にはならない。」

（「13　味覚」より）

「味覚は、案外、大きな力を持っていて、たんに健康のためばかりでなく、広く、知的能力にもかかわっている。味読とか味解などということばがあるのは、味覚能力が、ほかの面にも広がっていることを暗示させる、うまい、とか、まずいとかも、広く、いろいろに用いられるのも、味覚の力を暗示するように思われる。
　味覚を大切にするんは、自然知能を重視することである。人工知能があらわれた現在、その意義は増大している、といってよい。」

（「14　手のはたらき」より）

「〝目は口ほどにものを言い〟ということばがある。（･･･）
　その伝でいくと、手は口ほどに、ものを言うとすることもできる。
（･･･）
　「日本人は目で考える」と言ったのはブルーノ・タウトであるが、日本人は手で考える、ということもできる。」

「触覚の力は、文化創造と深くかかわりあっていることは、これまでの歴史でも明らかなところである。
　手の力は、新しい文化を生む、というのは人工知能が注目される中にあって、きわめて重要な考え方であるように思われる。」

（「16　聞き分け」より）

「もっと、耳を大事にしないといけない。聞き分ける力が、人間知能の根源であることを常識にしないと、日本の文化の発展は望み薄になる。
　いま、自然知能が求められている。耳の育成を放置しておくのは賢明でない。」

（「17　しゃべる」より）

「下らないゴシップ的おしゃべりのとりこになれば、人生は退屈の連続になる。心あるものは、おしゃべりはするが、悪質おしゃべりは避けなくてはならない。具体的な心得をあげるならば、
　○身近な人を固有名詞つきで話題にしない。
　○なるべく、現在形、未来形の動詞を使う。
　○人から聞いた話の受け売りはしない。
　そんなことを言われては、言うことがなくなる、という人は、しゃべるのはやめて、聞き役にまわればいい。
　つまり、浮き世ばなれしたおしゃべりが価値を持っているということである。
　そういう知的会話ができればすばらしい人生がひらけると考えてよい。」

（「18　歩く」より）

「歩くのは、健康のためばかりではなく、思考力を高めるのに、もっとも有効であるということをよく解しないのが現代である。
　歩くのは、自然知能による思考力の強化にとって、かけがえのないものであるということを認めてもよいのである。
　歩行は自然知能の泉であると言ってよいだろう。」

（外山みどり「刊行にあたって」より）

「本書の著者、外山滋比古が他界したのは、二〇二〇年（令和二年）の七月であった。既に死後三年が過ぎようとしている。本書に収められている文章は、もちろんＡＩが死後に作成したものではなく、外山滋比古本人が、死の三年前、二〇一七年の春頃に執筆したものである。その原稿は、未完のまま、扶桑社内に保管されていた。
　その時期のことであるから、もちろん最近の人工知能のめざましい進化や、社会に与えた衝撃の大きさなどは知らないままに、本書は書かれている。人工知能については、囲碁や将棋の棋士がＡＩに負かされた話くらいしか出てこない。ただし本書が、人工的な技術の産物であるＡＩの進歩に対する漠然とした危機感から出発して、人間が本来もっている広い意味での知能、自然知能と呼べるようなものの重要性を論じ、人間が潜在的にもつ能力の可能性を伸ばし、開花させるにはどうすればよいかを考えつつ書かれたものであることは確かである。九十歳を超える年齢の著者にありがちな、老いの繰り言のような部分もあり、（･･･）これをまとめて、「自然知能」というタイトルのもとに出版してよいものか、心理学を多少学んだ娘のワヤシは躊躇し、原稿を未完のままに残す可能性も考えていた。
　それに対して、扶桑社の出版局長である山口洋子さんは、人工知能が社会の注目を集めている今だからこそ、このような本を出版する価値があると熱心に説き、私に翻意させる結果となった。」

【◎外山滋比古（とやま・しげひこ）
1923年、愛知県生まれ。お茶の水女子大学名誉教授。東京文理科大学英文科卒業。雑誌『英語青年』編集、東京教育大学助教授、お茶の水女子大学教授、昭和女子大学教授を歴任。文学博士。英文学のみならず、思考、日本語論などさまざまな分野で創造的な仕事を続けた。
著書には、およそ40年にわたりベストセラーとして読み継がれている『思考の整理学』（筑摩書房）をはじめ、『知的創造のヒント』（同社）、『日本語の論理』（中央公論新社）など多数。『乱読のセレンディピティ』『老いの整理学』（いずれも小社）は、多くの知の探究者に支持されている。

☆mediopos-3180　2023.8.2

池内紀『山の本棚』は
月刊誌『山と渓谷』に
二〇〇七年一月号から
二〇一九年一〇月号までの連載が
単行本化されたもの

雑誌は読んでいなかったが
池内氏が亡くなったのが
二〇一九年八月のことだから
亡くなる直前まで
連載が続けられていたようだ

「山」にちなんだ本
一冊一冊についての話を夜毎
山小屋であるいはキャンプ地で
氏の語りに耳を傾けているように
読みすすめることができる

紹介されている本は
いまでは絶版で入手できないものも多く
ほとんどがはじめて聞く話なのがうれしい

池内紀というと
ドイツ文学者・翻訳者で
エッセイストのイメージはあったが
山を歩いているということを知ったのは
日本の森を北から南まで三年かけて歩き
そのことが書かれていたエッセイ集
『日本の森を歩く』（二〇〇一年）がきっかけである

さて『山の本棚』で紹介されているなかから
幸い手元にあるということもあり
野尻抱影『星三百六十五夜』をとりあげてみた

エッセイの最初に書かれてあるように
『星三百六十五夜』は「一日一話式の本」である

▪池内紀『山の本棚』（山と渓谷社 2023/6）
▪池内紀（写真：柳木昭信）『日本の森を歩く』（山と渓谷社 2001/6）
▪野尻抱影『星三百六十五夜』（春・夏・秋・冬）
（中公文庫 BIBLIO　中央公論新社; 改版 (2003.2/5/8/11)

これは名言といった類の本ではなく
星の話でしかも各話がとても短いこともあり
その日その日の星の話を一話ずつ
もちろん夜更けに静かに読むのがいい

そういえば『山の本棚』に紹介されている各話も
買い求めてから毎夜少しずつ
お話を聞くように読みすすめている

「一日一話式」といえば
こうして毎日続けている
mediopositoとphotoposも同様で
夜も更けてから
夜空の星を探すように
心のどこかに描かれているであろうなにがしかを
探し当てて書き留めておこうとはじめた

街の空はあまりに明るく
山の夜空のような満天の星は見えないけれど
それでも心の夜空には
さまざまな星が織りなす
星座（コンステレーション）を見つけることができる

▪池内紀『山の本棚』（山と渓谷社 2023/6）
▪池内紀（写真：柳木昭信）『日本の森を歩く』（山と溪谷社 2001/6）
▪野尻抱影『星三百六十五夜』（春・夏・秋・冬）
（中公文庫 BIBLIO　中央公論新社; 改版 (2003.2/5/8/11)

（池内紀『山の本棚』〜野尻抱影『星三百六十五夜』より）

「一日一話式の本がある。一月一日に始まり十二月三十一日まで、一日ごとに一文がついている。何から生まれたのか知らないが、カレンダーについている教訓がヒントになったのかもしれない。そういえば名言集などによく使われる。
　毎日一つ名言に接していると人格が向上するのだろうか。朝は名言をかみしめていても、夜にはクドクドと小言をいったりしていないだろうか。人間は反省をする生き物だが、反省をすぐさま忘れる生き物でもあるからだ。
　その点、同じ一日一話でも、星の話はいいものだ。夜の空にあらわれて、朝には消える星の生理にもピッタリ合っている。
　当今の都会では、夜の星など望むべくもないからなおさらだ。オリオン、さそり座、源五郎星、獅子座、白羊宮、ハレー彗星‥‥‥。一年三百六十五日、毎日きっと星に出会える。星とともに眠りにつける。ミシュランのホテル・ガイドは超高級ホテルを五つ星で示しているが、たかだか五つであって、こちらは六つ星でも七つ星でも自由自在だ。
　ある世代以上の人は野尻抱影の名をよく知っている。「星の先生」として親しんだ。新星の発見にやっきになったり、やたらに高度な宇宙論をひけらかすのではなく、ながらく日本人が生活の中で大切にしてきた星のことを、噛んで含めるようにして話してくれた。もともとは英文学者なのでヨーロッパのことにもくわしい。古典や仏典の知識がたっぷりある。文人かたぎの泡影先生から教えられた星たちが、いまも記憶にくっきりと刻まれている。山小屋で眠れないとき、そっと外に忍び出て、ピンポン球のように大きな星たちを見上げていると、記憶がつぎつぎと甦ってくる。
　泡影先生の友人が千葉の三里塚に住んでいた。ある日の夕方、村の子供が駆け込んできた。「お月さまが二つ出た」というのだ。いっしょに野原に出てみると、東の空に満月が出ている。西の空にも大きな月があって、夕もやの中に沈みかけている。
　そのころ三里塚にはキツネやタヌキがどっさりいて、キツネに化かされた話がいろいろと伝わっていた。しかし、二つの月は狐狸妖怪のせいではない。夕空のフシギな現象が「化けた月」として紹介されている。巨大なジャンボ機が発着する三里塚に、ほんの数十年ほど前まではお月さまがたのしいいたずらをしていたなどと、はたして信じられるだろうか。
　ヨーロッパには「人がひとり寝ると、空に一つ星がふえる」という言い廻しがある。いつまでも眠らない子供に、そんなふうに教えて眠らせたのだろう。とすると大都市の夜空に星が少ないのは、夜ふかし人間がたむろしているせいである。そして山の夜空が満天の星に飾られているのは、山の住民たちが日暮れとともに、さっさと眠りにつくからだ。」

（池内紀『日本の森を歩く』より）

「口笛を吹いて歩いたこともある。切れ込んだ谷を見下ろしながら、削いだような痩せ尾根を四つん這いになって渡った。たいていは汗みずくになっていた。まる二日間、雪渓を見つめて歩いていて、目がガラス玉になった。あるときは大雨のなかで、イモ虫のように丸くなっていた。
　歩きはじめは一九九八年十月だった。阿寒湖畔の「一歩園」。べつに計画ずくでそうしたわけではないが、気がつくと、そんなはじまりになった。（･･･）
　楽しみのためにはじめた。とともに、ここで試みたことがあった。日本の森を巡って、さまざまな、たえまのない、思わざる出会いを書きとめていく。
　まず樹木との出会い。大きな森には何百年もの時間の層がある。樹木はその生き証人だ。
　風や雨や雪との出会い。春一番、五月雨、夕立、「八朔」とよばれる風の神の鎮めどき‥‥‥。森はまた生きた風土の生き証人でもあるだろう。
　それから、むろん、人との出会い。どれほど深い森であれ、きわめて古い時代から、そこは人と獣の十字路だっや。「人跡未踏」などと言われる原生林にも、人の跡がのこっている。生活のしるしが息づいている。そんな森びとの子孫たち。鳥や獣や魚のなかへ、まるで仲間のようにして入っていく侵入者であって、その人の背中を見ながら、へっぴり腰の新参者としてくっついていく。
　とにかく歩くこと。そして体験したところを報告する。報告をかさねていけば、そこに一つの連続があたわれる。組織体としての守男姿が見えてくる。樹木と獣と人との、それぞれの「異文化」のまじり合うところだ。理解するためには目の前にあるものから出発しなくてはならない。」

「風土をやしなった条件をつねに考えながら歩いた。まだら雪のはりつく無数のコブを越えた。雨ばかりのときもあった。
　巨大な森からのもどりでへばってしまい、おもわずしゃがみこむと、すぐさそばに可憐な花が顔を出していた。旅を一つ終えるたびに書きとめた。」

『金谷上人行状記　ある奇僧の半生』横井金谷
『私の古生物誌　未知の世界』吉田健一
『ムササビ　その生態を追う』菅原光二
『［図解］焚火料理大全』本山賢司
『山の声』辻まこと
『新編 百花譜百選』木下杢太郎　前川誠郎 編
『夢の絵本　全世界子供大会への招待状』茂田井 武
『チャペックの犬と猫のお話』カレル・チャペック　石川達夫 訳
「補陀落渡海記」井上 靖
『動物園の麒麟』　ヨアヒム・リングルナッツ　板倉鞆音 編訳
『チロル傳説集』山上雷鳥
『伊佐野農場図稿』森 勝蔵　石川 健 校訂　石川明範、山縣睦子 解説
『僕と歩こう　全国50遺跡 考古学の旅』森 浩一
『登山サバイバル・ハンドブック』栗栖 茜
『人生処方詩集』エーリッヒ・ケストナー　小松太郎 訳
『リゴーニ・ステルンの動物記　北イタリアの森から』
　マーリオ・リゴーニ・ステルン　志村啓子 訳
『種の起原』チャールズ・ダーウィン　八杉龍一 訳
『森の不思議』神山恵三
『気違い部落周游紀行』きだみのる
『北アルプストイレ事情』信濃毎日新聞社 編
『百物語』杉浦日向子
『孤島の生物たち　ガラパゴスと小笠原』小野幹雄
『娘巡礼記』高群逸枝　堀場清子 校注
『ファーブル記』山田吉彦
『きのうの山 きょうの山』上田哲農
『恐竜探検記』R・C・アンドリュース　小畠郁夫 訳・解説
『道具が語る生活史』小泉和子
『奈良大和の峠物語』中田紀子
『アルプスのタルタラン』アルフォンス・ドーデー　畠中敏郎 訳
「日本九峯修行日記」野田泉光院
「霊の日本」小泉八雲　大谷正信、田部隆次 訳
『日本の島々、昔と今。』有吉佐和子
『檜原村紀聞　その風土と人間』瓜生卓造
『日本の職人』遠藤元男
『山のABC』畦地梅太郎、内田耕作、尾崎喜八、串田孫一、深田久彌 編集
『虫の文化誌』小西正泰
『日本の放浪芸』小沢昭一
『雨飾山』直江津雪稜会 編
『酸ケ湯の想い出』白戸 章 語り　逢坂光夫 聞き手
『知床紀行集』松浦武四郎
『たたらの里』影山 猛
『越後の旦那様　高頭仁兵衛小伝』日本山岳会 編
『図説雪形』斎藤義信
『金毘羅信仰』守屋 毅 編
『サルのざぶとん　箱根山動物ノート』田代道彌
『照葉樹林文化とは何か　東アジアの森が生み出した文明』佐々木高明
『山で唄う歌』戸野 昭、朝倉 宏 編
『富嶽百景』葛飾北斎　鈴木重三 解説
『窪田空穂随筆集』窪田空穂　大岡 信 編
『にっぽん妖怪地図』阿部正路、千葉幹夫 編
『富士山に登った外国人　幕末・明治の山旅』山本秀峰、村野克明 訳
『星の文化史事典』出雲晶子 編著
『日本の食風土記』市川健夫
『山に生きる人びと』宮本常一
『植物一日一題』牧野富太郎
『日本之山水』河東碧梧桐
『日本アルプスの登山と探検』ウェストン　青木枝朗 訳
『伊予の山河』畦地梅太郎
『甲斐の落葉』山中共古
『現代日本名山圖會』三宅 修
『平野弥十郎　幕末・維新日記』桑原真人、田中 彰 編著
『山野記』つげ義春 編
『幻談』幸田露伴
『三角形』ブルーノ・ムナーリ　阿部雅世 訳
『江戸時代　古地図をめぐる』山下和正
『どうして僕はこんなところに』ブルース・チャトウィン　池 央耿、神保 睦 訳
『鉄道旅行案内』
『山野河海の列島史』森 浩一
『山の幸』山口昭彦 解説　木原 浩、平野隆久 写真
『甲斐の歴史をよみ直す　開かれた山国』網野善彦
『クマグスの森　南方熊楠の見た宇宙』松居竜五　ワタリウム美術館 編
『マルハナバチ　愛嬌者の知られざる生態』片山栄助
『対訳 技術の正体』木田 元　マイケル・エメリック 訳
『昭和自然遊び事典』中田幸平
『山岳霊場御利益旅』久保田展弘
『井月句集』井上井月　復本一郎 編
『きのこの絵本』渡辺隆次
『木馬と石牛』金関丈夫
『クモの網』船曳和代　新海 明
『写真句行　一茶生きもの句帖』小林一茶 句　高橋順子 編　岡本良治 写真
『火山列島の思想』益田勝実
『写真集　花のある遠景』西江雅之
『自然の猛威』町田 洋、小島圭二 編
『霊山と日本人』宮家 準
『ときめくカエル図鑑』高山ビッキ 文　松橋利光 写真　桑原一司 監修
『音楽と生活　兼常清佐随筆集』杉本秀太郎 編
『建築家の名言』Softunion 編
『町並み・家並み事典』吉田桂二
『新修 五街道細見』岸井良衛
『新 道具曼陀羅』村松貞次郎　岡本茂男 写真
『日本山海名産図会』
『秋風帖』柳田國男
『日本フィールド博物記』菅原光二 写真・文
『民間学事典』鹿野政直、鶴見俊輔、中山 茂 編
『東京下町1930』桑原甲子雄
『花の神話学』多田智満子　福澤一郎 装画
『絵図史料　江戸時代復元図鑑』本田 豊 監修
『東京徘徊　永井荷風『日和下駄』の後日譚』冨田 均
『幸田露伴 江戸前釣りの世界』木島佐一 訳・解説
『幕末下級武士の絵日記　その暮らしと住まいの風景を読む』大岡敏昭
『菅江真澄遊覧記』菅江真澄　内田武志、宮本常一 編訳
『天一美術館』
『谷内六郎の絵本歳時記』谷内六郎 絵と文　横尾忠則 編
『津浪と村』山口弥一郎　石井正己、川島秀一 編
『古道巡礼　山人が越えた径』高桑信一
『井伏鱒二全詩集』井伏鱒二
『JTBの新日本ガイド　名古屋 三河湾 美濃 飛騨』
『湯治場通い』野口冬人
『東海道五十三次ハンドブック』森川 昭
『科の木帖』宇都宮貞子
『光の街　影の街　モダン建築の旅』海野 弘　平嶋彰彦 写真
『ぼくは散歩と雑学がすき』植草甚一
『新版　娘につたえる私の味』辰巳浜子　辰巳芳子
『富士山の噴火　万葉集から現代まで』つじよしのぶ
『カントリー・ダイアリー』イーディス・ホールデン　岸田衿子、前田豊司 訳
『日本列島　地図の旅』大沼一雄
『山の文学紀行』福田宏年
『近世紀行文集成　第一巻　蝦夷篇』板坂耀子 編
『木』幸田 文
『和菓子を愛した人たち』虎屋文庫 編著
『神主と村の民俗誌』神崎宣武

◎池内 紀(イケウチ オサム)
1940年、兵庫県姫路市生まれ。東京外国語大学卒業後、東京大学修士課程修了。
神戸大助教授、東京都立大教授、東京大教授を歴任し、55歳から文筆業に専念。
フランツ・カフカをはじめとするドイツ文学の翻訳のほか、文学論、文化論、エッセー、詩集、小説など幅広い分野で数多くの著作がある。
ゲーテ「ファウスト」(1999~2000)で毎日出版文化賞。「カフカ小説全集」(2000~02)で日本翻訳文化賞、「ゲーテさんこんばんは」(2001)で桑原武夫学芸賞、「恩地孝四郎 一つの伝記」(2012)で読売文学賞。
2019年死去。

◎野尻抱影
1885-1977。横浜に生まれる。神奈川一中時代、獅子座流星群の接近以来、星のとりことなる。早稲田大学英文科卒業後、教職、雑誌編集等に携わる一方、天文書多数を著述。生涯を通じて星空のロマンと魅力を語り続けた。わが国における天文ファンの裾野を広げた功績は大きく、「星の抱影」と称される。冥王星の命名者としても知られる(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)

☆mediopos-3181　2023.8.3

二〇二一年一月に亡くなった
宗教民族学者・山田仁史の遺著
『人類精神史』は

Gott（神）・Geld（お金）・Google（情報）
という３つの「カミ」と

それぞれに対応する３つのリアリティ
Ｒ１（第一次現実）
「自他が直接に対峙してきた無文字の時代」
Ｒ２（第二次現実）
「文字を介してのコミュニケーションが増加した時代」
Ｒ３（第三次現実）
「仮想環境が増大し、情報の伝達における速度と量が
加速度的に増しつつある時代」
から考える人類の精神史である

この発想のきっかけになったのは
一昨日とりあげた外山滋比古の
『思考の生理学』で示唆されている
第一時的現実（物理的世界）と
第二次的現実（文字・読書・テレビ）からだという

いうまでもなく人類社会での環境は
Ｒ１→Ｒ２→Ｒ３と変化してはきたが
著者の基本的立場は
「「進化」よりもむしろ
「棲み分け」を重視」するものであり

しかもそれを主客二元論的な
ロゴス的世界としてではなく
全体を包含するレンマ的世界へと
方向づけようとしている

本書は「新型コロナウイルスの世界的感染拡大のなか
「これまでの日常や常識が大きく揺ら」いできたなかでの
危機感を伴った執筆であるということもあり

▪山田仁史『人類精神史　――宗教・資本主義・Ｇｏｏｇｌｅ』
（筑摩選書　筑摩書房 2022/12）

またそれが二〇二一年一月の著者の逝去によって
未完となっていることから
Ｒ１・Ｒ２・Ｒ３とその変化のたんなる概観を越え
さらなる展開に欠けている印象は否定できないだろうが

著者が最初に
人工知能（ＡＩ）の脅威をはじめ
「人類は今、その精神史上、稀有なる乱世を生きている」
と示唆しているとおり
現代を生きている私たちにとって
不可欠な認識を共有する必要性を
痛感したところから書かれたものだろう

本書では政治やメディアや医療における
さまざまな諸問題はとりあげられず
人間の霊性に関する示唆もとくにはないまま
さまざまな分野でのアカデミックな示唆を紹介していくような
単純な科学的視点をベースとしてはいるが

人類の精神のあゆみを歴史的にとらえながら
今後ますます進展するだろうＲ３と
それが人類に与える影響を多面的に考察し
そのなかでＲ１・Ｒ２が
それにどのように関わっていく必要があるかについての
重要な示唆となっている

▪山田仁史『人類精神史　――宗教・資本主義・Ｇｏｏｇｌｅ』
（筑摩選書　筑摩書房 2022/12）

（「筑摩書房編集部」より）

「本書の著者、山田仁史は惜しくも二〇二一年一月に逝去されました。本書は、完成間近であった遺稿をもとにしています。残念ながら第１章、第９章などに未完成の部分があります。」

（「第１章　三現実史観」より）

「人類は今、その精神史上、稀有なる乱世を生きている。
　もとは自らが生みだしたはずの人工知能（ＡＩ）に、高度な機能を与えたあげく、脅威さえおぼえるに立ち至った。（･･･）
　足もとを振りかえれば、明治維新と二度の大戦にくわえ、戦後の高度経済成長、そして平成における構造改革をへて、日本人というアイデンティティも大きく揺らいでいる。
　こんな世の中で、心を正常に保つことのほうがむずかしい。病んで引きこもるか、不安をかくして作り笑いをするか、開きなおって狂おしい欲望に身を任せるか。
　人間の精神が、実存の根底が、はげしく動揺している。」

「本書を名づけて『人類精神史』という。長い旅路になるが目的地は、現代の日本だ日本人とは何者か。その問いに答えを見つけるための道行きである。」

「現実というものは、複数存在する。私をとりまくリアリティの中には、いくつか質の異なる位相のものがある。（･･･）
　ひとつのきっかけになったのは疑いなく、故・外山滋比古の『思考の生理学』（初出一九八三年）だった。
　（･･･）その中に、こんな一節があった。われわれがじかに接している外界、物理的世界を第一時的現実と呼ぶならば、知的活動によって、頭のなかにつくり上げた現実世界は第二次現実と言える。そして従来の第二次的現実は、ほとんど文字と読書によって組み立てられていたが、二〇世紀も後半になってブラウン管、つまりテレビによる第二次的現実が大量にあらわれた。」

「［編集部より］
　以降、この第一次（的）現実を本書ではＲ１、第二次（的）現実をＲ２、後ほど出てくる第三次（的）現実をＲ３と呼ぶ。」

「・Ｒ１（第一次現実）：生身のヒトが自らをとりまく自然環境に依存し、自他が直接に対峙してきた無文字の時代
Ｒ２（第二次現実）：人間が造りだした人工環境の占める度合いが非常に大きくなり、文字を介してのコミュニケーションが増加した時代
Ｒ３（第三次現実）：ヒトの脳の究極の外部化としての仮想環境が増大し、情報の伝達における速度と量が加速度的に増しつつある時代」

「三つの現実は、三つの神に対応する（編集部注・Ｒ１の神はGot〔宗教的な神〕、Ｒ２の神はGeld〔お金〕、Ｒ３の神はGoogle〔情報〕。」

「本書の枠組みとなる三つの現実世界というのは、あくまでも理念型にすぎない。おおきく見れば、Ｒ１→Ｒ２→Ｒ３という順序で人類社会をとりまく主たる環境は変化してきたとも言えるが、別の見方をすれば。これらは棲み分けながら併存する面ももっている。
　このように「進化」よりもむしろ「棲み分け」を重視したい、というのが私の立場である。主客が対峙するロゴス的世界よりも全体を包含するレンマ的世界を志向する、と言えるかもしれない。」

「本書の執筆は、新型コロナウイルスの世界的感染拡大と時をおなじくして行われた。これまでの日常や常識が大きく揺らぎ。「ニューノーマル」「新しい生活様式」が叫ばれる。これまでのようなＲ１における、生身の人間同士の接触は避けるべきとされ、Ｒ３の領域は拡大してゆく。
　そこで失われるものも多い。思いがけなく知人と出会い、何気ない会話をかわすことの、なんと大切なことか。いとおしい日常。それが消え、アポイントをとった相手との、しかもマスク越しの会話がふえた。目はある程度ひゅおじょうを示してくれるが、口もとは分からない。笑っているのか、ふくれているのか。」

（「第１０章　未来へ進んでゆくために」より）

「二〇二〇年に起こったコロナ禍は、全世界に激震をもたらした。
　身近なところでは、単身赴任や満員電車など、おおきなストレスを強要してきた面もある近代社会を、乗り越えるきっかけになるのだろうか。Ｒ１・２・３という三つの環境がうまく棲み分けし、われわれが賢く使い分けることができれば、より望ましい未来が開けるのだろうか。
　Ｒ３の拡大していく今後の世界を、どうみるか。Ｒ１とＲ２を経た人類の、弁証法的な発展の契機とみる向きもあろう。だがそれでは、近代をささえてきた発展史観の延長にすぎないようにも思われる。むしろＲ１・２・３の棲み分けをめざした方が、より居心地のよい世界に迎えるのか。
　たとえば新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、二〇二〇年の三月からは沿革運動を導入する企業がふえ、また新年度、大学の授業はオンラインで開始された。壮大な社会実験の始まりであった。
　これで明らかになったのは、ある程度はＲ３で行ける、ということである。むしろテレワークによって自由時間がふえ、「社畜」ではない人間的なくらしが実現した例もあるだろう。
（･･･）
　しかし一方で、われわれ人間が結局はフィジカルな地政学的単位にしばられた存在だ、という事実もまた、突きつけられてしまった。コスモポリタンなどというユートピアは。言語共同体という基礎なくしては成り立たない。それはわれわれの精神が言語行為とふかく結びついていることからの、当然の帰結でもある。
　言い換えれば、これは和辻哲郎が看破していたように、カント的な人類学か、ヘルダー的な民族学か、という対置でもある。人類の普遍的理性を信じ、全世界が共通でめざすべき理想をかかげたのがカントだったとすれば。ヘルダーは個々の言語や民族に特有のものの考え方を重く見た。
（･･･）
　カントとヘルダーの違いは、後に民族学者バスティアーンが原質思念（Elementargedanken）、民族思念（Volkergedanken）と区別した差でもある。後者を経なければ前者にはたどりつけない。そのことをコロナ禍は思い知らせてくれた。結局われわれの精神は、あの疾風怒濤の時代からあまり進んでいないのかもしれない。」

「木岡伸夫やオギュスタン・ベルク、そして中沢新一といった人々が、先達である山内得立、さらに溯れば龍樹（ナーガルジュナ）『中論』のアイディアをもとにして、「ロゴス」に代わる「レンマ」の可能性を説いている。
（･･･）
　近代的な学問、そして知とは、まさにロゴス的な分析を旨としてきた。しかし先述したような思想家たちは、その限界に気づいている。私もまた本書ででは微力をつくし、レンマ的な人類史総体の把握に努めたつもりだ。個々の時代・値域の執筆者が書く歴史には、もちろん精密さでかなわない。しかし部分の総和が全体と等しくないように、歴史とは事実の集合体ではない。よってその記述には、全体をどう見るかという歴史観のありかたが問われるのである。」

「今後、このままＲ３が拡大・膨脹してゆくと、どんな影響が出てくるだろう。たとえばコロナ以前から、日常的にマスクを着用している若者が増えていた。（･･･）そうした減少は「視線耐性」の低下ととらえられる。つまり、他人の視線に自分の素顔をさらすのが耐えられない、というのだ。そしてこうした心理は、デジタル・デバイスとの接触時間の長さろ相関しているらしい。生身の人間と接することが少なくなればなるほど耐性が低くなるというのは、理解できる話である。
　岡田尊司もまた、そうした行動様式に着目して「ネオサピエンス」、あるいは「回避型人類」と呼んだ。他者への愛着をつよく持つ旧来の「共感型人類」に対して。そうした感情をミニマムにすることで自分が傷つかないように守ることのできる、新たなタイプの人類が遺伝子レベルで広まりつつある、というのが岡田の見立てだ。そして、こうした劇的な「進化」を後押ししているのが、情報通信（ＩＴ）革命による対面コミュニケーションの機会減少だという。
（･･･）
　こうした事態が急激に進行しているのは、日本もふくむ先進諸国が主であり、地球上のその他の値域はまだそこまで深刻になっていないのではないか。（･･･）
　また。これは岡田も指摘することだが、「回避型人類」は現代になって突然あらわれたわけではない。本書で述べてきたＲ２という、文字情報に多くを頼る環境というのはすでに、「回避型」への大きな一歩をしるしていた。読書する行為というのは、他者から切りはなされ、一人孤独に書物と向きあうような環境を必要とするからだ。（･･･）
　とはいうものの、全体的な趨勢としては、日本で起きているのと似たような方向へ世界は向かいつつあるのかもしれない。」

「ビッグヒストリーが教えてくれるように、近未来は予測しにくい。多様なファクターがかかわってくるからである。しかし遠い未来はより確実だ。数十億年後に太陽は膨脹し、赤色巨星になって死を迎える。したがった地球も道連れだ。
（･･･）
　われわれ人類は地球とともに生きてきた生き物の一員であり、今後もそれが基本となる。地球が滅びるとき、運命をともにするのは、大地から生えた枝が枯れ、地にもどるのと同じではないか。個々の生命に死があるように、地球もやがて姿を消す。そこにどうしようもない哀しみがあるのは確かだが、持続可能性についての責任と決意、そしてまた、絶え間ない日常にむきあって暮らしてゆこうという構えもまた、そうした有言の生を引き受ける精神からこそ、生まれてくるのではないだろうか。」

◎山田　仁史（やまだ・ひとし）：
1972年、宮城県生まれ。東北大学文学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程満期退学。ミュンヘン大学大学院修了。東北大学大学院文学研究科准教授を務めた。2021年に逝去。著 書に『首狩の宗教民族学』(筑摩書房)、『いかもの喰い』(亜紀書房)、『新・神話学入門』（朝倉書店）などがある。

☆mediopos-3182　2023.8.4

思潮社は小田久郎により一九五六年に設立され
一九五九年には『現代詩手帖』が創刊
一九六二年には「現代詩文庫」の刊行がはじまる

思潮社は同人誌を中心に発表された
戦後詩の展開を引き継ぐように
「現代詩」の主要なプラットフォームとして
その役割を担ってきた

『ユリイカ』八月号の特集はその小田久郎
『現代詩手帖』での特集ではなく
『ユリイカ』での特集である

小田久郎は
二〇二二年一月一八日に亡くなっているが
その訃報は一年以上経た
二〇二三年三月二八日まで伝えられることはなかった

その遺言には
「間違っても現代詩手帖で
小田久郎追悼特集など出すな」
という小田氏ならではのこだわりがあったらしく

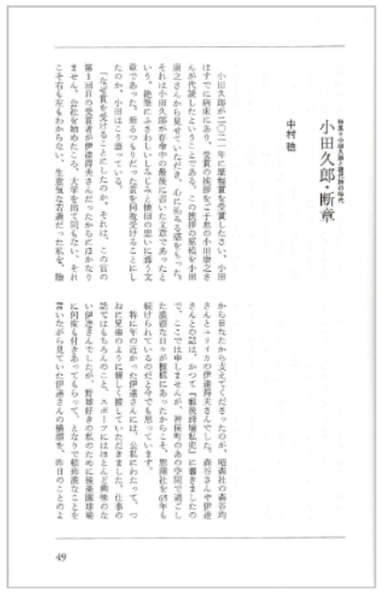
それで現代詩手帖ではなく
小田氏とも深く関係した伊達得夫との関係もあり
『ユリイカ』での特集と相成った･･･
ということでもあるのだろう

「現代詩」というと
「現代音楽」のように
かつてはそれなりの前衛的な役割を
演じていたところがあるが
いまではどちらもかなり閉鎖的な世界で
限られたひとたちによって
作られ享受されるものとなっている感がある

特集記事のなかで中村稔が
「詩壇」が存在しているのかそうではないのか
といったことにこだわりをみせているのは
そうした閉鎖性を危惧しているからなのだろう

そしてそれはおそらく
「文壇」や「歌壇」「俳壇」といった世界とは
異なった可能性が開かれることを
詩人のひとりとして願っているからなのかもしれない

さて特集の記事のなかから
ほかにふたつほどとりあげてみた



■『ユリイカ 2023年8月号 特集＝小田久郎と現代詩の時代』
（青土社 2023/7）

ひとつは二〇〇六年に開かれた日中詩人会議において
中国の『新京報』の取材内容を
詩人であり谷川俊太郎の研究家でもある田原が
紹介しているもの

小田久郎の思潮社での率直な苦労話もあるが
「現代詩」についての次のような視点は興味深い

「敗戦後の日本の詩人、荒地派の詩の主題は
「わたしたち」であり、
それによって今までになかった集団意識を表現してい」
たが
「谷川俊太郎の詩から始まって、
「わたしたち」が「わたし」に転化し、
さらに「わたし」と「他者」が生まれ」てきた
という小田氏のとらえ方である

もうひとつは小笠原鳥類による
「現代詩」の役割と読み方についてのもの

これは「詩壇」ということではないものの
「現代詩」がもっている閉鎖性とも関係してくるが

「現代詩」においては
「わかるかどうか」は問題にならない
「わかる」言葉は
「正しく安定したような言語（散文？）では
記録されないもの」であるからである

「「正しく安定したような言語（散文？）」は
「何もしないとのさばってしまう暴力と崩壊と消滅」へ
と
むかってしまうような言葉だから
それに抗う言葉が求められる
それは「知ることができない何かを予感させる」
そんな言葉でもある

詩的言語は基本的に
日常的な言語から離れた機能をもった言葉だが
そのなかでも「現代詩」は
そんな言語の未知の創造的機能を
活性化させる契機となる役割がある

小笠原鳥類が
「みんなマジで現代詩を読まなければならない」
というのは
そうでなければ言語は
人工知能的なルーティーンのなかで
崩壊し消滅してしまいかねないからだ

小田久郎によって開かれてきた「現代詩」が
これからも生き延びられるということは
たとえ今はそれが閉塞的な状況にあるとしても
言語の可能性と深く関わっている

昨今の「論理国語」や「チャットＧＰＴ」のような
言語の創造的な側面を死滅させようとする方向への
アンチテーゼとしても「現代詩」を「読まなければならない」

■『ユリイカ 2023年8月号 特集＝小田久郎と現代詩の時代』
（青土社 2023/7）

（田原「「貴重人間」ーー小田久郎を憶う」より）

※二〇〇六年秋、日本と中国の詩人が一堂に会して交流する大規模な日中詩人会議が開かれた

「小田夫妻が帰国する前日に、当時の中国で最も読まれ、影響力のある『新京報』の取材を受けた。取材を通して、思潮社には三回存亡の危機があったことを聞いてたいへん驚いた。通訳が終わった跡、感動したというよりも、ただ小田さんに脱帽したい気持ちばかりが湧き上がってくるのだった。」

「新京報／一九五六年に思潮社を設立し、半世紀以上にわたって、現代詩と詩論だけを発表・出版されてきました。これまでどのようにして続けてきたのでしょう。
小田久郎／まず言っておきますが、わたしは政府からの助成金はほとんど受けていませんし、企業からの支援もほとんど受けていません。わたしはこの五〇年で、存亡の危機を少なくとも三度経験しました。一回目は一九五九年で、出版社を設立して三年のときですが。売れている詩集よりも売れない詩集を多く出しました。ある日、耐えきれなくなって出版社の扉を一人で閉めてしまい、胸を引き裂かれそうになりましたが、帰宅中に「日本の現代詩はどうなるのか」という思いが頭の中でぐるぐる回り、ついに再び扉を開け、勇気を出して月刊誌『現代詩手帖』を創刊し、出版社を救いました。二度目の一九六二年には、日本の詩に大きな影響を与えた「現代詩文庫」シリーズを開始し、出版社は再び財政難に陥りました。三回目は二〇世紀の八〇年代で、漫画やアニメーションやテレビなどが純文学に大きな衝撃を与えました。やむを得ず、出版社を簡素にして少数精鋭で行きました。わたしは生まれつきの楽天主義かもしれません。危機はチャンスの信号弾だと思っています。」

「新京報／日本ではあなたは「天才編集者」と呼ばれているようですが、詩は個人の思想の結晶であり、フランスのある詩人はネットだけに詩を掲載し、編集者の選択基準に抵抗したそうです。あなたはどうやって詩に対するあなたの的確な嗅覚をみんなに納得させているのでしょうか。
小田久郎／これはね、もしかしたらわたしが時代の空気に敏感になっていることと関係しているかもしれません。良い詩にははっきりした基準は存在しないと思います。しかし、少なくとも普遍的な時代感情と現在に対する鋭い配慮は必要です。たとえば谷川俊太郎さんも思潮社から出てきた重要な詩人の一人ですが、それ以前には、敗戦後の日本の詩人、荒地派の詩の主題は「わたしたち」であり、それによって今までになかった集団意識を表現していました。谷川俊太郎の詩から始まって、「わたしたち」が「わたし」に転化し、さらに「わたし」と「他者」が生まれるというように、物語の主題が変化していくことは、時代が転換することを暗示しています。」

（小笠原鳥類「みんなマジで現代詩を読まなければならないーー思潮社の本から学ぶ、崩壊に抗うサバイバル」より）

「「満月が指を三本出して昇る。折れ曲がった青銅の葦の葉の葉陰で、眠り薬がなめらかに沢蟹どもを追ひたてる。あの青黒い背が今しがた水車小屋の娘の眼にも見えた。森の空き地の鉄輪、石の輪。陶器のかけらが長靴の爪先でしきりに笑ふ。」（「月」そのほか」から。現代詩文庫『続・入沢康夫詩集』思潮社ーーーー小田久郎が中心にいた出版社ーーーー、二〇〇五）。崩壊が、世界の常態である。カケラを少しずつ集めて、たいせつに並べていくことーーーーなんとかして、生存を維持していくことーーーーが、現代詩だ。正しく安定したような言語（散文？）では記録されないものがある。新聞や雑誌や教科書や国語辞典などでたくさん見られる文章では書けないことがある。」

「わかるかどうか、よりも、おもしろいかどうか。好きであるかどうかだ。〈わかるものが好きだ〉という狭さでは、予想を超えたこととともに生きる必要がある世の中でサバイバルできない。好きなことにとことんのめりこんで、次々に来る驚きの瞬間である。必ずしも説明ではない情報を詰め込んで書いた、読者の勉強になる詩ーーーー知ることができない何かを予感させる詩ーーーーが、もっと、あっていい。こんなものは詩ではないというのであれば、そうであるが詩だ。実際には、あっさりエッセイなのか、なんでもないものを軽く書いて、何も起こっていない静けさを雰囲気の良さであるように見せて誤魔化している、愛がない〈詩人〉たちが、『現代詩手帖』にも多いようである。何もしないとのさばってしまう暴力と崩壊と消滅に、ていねいに、何事かの出現で抗う必要がある。
　私が自分の本の打ち合わせでお会いした小田久郎さんは活発で、話がおもしろくて、本の作り方についてのアイデアが、シャープだった。思潮社の本にはおそるべき迫力があった、少し過去形だが。何事かを起こす人がいなくなったあとで、どうするか。まず、読むこと。みんなマジで現代詩を読まなければならない。」

（中村稔「小田久郎・断章」より）

「小田の『戦後詩壇私史』に見られるとおり、小田は「詩壇」というものの存在を意識していた。わたしは「詩壇」というものが存在するとは考えていなかったので、小田のこの著書の題名にはかなり違和感を持った記憶がある。
　詩壇があるとすれば、どこにあるのだろうか。『現代詩手帖』に寄稿する人々を中心として、『現代詩手帖』の毎年十二月号の「現代詩年鑑」の「詩人住所録」に掲載されている二千人か三千人の詩人たちで構成されているのであろうか。伊達得夫や森谷均は「詩壇」の一員という意識は持っていなかったと思うし、第二次『ユリイカ』を発行した清水康雄もその初代編集長をつとめた三浦雅士も、「詩壇」という意識は持っていなかったのではないか。谷川俊太郎も自分が「詩壇」に属するとは思っていないのではないか。これは亡き大岡信にしても、飯島耕一にしても同じではないか、と考え、ところが、おそらく小田は谷川俊太郎も大岡信も飯島耕一も、彼らはみな、「詩壇」に属する詩人と思っていたのではないか、と考え、それ故、小田が「詩壇」という発想をもつのを奇妙に感じるのである。
（･･･）
　「詩壇」「歌壇」「俳壇」もそれぞれ存在するように思われてくる。そこで、詩論や詩人論は「詩壇」の中でのみ通用するようである。同じように、歌論や歌人論は「歌壇」という閉鎖社会の中でだけ有用しているように見える。そういう意味で『現代詩手帖』は小説家に門戸を開いていないし、文藝時評の類を採り上げることもなく、社会時評の類を採り上げることもない。採り上げるのはもっぱら詩と詩に関する評論やエッセイに限っているように見える。『現代詩手帖』と思潮社は、そうした閉鎖社会の中で君臨していたのではないか。という感じがしないでもない。そういう閉鎖社会を「詩壇」というのかもしれない、と考える。
（･･･）
　現代詩の世界では「詩壇」があるのかどうか。「文壇」と同じく、たぶん、あるのだろうが、その存在が必ずしもはっきりしていないのに対し、短歌、俳句の世界では「歌壇」、「俳壇」というものが確実に存在しているように見える。そして、「歌壇」「俳壇」は「詩壇」以上に閉鎖的なように見える。日本の文学者の世界は、まことに風通しが悪いのではないか、という疑問を私はもっている。そういう意味では、「詩壇」というものが存在すると言われても、頷きたい気分が強くなるのである。」

「私が現代詩を読んでも興趣を覚えることが稀なのは、私が愚昧だからではなくて、「詩壇」の閉鎖性の結果、「詩壇」内部でだけ通用する、独善的な表現やイメージの氾濫によるものかもしれない。このことは現代詩の読者は「詩壇」に属する人々に限られているのではないか、という読者の不在ということにも関連するかもしれない。
（･･･）
　このことは、また、あるいは閉鎖社会においては批評性が欠如することになるという問題と繋がるかもしれない。現代詩においては、かつて吉本隆明、大岡信に批評性のある評論があったように憶えているが、その後は現代詩の批評としてどんなものがあるか、魯鈍な私が知らないだけで、きっと現代詩が批評性を失っているということはないのであろう。ただ、遠くから眺めているという素人眼には、「歌壇」「俳壇」にはいかにも批評が欠如しているように見える。歌人や俳人はたがいに褒め合っているばかりのように私は感じている。また、現代短歌の読者は「歌壇」に属する人々に限られるように思われるのだが、どうだろうか。
（･･･）
　「詩壇」の閉鎖性がつよくなると、どんな事態になるのか。危惧は尽きない。「詩壇」は決して閉鎖的ではないのだ、と小田は言うかもしれない。「詩壇」とは、多かれ少なかれ、閉鎖的な世界だと見るのは私の僻目なのだろうか。
　このような感想はたぶん小田久郎とは関係ないことであろうが、『戦後詩壇詩史』という小田の著書の題名に対する私の違和感をつきつめて考えてみると、こんな感想にまで辿りつくのである。」

☆mediopos-3183　2023.8.5

三砂ちづるが「みんなのミシマガジン」で
連載している「おせっかい宣言」は
その「おせっかい」がとても面白い

今回は「お妾さん」の話から
「自分の機嫌は自分で取る」ということについて

いまや「お妾さん」という言葉は死語だが
ぼくと同世代の三砂ちづるは
小さい頃にはまだ近くにそういう方がいた
ぼくもわずかながら記憶が残っている

いうでもなく「お妾さん」は
「シングルマザー」ではない

お妾さんは男性に「囲われる」存在であり
つまり経済的にまとまった支援を受けていた

明治の一時期には法的にも「妾」は
社会的に認知されていて
家族の一員として認められていたことがあった
その後は法的には認知されなくなるが
しばらくのあいだ世の中的には
それなりの場所をもち得ていた

現在のような男女共同参画社会的な社会では
いうまでもなく「お妾さん」には居場所がない

「一夫一婦制のエトスは、
ここにきて、いや増強しており、
婚外恋愛への眼差しは厳しく、
不倫、という名の元に、
社会的認知は、もちろん、されない」

しかし「シングルマザー」には居場所はあっても
ともすればそこには経済的な支援は希薄である
おそらくそのほうが
現実的には深刻ではないかと思える

現実的には深刻ではないかと思える

「不倫」とかいう言葉は
どこかルサンチマン
しかも本と人は無関係な他所様をダシに使った
はけ口的なルサンチマンの様相が強い
当人以外にはどうでもいいような問題で
人それぞれの問題だとしか思えないが
世の中的にはそうでもないらしい
（こんな「おせっかい」はくだらないのだが）

さて記事のなかにもあるように
現在の朝ドラで放送中の「らんまん」では
主人公の妻となる寿恵子の母は武士の妾である

そして娘に対して
「男の人のためにあんたがいるんじゃない、
あんたはあんた自身のためにここにいるんだから、
自分の機嫌は自分で取りなさい、という」

「自分の機嫌は自分で取る」というのは
たとえどんな状況・環境に置かれたところで
心の「自由」は損なわれないということもあるだろう

あるとき（ネット上でだが）
「甘やかされたものの気持ちがわかるか」
というふうに開き直り的なキレ方をされたことがある

言われてみれば
ほとんど甘やかされたことのないぼくにとっては
たしかにその気持ちはわからないのだが
どんな状況・環境であれ
じぶんの心の「自由」を
他律的に依存させてしまうことは
避けたほうがいいのではないかとは思っている

みんなのミシマガジン

おせっかい宣言　三砂ちづる
Osekkai Sengen Misago Chizuru

第107回

自分の機嫌は・・・

▪三砂ちづる「おせっかい宣言　第107回　自分の機嫌は・・・」
（2023.07.28）
（みんなのミシマガジン）

世の中はみればみるほど悲しいことが多いし
その影響をそれなりに受けざるをえないけれど
それが可能かどうかは別として
心の「自由」を得ることだけはだれにでもできるはずだ

こうしたことを語るのもまさに「おせっかい」だが
ひとの「不倫」をとやかくいうような
対幻想や共同幻想に強固に縛りつけられた
「おせっかい」よりは幸せの種にはなるだろう

■三砂ちづる「おせっかい宣言　第107回　自分の機嫌は・・・」
（2023.07.28）
（みんなのミシマガジン）

「ふと気づくと、"シングルマザー"はたくさんいるのに、"お妾さん"、は、いなくなった。シングルマザーとお妾さんは、もちろんちがう。シングルマザーは、結婚していたけど離婚したり、あるいは、結婚することなく、一人で子どもを育てている母親のことである。シングルマザーは、子どもの父親たる人から財政的にまとまった支援は受けていないことが多い。離婚したりした場合で、子どもが母親と一緒にいる場合の多くでは父親が養育費を払うことになっているケースも少なくないものの、払っている父親もいるが、払ってない父親もいる。払っていても大した額を払っていない（払えない）人も多いようだ。そのあたり、周囲の話を聞いているだけでも結構いろいろある。海外では、養育費を払わない父親は実刑、という国も少なくないが、払っていない人もいる、というのは、日本はそれほど厳しくない、というあらわれでもあろうか。

男女共同参画社会を目指している今、決して、シングルマザーのイメージは悪いものではない。シングルマザーの多くは、男に頼らないで母が一人でがんばって子どもを育てているわけである。"女性の経済的自立"を示してもいるわけだから、結婚する前から「私はシングルマザーで子どもを産んで育てます」とおっしゃる方もあるくらいで、つまりは、そのように、未来の展望として語って特に問題がないほどなのである。現実には、まだ元気でいる実家の両親に助けてもらいながら子どもを育てるシングルマザーも多くて、以前この連載でも取り上げたことであるが、とりわけ地方では、そういうケース（つまりは、老親に離婚した娘、その子ども、という組み合わせ）が多くなっていてこれは新しい母系性社会ではないか、とか、書いたこともある。いまやシングルマザーであることは、経済的にはきびしいだろうけれども、社会的な体裁はそうは悪くなくなってきていて、よくある話、になっているのだ。もちろんそれは悪いことではない。いわゆる社会的支援もおのずと増えていくであろう、というか、そうなってもらいたいものだ。一人でやっていくことは、財政的には本当に大変なことなのだから。

お妾さんはシングルマザーともちろん異なり、21世紀が始まって20年以上過ぎた今は使われることのない、ほとんど死語、である。シングルマザーは一人でがんばる、という、女性の自立が前提だが、お妾さんは、男性に「囲われる」のであるから、誰かを頼みに生きていくのが前提であり、そこですでに、現在の男女共同参画社会のありように適合していない。一夫一婦制のエトスは、ここにきて、いや増強しており、婚外恋愛への眼差しは厳しく、不倫、という名の元に、社会的認知は、もちろん、されない。明治の一時期、法的にも妾、が家族の一員として認められていたころがあった。表札に妾の名前まであるうちがあった、とは伝え聞くところである。甲斐性のある男はそのころ、何人かの女性の面倒を見ていたわけだ。法的に認められなくなっても、しばらくは妾という存在は社会的には認知されていたから、近所でもあの人はお妾さんね、と言われながらも、普通にお付き合いは行われていたし、堂々と子どもを産んでもいた。

2023年現在60代の私には、タバコ屋をやっていたお妾さんの記憶もあるし、お妾さんの息子、という親しい同級生の存在もよく覚えている。禁煙運動華やかなる現在、さらに、コンビニの津々浦々に普及した現在、タバコはタバコ屋ではなくコンビニで買うようになっているが、少し前までどの街角にもタバコ屋というものがあり、タバコはタバコ屋で買うものであり、子どものおつかいの代表格は「お父さんにタバコを買う」ことであり、お妾さんでタバコ屋をやっている人が少なからずいた。旦那様（こちらも死語、あるいはポリティカリーに正しくない言い方）に財政的支援をもらってはいても、自分でそれなりの収入もある方が良いわけだし、なにより、毎日何かやることがある、というのはよいことだから、妾にタバコ屋をもたせた旦那、は少なからずいたのだ。

坂口安吾が1947年に発表した「青鬼の褌を洗う女」という短編小説があって、こちら、金持ちの妾になるようにそだてられた妾の娘、が主人公である。娘はりっぱな「オメカケ性の女」に育ち、妻とか女房とか、気持ち悪い、なんでひとのためにご飯作ったり、洗濯したりするのか、ご飯はレストランに行けばいいし、洗濯はクリーニング屋にいけばいいし、文化や文明ってそのためのものだ、って、坂口安吾は書くのである。今もオメカケ性の女はいくらでもいると思うのだが、一夫一婦制が浸透し男女共同参画社会で女性の経済的自立が何より推奨される時代、ご飯はレストラン、洗濯はクリーニング屋、ひたすら旦那様の女で色っぽくあり続けようとするオメカケ性の女の居場所など、どこにあるのだろうか。

お妾さんが普通に存在していた時代、彼女たちの、いつも旦那様を待つ苦労、というのも、想像にあまりあることでは、ある。妾になる、ということは、自分が、一番親密な関係を持つ男の、最も優先事項の高い女ではない、ということを常にわきまえることである。妻、というのはステイタスであって、その男の家族と親戚とつきあい先祖やら子孫やら、家という名前で存在していたものを守っていく役割のある人であり、どう考えても、旦那様のファースト・レディなのである。妾は、このセックスレスの現代、考えにくいかもしれないが、要するに、旦那様にとってずっと「性愛の対象」であり続けること（だけ）が期待されている存在で、ふだんは妻の元にいる旦那様が自分のところに気を向けてくれるのを待つ存在でもある。そういう状況にハラを据えて身を置くのもなかなか大変なことであったにちがいない。

2023年現在NHKの朝ドラは、実在の植物学者、牧野富太郎をモデルにしたものだが、主人公の妻となる寿恵子の母は武士の妾である、という設定だ。人気芸者だったが、武士の「旦那様」の妾になったのである。「旦那様に尽くしきって、後悔はない」と達観して幸せそうな母親は、娘の寿恵子にも幸せになってもらいたい、と思っている。主人公、万太郎が訪ねてこなくなって待ち疲れたり、政府の要人に妾として求められたりして、心が揺れて、いわば、"落ち込んでいる"寿恵子に、妾だった母は、「奥の手を教えてあげる」といって、「自分の機嫌は自分で取ること」、を伝えるのだ。男の人のためにあんたがいるんじゃない、あんたはあんた自身のためにここにいるんだから、自分の機嫌は自分で取りなさい、というのである。そして、「幸せの数だけ数えてのんきに暮らす」、そうしないと自分がみじめになるから、とも言っていた。まことに自らが自らのパートナーたる人にとって、「優先される人」ではないことをいさぎよく受け入れた上での、人生訓なのであった。

一夫一婦制がどれほど強固なものになろうとも、その制度から外れる男と女の関係は常にあるのであり、それがシングルマザーだったりお妾さんだったり、時代と共に変わっていくだけだ。性の多様性が叫ばれる今日でも、それは少しも変わるまい。一対一の対幻想を、自らのうちでまっとうするために、自分の機嫌は自分で取る、という妾を生き抜いた人の言葉に励まされていく人は、実は永遠に存在するにちがいない。はい、きょうも、自分の機嫌は自分で取り、ほがらかに過ごしていきたいものだ。パートナーがいてもいなくても。一人でいても、家族でいても。」

◎三砂 ちづる（みさご・ちづる）
1958年、山口県生まれ。兵庫県西宮市で育つ。1981年、京都薬科大学卒業。1999年、ロンドン大学PhD（疫学）。津田塾大学国際関係科教授。著書に『オニババ化する女たち』『死にゆく人のかたわらで』『少女のための性の話』など多数。本連載の第1回〜第29回に書き下ろしを加えた『女たちが、なにか、おかしい　おせっかい宣言』（ミシマ社）が2016年11月に、本連載第30回〜第68回に書き下ろしを加えた『自分と他人の許し方、あるいは愛し方』（ミシマ社）が2020年5月に発売された。

☆mediopos-3184　2023.8.6

鎌田東二はウェブマガジン「なぎさ」に
二〇二二年五月から「スサノヲの冒険」を連載し
それらの内容を入れながら
『悲嘆とケアの神話論／須佐之男と大国主』を
二〇二三年五月に刊行している

十歳から座右の書として『古事記』を
読み続けて来た積年の思い
つまり神話に関する
いわば客観的な立場からの研究に対する
「抗議」の意味が込められており
しかも本書は「遺言」でもあるという

「抗議」であるというのは
おそらく鎌田氏にとっては
『古事記』を含む日本文学史を踏まえるということは
それそのものを生きてはじめて
それらを読んでいるといえるからなのだろう
言葉をかえていえば「神々の歌」を受け継ぎ
「詩と学術を切り結ぶ」ということ

「遺言」であるというのは
「これをまとめ、書き上げた時は、ガン宣告後二週間で、
手術前十日から一週間の間に
本書をまとめることになったから」であり
まさにみずからの「死」を前にした
渾身の書でもあるといえる

さて鎌田氏は
『古事記』のドラマの主役はスサノヲであるといい
みずからをスサノヲの「子分」であるとしている
そして出口王仁三郎もまた自分の霊性を
スサノヲと捉えていたことから
出口王仁三郎を「スサノヲ組の兄貴分」であるとしている

また鎌田氏は
スサノヲの中にディオニュソスを重ね
「ともに殺される神でありつつ殺す神」であり
「彼らは負の感情の渦巻く海に放り出され」
「その痛みと悲しみの中から、
それを救済するための歌と悲劇を生み出す」ととらえている

それを救済するための歌と悲劇を生み出す」ととらえている

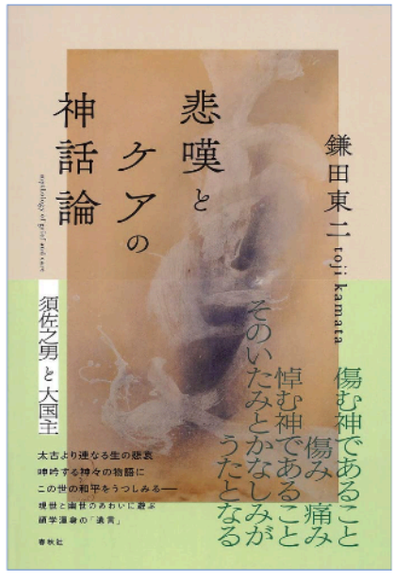
神秘学的にいえば
秘儀にはアポロン的秘儀とディオニュソス的秘儀があり
前者が「外なる世界に向かって存在の秘密を探求する」
顕教的な道であるのに対し
後者は「自分の内面への道を、
無意識の世界の奥底にまで降りていこうとする」
秘教的な道である

そしてその内面へ向かう道は
魂の危険を伴うことから
公開されることが禁じられていた

内面へ向かうということは
自己認識による自己変革であり
さらには「自己外化」を伴うものである

その意味でスサノヲ的な道は神話的に描かれると
悲劇や苦悩を運命づけられたものとなるのである

鎌田氏はガンの手術を前にして
キューブラー・ロスが『死ぬ瞬間』で示唆したような
「否認」から「受容」への葛藤の過程ではなく
むしろ「感謝」さえ感じるようになったという
そしてそれは「悉皆成仏」や
「鎮魂供養」にも通じるものではないかと



▪鎌田東二『悲嘆とケアの神話論／須佐之男と大国主』（春秋社 2023/5）
▪鎌田東二「スサノヲの冒険」～「第１回」「第５回」（2022年5月3日）
（ウェブマガジン「なぎさ」連載）
▪高橋巖『神秘学講義』（角川ソフィア文庫　KADOKAWA 2023/3）

しかし昨今の日本を見渡すと至る処
「「悉皆地獄」や「金摑み合戦」のような状況」である
こんななかでも「感謝」や「鎮魂供養」が
これからも遺っていくかどうかはなはだ危うそうだ

鎌田氏はそうしたことを
「しかと見届けながらこれからを生き、
死んでいきたい。」という

同感だが
いままさにどんどん壊れている「日本」を
後世において「神話」で描くとしたら
どんな物語になるかも気になるところだ

▪鎌田東二『悲嘆とケアの神話論／須佐之男と大国主』（春秋社 2023/5）
▪鎌田東二「スサノヲの冒険」～「第１回」「第５回」（2022年5月3日）
（ウェブマガジン「なぎさ」連載）
▪高橋巖『神秘学講義』（角川ソフィア文庫　KADOKAWA 2023/3）

（鎌田東二『悲嘆とケアの神話論』より）

「十歳の時に『古事記』を読んで以来、座右の書として『古事記』を読み続けてきた。その六十三年の積年の思いが本書を成り立たせている。
　これはわが執念の書であり、神話について客観的な立場からの研究や解釈を主としてきた宗教学や人類学に対しての挑戦状であり、『古事記』を含む日本文学史を十分に踏まえることなく日本文学に従事してきた文学者たち、作家たちに対する抗議の書であり、「遺言」でもある

　「遺言」であるという意味は、これをまとめ、書き上げた時は、ガン宣告後二週間で、手術前十日から一週間の間に本書をまとめることになったからである。」

「私が研究領域としている「身心変容」あるいは「身心変容技法」とう観点からすると、病がもたらす「身心変容」はフィジカル面では不可抗力と言えるが、同時にメンタル面やスピリチュアル面ではそれを一つの警告とか啓示とかメッセージとして受け止めて、違う生き方や在り方に変容させる可能性を持っている。
　キューブラー・ロスは、たとえば、癌を宣告された患者が、死を運命として受け入れられず、検査結果を疑い、否定し、どうして自分がどんな病に罹ったのかと怒りを感じ、死の恐怖から逃れようと神仏に祈ったりすがったり、諸種の代替治療を試したり、普段しないような慈善行為の寄附をしてみたりして取引を重ね、それも役に立たないことを知ると抑うつ状態に陥って絶望的な気持ちになって何事にも無気力になるが、終には、死を避けられなぬ運命として受け入れて安らぎを得る過程を鮮やかに描いて見せた。
　これは、死の臨床人間学的研究に大きな寄与よ前進を与えるものだった。

　だが、ガンを告知されて思ったのは、まず、キューブラー・ロスの言う五段階を順序だてて辿ることのない、いきなりの「受容」もあるのではないかという実感と、「怒り」ではなくて「感謝」と言うべき感情の生起もあるのではないかという気づきである。異論というほどではないが、違う見方や状況もあり得るのではないかということだ。
　むしろ、告知後もっとも難しく、悩ましかったのは、医師からの告知を自分自身で受容することよりも、このことを周りの他者、家族や友人にどのように伝えるかであった。」

「昨年四月に逝去した社会学者の見田宗介（一九三七～二〇二二）は、『現代日本の精神構造』（弘文堂、一九六五年）「第二部　現代日本の精神状況」の仲野「八　死者との対話ーーーー日本文化の前提とその可能性」において、日本人には「原恩」ないし「天地の恩」の思想があると指摘している。
　「世界における道徳意識の根底にあって、〈原罪〉の意識に代わるべき地位を占めるのは、いわば〈原恩〉の意識であろう。」（･･･）
　どうも、私にも、見田宗介が言うような、「原恩」とか「天地の恩」感覚がどこかにセットされているようなのだ。
　見田は、日本文化に見られる「汎心論」においては、「日常的な生活や「ありのままの自然」がそのまま価値の彩りをもっていて、罪悪はむしろ局地的・一時的・表面的な「よごれ」にすぎない。真空のなぁに物体がある古典力学の世界ではなく、空間そのものが無数の粒子の散乱によって充たされている現代物理学の世界である。賢治や白秋の宇宙感覚、小津安二郎や木下恵介の抒情性、スナップ写真や日記への嗜好などをもち出すまでもなく、日本文化論のレギュラー・メンバーとなっている俳句や私小説はつねに、生活における「地の部分」としての、日常性をいとおしみ、「さりげない」ことをよろこび、「なんでもないもの」に価値を見いだすーーーー「奥の細道」の旅路そのものが問題であって、到達点としての松島自体は、実はどうでもよかったのではなかろうか」と述べている。

「私がそのふもとで住まいする比叡山には、平安時代に「一仏成道見法界。草木国土悉皆成仏」と命題化される天台日本本覚思想が発達した。そのような観点からすれば、ガンも便もすべてが「成仏」ということになるだろう。
　じっさい、比叡山の麓にある天台五大門跡寺院の一つの万寿陰門跡には「菌塚」がある。発行職員の開発などに使われてきた菌に対して、そのおかげを感謝し、何億何兆という数の実験に使われてきた「多種多様な菌様」に対して鎮魂供養をする「塚」である。そこでは、毎年五月に、欠かさず供養の儀式（法要」が行なわれている。これこそ、原恩教とも「ありがた教」（すべてが有難く思える）とも言える日本の〈感謝教文化〉の発露ではないだろうか。
　だがしかし、ウクライナ戦争や国内外のクリスマス期の大雪吹雪災害などなどを見ても、てんだい本覚思想の「悉皆成仏」や「菌塚」どころか、「悉皆地獄」や「金摑み合戦」のような状況である。それでもなお、「悉皆成仏」と言える「原恩思想」や「ありがた教」の「複雑性感謝」は成り立つのか、しかと見届けながらこれからを生き、死んでいきたい。」

（鎌田東二「スサノヲの冒険　第１回」より）

「『古事記』という神話的物語のなかで、最大の闘争と危機をもたらし、同時にその危機打開のトリガーとなっているのは、須佐之男命（本連載において最頻繁に登場してくる固有神名であるので以下敬愛を込めてスサノヲと表記する）である。その意味で、スサノヲは『古事記』を面白くしている神の筆頭をなしている。
　スサノヲがいなければ、『古事記』の面白さは半減する。ドラマチックな筋立ても生まれない。葛藤も、対立も、争いも生まれない。スサノヲは、『古事記』ドラマの主役である。」

（鎌田東二「スサノヲの冒険　第５回　スサノヲとディオニュソス」より）

「出口王仁三郎は自分の霊性をスサノヲと捉えた。そしてスサノヲの霊性のこの今の発現こそ自分に他ならないと自覚し、スサノヲの道を貫いた。
　この出口王仁三郎のスサノヲ観の根幹には、「贖罪するスサノヲ」がいる。それが、痛みと悲しみに暮れながら暴れまくり、終には八岐大蛇と対峙する「救済者としてのスサノヲ」となり、そしてその際に「歌うスサノヲ」が顕現し、その後、大国主神に神威を委譲する時に「祝福するスサノヲ」の貌が現れ出る。それらとひっくるめ、束ねて、出口王仁三郎は「歌祭りとしてのスサノヲの道」を提示した。
　及ばずながら、私もその道を辿る者である。私の場合は、出口王仁三郎の自覚のように、スサノヲの化身などではなく、何十年も前から（たぶん45年前くらいから）「スサノヲの子分」と自称し、公言してきた。「子分」であるからには、「親分」の言うことを聞かねばならない。紆余曲折の多い我が人生はそのようなスサノヲの「子分」の道の曲折であった。その「子分」であり、大本共感者ではあっても大本信徒ではない私からすると、出口王仁三郎は「スサノヲ組の兄貴分」であり、「スサノヲ組代貸」のような先駆者・先達である。もちろん、「スサノヲ組」の組長であり貸元は、スサノヲ自身である。」

「私は10歳の時に『古事記』を読み、その後すぐに「ギリシャ神話」を読んで、日本神話とギリシャ神話を貫く共通点・相似性に驚き、興味を抱いてきた。そして、スサノヲの中に、ディオニュソスやポセイドンやヘルメスやペルセウスに重なる神話素を見出してきた。
　そこで、今回、ここでは、その中からスサノヲとディオニュソスとの重合性・相似点を中心に検討してみたい。」

「スサノヲとディオニュソスはともに殺される神でありつつ殺す神である。彼らは負の感情の渦巻く海に放り出されている。そしてその痛みと悲しみの中から、それを救済するための歌と悲劇を生み出すのである。
　歌は悲哀の中から生まれる。どのような喜びの歌の中にも悲哀が宿っている。そんなアンビバレントな緊張と運命的な絡まりがあり、そのようなアンビバレンツをスサノヲとディオニュソスは体現した神なのである。」

（高橋巖『神秘学講義』～「第四章　秘儀とその行法／アポロン的とディオニュソス的」より）

「神秘学における意識の統合化の具体的な道は、古来、二つの道として伝えられてきました。つまり、エジプトやギリシアの時代から現代に到るこの新ピゲ句的な道を「秘儀」という言葉で表現するなら、秘儀には二つの秘儀があったのです。第一の秘儀はどういうことかというと、われわれが外に向かって感覚を働かせる場合、その外の世界がヴェールにおおわれているので、そのヴェールをかかげる行為が、この秘儀の行き方になるわけで、それをわれわれはアポロン的秘儀と名づけようと思います。
　それに対して第二に、人間には自分の内部に感情とか、意志とか、表象とか、さまざまの精神の世界があるわけですけれども、その内面の世界にもヴェールがかけられている。そのヴェールをかかげる道をわれわれはディオニュソス的秘儀と名づけます。したがって、アポロン的秘儀は、外なる世界に向かって存在の秘密を探求する道であり、ディオニュソス的秘儀は、自分の内面への道を、無意識の世界の奥底にまで降りていこうとする、そういう道であるとも言えるわけです。
　昔からこの二つの道ははっきりわかれていました。外部の世界で出会う神を、明らかなるカミという意味で、顕神、内部の世界で出会う神を幽神と呼ぶことで、顕界の神々と幽界の神々とを区別してきたのです。また、アポロン的秘儀の方を秘儀における大道、ディオニュソス的秘儀の方を秘儀における小道、という言い方もしてきました。
　この二つの道のうち、ディオニュソス的秘儀である、内部に向かう秘儀は非常に危険な道なので、この秘儀は、一般に非常にきびしくかくされていました。それを公開することはゆるされていなかったのです。むしろより安全な、アポロン的な、外への「大いなる秘儀」の方が、一般的に知られていたのです。」

「ディオニュソス的秘儀の最初は、夢なのです。なぜなら夢は、われわれが経験している超感覚的体験の中の、一番身近なあらわれですから、自分自身の内部で、ディオニュソス的秘儀を日常生活の中で体験しようと思ったら、夜眠っているときに体験する夢をあらためて意識化する行為からはじめるのが、一番簡単であると同時に、第一歩として必要でもあるわけです。」

「ディオニュソス的秘儀にとって非常に必要な第二の行為は、（･･･）自己変革ということです。（･･･）スパルタ的位置が、非常に簡潔な言葉で語る真理の中の真理と言われているものは二つあって、一つは「人間よ、汝自身を知れ」、もう一つは「極端にはしるな、中庸を大事にしろ」という言葉だったわけですけれども、その「汝自身を知れ」という自己認識が、ディオニュソス的秘儀の場合、特に重要になってくるのです。シュタイナーは、自己認識に二つの種類の自己認識があることを非常に強調します。第一の自己認識は、自己反省です。（･･･）反省を重ねることによって、自己を認識する場合の自己認識を、自己反省とか自己内省と言うのですけれども、じつはオカルティズムで問題になってくる自己認識は。そのような自己認識だけではなくて、第二の自己認識、つまりシュタイナーの言う自己外化です。（･･･）
　自己外化（Selbstentäusserung）というのは、（･･･）いったん自分が自分にとって大事な、身近な、必要な存在になってきた時点で、つまり自己同一性というのでしょうか、自分の存在が自分によって充分確認できる大切な存在になり、したがって自分が非常にいとおしく、大切に思える状態のときに、その自分をもう一度完全に自分の外に追い出してしまうことが自己外化なのです。そしてそれがオカルティズムにとっての自己認識なのです。」

◎鎌田東二
1951年、徳島県生れ。宗教学・哲学。武蔵丘短期大学助教授、京都造形芸術大学教授、京都大学こころの未来研究センター教授、上智大学大学院実践宗教学研究科・グリーフケア研究所特任教授を経て、京都大学名誉教授、NPO法人東京自由大学名誉理事長、天理大学客員教授。石笛・横笛・法螺貝奏者。神道ソングライター。フリーランス神主(神仏習合諸宗共働)。
主著に『神界のフィールドワークーー霊学と民俗学の生成』(青弓社、初版は創林社)、『翁童論ーー子どもと老人の精神誌』(新曜社)、『宗教と霊性』(角川選書)、『神と仏の精神史ーー神神習合論序説』(春秋社)、『霊性の文学誌』(作品社)、『神と仏の出逢う国』(角川選書)、『言霊の思想』(青土社)、『南方熊楠と宮沢賢治ーー日本的スピリチュアリティの系譜』(平凡社新書)、『「負の感情」とのつき合い方』(淡交社)ほか。

☆mediopos-3185　2023.8.7

▪フランソワ・ヴィヨン（宮下志朗訳）『ヴィヨン全詩集』（国書刊行会 2023/4）
▪中務鉄郎「宮下志朗訳『ヴィヨン全詩集』（国書刊行会）を読む」（『図書新聞』2023年7月29日）
▪太宰治『ヴィヨンの妻・人間失格』（文春文庫 2009/5）

かつて「ヴィヨン」の名を
はじめて耳（目）にしたのは
太宰治の『ヴィヨンの妻』だが

そこで「ヴィヨン」の名がでてくるのは
無頼派詩人・大谷の妻が
電車の天井からぶらさがっている雑誌の広告に
「フランソワ・ヴィヨン」という題の論文に
夫の名を見つけたというところだけである

フランソワ・ヴィヨンのことを
知っていても知らずにいても
どうもヴィヨンが怪しそうな人物だということは
伝わってくる

ヴィヨンの生涯について知られているのはわずかで
一五世紀フランスの詩人（一四三一年生まれ）
パリ大学で学ぶが喧嘩で人を殺し各地を放浪
恩赦でパリに戻るが悪い仲間と盗みを働き
投獄と釈放を繰り返しながら
遂に絞首刑の判決を受けたが控訴して
命は助かったものの
「悪しき生きざまにより」パリ所払いを言い渡され
その後消息がわからなくなった

なおパリ所払いになったのが一四六三年で
その二〇年後の一四八三年に
あの『パンタグリュエル物語』の
ラブレーが生まれている
そんな時代の詩人で悪党がヴィヨンである

そのヴィヨンの「全詩」の訳が
宮下志朗によって刊行されたのを機に
これまで断片的にしか読んでいなかったヴィヨンの詩を
まとまって読んでみることにしたがこれが面白い

詩の代表作は『遺言書』で
じぶんが絞首刑になることを想定して
書かれた二千行を超える長編詩である

それ以前に「形見分け」という詩もあるが
「中世の人びとには、その所有物のいっさいを、
どんなにつまらぬものにいたるまでも、ひとつひとつ、
たんねんに、遺言書によって遺贈する習慣があった」
（ホイジンガ）ということで
そのパロディとして書かれているといえる

その詩の形式は
主に八音節八行詩のバラードで
それは当時においても古くさい形式だったという

「中世の秋」であるその時代は
「ルネサンス絵画」にみられるように
文化的な革新の時代ではあったが
詩の分野では「保守の時代」だった

ヴィヨンの詩は革新的な詩型ゆえに
偉大な詩とされたのではなく
もっとも古くさい形式を最大限に使いながら
「「わたし」の生の軌跡を詩の主題」にし
「優雅さや優美さとは無縁の地点に立って、
個人の声を響かせて、個人の生きざまを語」ったことが
現代にまで読み継がれている理由のようだ

中世ヨーロッパ最高の詩人といわれているヴィヨンは
「弱く、卑怯で、嘘つき」で
「背徳・退廃において巧み」だったが
「まさにこの背徳・退廃から、
彼のもっとも美しい詩の数々が生まれた」のだという
（マルセル・シュオッブ）

ヴィヨンは宗教家ではないのでおそらくは
「背徳・退廃」を悔い回心することはなかっただろうが
泥のなかから不思議な美しい花が咲くように
それらの生々しいまでの詩は生まれたのだ

さて太宰治の『ヴィヨンの妻』は死の前年の作品である
「ヴィヨン」にどんな意味こめられたのかわからないが
ヴィヨンの生きざまがなにがしか反映されてもいるだろう

ちなみに「形見分け」「遺言書」という発想を
あらためてじぶんごとのパロディとして
それをバラードにしてみるのも面白そうだ

ヴィヨンはずいぶんヘンテコな形見だらけだったが
じぶんはどんな「形見」が遺せるだろうか
「ご笑納ください」とか言いながら･･･

▪フランソワ・ヴィヨン（宮下志朗訳）
　『ヴィヨン全詩集』（国書刊行会 2023/4）
▪中務鉄郎「宮下志朗訳『ヴィヨン全詩集』（国書刊行会）を読む」
　（『図書新聞』2023年7月29日）
▪太宰治『ヴィヨンの妻・人間失格』（文春文庫 2009/5）

（中務鉄郎（京都大学名誉教授）「宮下志朗訳『ヴィヨン全詩集』（国書刊行会）を読む」より）

「詩人の生涯は、当時の事件記録や尋問調書と作品を結びつけて、およそ次のように想像されている。フランソワ・ヴィヨンは一四三一年、パリに生まれた。これは英仏百年戦争の末期、ジャンヌ・ダルクがルーアンで火刑にされた年であるが、この頃のパリは、凶作と戦乱に苦しむ農民が流入して、市民の十人に一人以上が乞食・放浪者であったばかりか。森で飢えた狼までも出没する巷であった。ヴィヨンは父なし子で、司祭ギョーム・ド・ヴィヨンに育てられ、パリ大学学士号を得るまでになるが、喧嘩相手を殺してパリを出奔、恩赦を得てパリに戻るが、悪い仲間を語らってナヴァール学寮から大金を盗み出し、発覚するまで地方宮廷でも活動した。その後も投獄と釈放を繰り返し、遂には喧嘩に連座して絞首刑の判決を下されるが、控訴して命はとりとめるものの、「悪しき生きざまにより」十年間のパリ所払いを言い渡され、その後の消息はふつと途切れてしまう。」

「本書の内容であるが、伝統に従って『形見分け』『遺言書』『雑詩篇』の順で進む。『形見分け』は八音節八行の詩節が四〇篇。つれない女に死ねとまで言われた「わたし」は、愛の殉教者として愛の牢獄から遠くへ逃げ去ることを決心するが、生きて帰れるかどうかも分からぬ故、各方面に形見分けをしておく、という構想である。中世には貧しい人もつまらぬものでも一つ一つ遺贈する習慣があり、本作はそのパロディとされる。育ての親には「わが評判」を残すが、それは人殺しの評判ということになる。恋仇もしくは同性愛の相手には剣を遺贈するが、その剣は飲み屋の形に取られているから、借金を返してから請け出して欲しいと言い添える。行きつけの床屋には切った髪を残して行く、など人を食った形見分けをするうちに夜九時の金が鳴り、祈っていると意識朦朧となり、気がつけばインクは凍り、蝋燭も終わりかけていた、と詩は言う。時は一四五六年のクリスマスの頃、時刻はあたかもヴィヨンたち五人がナヴァール学寮に盗みに入った時に重なる。犯罪を犯した時刻に『形見分け』を書いているという設定は豪胆と言えば豪胆。ここでは心神喪失という陰画の形で犯罪が語られているのではないか、と訳者は推測する。」

「『遺言書』は八音節八行の詩節が一八六篇、随所にバラード等の定型詩が二〇篇ほど挟まれ、総数は二千行を超える。この作品は遺言という語に旧作のバラード群を嵌め込んでヴィヨンの詩業の集大成としたもので、『形見分け』がその発想の母型となっている、と訳者解説する。このような構想の長編詩から、私は『伊勢物語』を連想する。こちらは稀代の色好み在原業平の一代を歌と挿話で綴った作者不詳の歌物語であるが、『遺言書』は、マン＝リュル＝ロワール（オルレアンの西方）の過酷な牢獄を出たものの、もはや世にあることも長くないと感じたヴィヨンが、「わたし」を語り手にして愛の殉教者の晩年の思いを吐露させた歌物語、という風に考えられないであろうか。

　『遺言書』は「わたし」を投獄したオルレアン司教ティボー・ドシニーへの憎しみの表白で始まるが、一七詩節以下、アレクサンドロス大王とディオメデスの挿話でキーワードが提示される。大王がこの男を海族として処刑しようとすると、男は、小さな船で海を荒らせば海族、軍隊で世界を荒らせば大王、極貧ゆえに罪を犯すのも運命だと訴え、大王に悪運を幸運に変えてもらう。自分にも運命を変えてくれる大王のような人がいたらと回顧しながら、「それにしても、わたしは青春の日々を後悔している」（二二詩節）と青春ノスタルジーに移ってゆく。若い日々の遠く消え去るのは「織物職人が／布きれのはじっこに／火のついや藁をかざした時のよう。／はみ出た糸があると／あっという間に燃えてしまう」（二八詩節）、比喩の巧みも際立っている。

　そして、遊び仲間は今いずこの思いは、「それにしても、去年の雪はどこにある？」のルフランで名高い「その昔の女性たちのバラード」を導く。年老いて稼ぐに稼げなくなった女の、「わたしたちはなんのために、なぜ／早く生まれたのでしょう」（四六詩篇）という嘆きは倒錯していておかしい。四七詩節からは兜屋小町の老残の嘆きであるが、全ての男を手玉にとりながら一人の悪党に入れ上げた女の今は、「やだやだ！太もももなんて、／太ももじゃなくて細ももさ」（五五詩節）と訳も快調である。

　七八詩節からようやく遺言が始まるが、「わたしの肉体を／われらの偉大な母なる大地に贈る。／うじ虫には大したごちそうになりそうにないがね」（八六詩篇）といった具合。しかし、母親に贈る詩として挟まれる「聖母マリアに祈るためのバラード」は絶唱で、注解はゴーティエやヴァレリーの賛辞を紹介してくれる。

　遺言が終わると、ふざけた埋葬場所の指定があり、一七八詩節「墓碑銘」で、「ここ、上の部屋に眠るのは／愛の神の矢で殺された／貧しくも、しがない学生／その名はフランソワ・ヴィヨン」と、初めてフルネームが明かされる。「結びのバラード」では、「ヴィヨンの弔いの鐘が聞こえたら、「みんな、彼の葬式に来ておくれ」と呼びかける。この後に更に「友人たちへの手紙のバラード」と「運命のバラード」が置かれるのは本書の独特なところで、これは本書が底本とする写本に忠実に従う結果である。

　最後に私が深い印象を受けたのは、あの世からこちらを見るヴィヨンのまなざしでる。「絞首罪人のバラード」（『雑詩篇』の中）では、絞首台にぶら下がり雨に洗われ陽に焼かれる「おれたち」五、六人が、まだ生きている人間兄弟たちに語りかけるが、「おれたち」は『遺言書』の「わたし」でありヴィヨンその人でもある。死など恐れぬげに犯罪を重ねてきたヴィヨンが、死をいかに深く考えていたかがここから窺えるのではなかろうか。

　齢三〇にして見るべきほどのものは見尽くした詩人の、生のはかなさへの諦観と、なお残るこの世への恨みと愛情。そして後悔慚愧を詩に昇華する意志と言葉の巧み。そのようなことを本書を読みながら味わえたように思う。」

（『ヴィヨン全詩集』～解説「I　ヴィヨンーーーーその人生と伝説」より）

「フランソワ・ヴィヨンという詩人。その生涯についてわれわれが知りうることはまことに少ない。「ヴィヨン伝説」に比して、はななだ少ないのであるる。ヴァレリーの喩えを借用するならば、「レンブラントの絵」さながらで、「大部分が闇の中に沈み込み」ながらも、いくつかの断片が「異常な鮮明さと、ぞっとするほどくっきりとしたディテールでもって、ぬっと現れる」（ヴィヨンとヴェルレーヌ）といった体のものである。」

（『ヴィヨン全詩集』～解説「II–１『形見分け』」より）

「まずは「形見分け」である。ホイジンガが、「中世の人びとには、その所有物のいっさいを、どんなにつまらぬものにいたるまでも、ひとつひとつ、たんねんに、遺言書によって遺贈する習慣があった」（『中世の秋』［ホイジンガ］）と語ってある貧しい女の例を挙げている。一見してつまらないものだって、その当人にとっては重要な意味を有しているのだし、つまらないものを贈ることが、深い意味や詩や心を秘めていることもある。ヴィヨンはこうした心性や習慣を逆手にとって、遺言書のユニークなパロディをものした。」

（『ヴィヨン全詩集』～解説「II–１『形見分け』」より）

「まずは「形見分け」である。ホイジンガが、「中世の人びとには、その所有物のいっさいを、どんなにつまらぬものにいたるまでも、ひとつひとつ、たんねんに、遺言書によって遺贈する習慣があった」（『中世の秋』［ホイジンガ］）と語ってある貧しい女の例を挙げている。一見してつまらないものだって、その当人にとっては重要な意味を有しているのだし、つまらないものを贈ることが、深い意味や詩や心を秘めていることもある。ヴィヨンはこうした心性や習慣を逆手にとって、遺言書のユニークなパロディをものした。」

（『ヴィヨン全詩集』～解説「II–２『遺言書』」より）

「『遺言書』は優に二千行を超える長編詩にして、ヴィヨンの代表作である。」

「バラードなどの定型詩もまじえて展開される『遺言書』という長編詩を読んでいると、全編を通しての、「わたし」による「語り」という様相が立ち現れると同時に、こうした「語り」が、「叙情的（リリカル）」なものといかなる関係を取り結ぶのかといったことを漠然と考えさせられる。」

（『ヴィヨン全詩集』～解説「＊」より）

「ヴィヨンが駆け抜けた「中世の秋」は、文化的には大きな革新の時代の始まりで、このことは「ルネサンス絵画」を思い起こせば想像がつく。ところが、詩の分野は事情が異なり、どうやら保守の時代であったらしい。碩学ズムトールは、こう述べる。

　　ヴィヨンは一見して、われわれにすごく近いから、その作品を読む現代の読者は思い違いしかねない。実際は。（「大押韻派」の詩人たちを除けば）、中世末の偉大な詩人たちは、みな保守的なのであった。（中略）詩においては、変化は緩慢であった。（中略）ヴィヨンは表面的な革新には興味がなかったのだ、（中略）だから、八音節の八行詩、バラードという、その時代の古臭い形式しか使わない。（「Zumthor」）。

　となると、詩人ヴィヨンは、古い皮袋に新しい酒を入れたのか。

（･･･）

　中世末の詩の小宇宙では、ホイジンガ流に言うならば、「新しい形式と新しい精神とは、たがいにしっくりと重なり合ってはいなかった」（『中世の秋』［ホイジンガ］）らしい。では、このような状況ーーーー花田清輝の「転形期における分裂した魂の哀歌」とも少し重なるかもしれない。（「楕円幻想」）ーーーーにヴィヨンを置き直してみたとき、どうなるのか。彼は「大押韻派」ではない。ズムトールが述べたように、「八音節の八行詩、バラードという、その時代のもっとも古くさい形式」しか用いなかったのだ。しかしながら、これを最大限に活用して、「わたし」の生の軌跡を詩の主題と思い定めて、「フランソワ・ヴィヨン」という固有名の元に統合しようとしたのである。そればかりか、「隠語詩篇」にも手を染めて、折り句（アクロスティッシュ）で書名した。優雅さや優美さとは無縁の地点に立って、個人の声を響かせて、個人の生きざまを語るところーーーーこれが詩人の目指すところであった。本人自身が、落魄の、ちょっと道化たインテリであったのかどうかまではわからないが。

（･･･）

　ズムトールは、「ヴィヨンはもはや詩を信じてはいない」とまで断定したが。それはどうなのだろうか。新しい世界の機序が生まれ、従来の機序に対応していた「詩」が、詩的言語の再編成を迫られていたことは疑いない。けれどもヴィヨンは、一九世紀における「散文詩」のような革新をなしたわけではなかった。既存のフォーマットを活用して、「わたし」を中心に据えて、ときには軽妙に、ときには苛烈に炸裂してみせたのである。その「わたし」がとても親しい存在に感じられる。」

（太宰治『ヴィヨンの妻・人間失格』～「ヴィヨンの妻」より）

「どこへ行こうとあてもなく、駅のほうに歩いて行って、駅の前の露天で飴を買い、坊やにしゃぶらせて、それから、ふと思いついて吉祥寺までの切符を買って電車に乗り、吊革にぶらさがって何気なく電車の天井にぶらさがっているポスターを見ますと、夫の名が出ていました。それは雑誌の広告で、夫はその雑誌に「フランソワ・ヴィヨン」という題の長い論文を発表している様子でした。私はそのフランソワ・ヴィヨンという題と夫の名前を見つめているうちに、なぜだかわかりませぬけれども、とてもつらい涙がわいて出て、ポスターが霞んで見えなくなりました。」

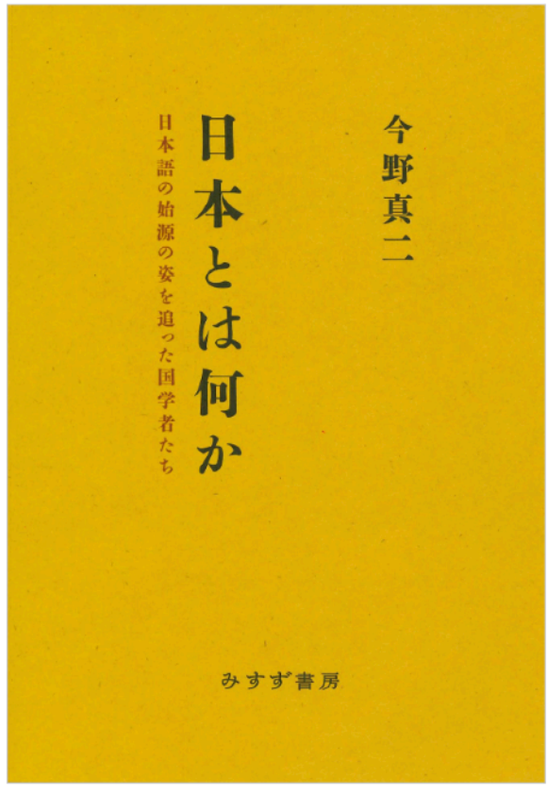
○『ヴィヨン全詩集』【目次】

形見分け
遺言書
雑詩篇
　註解
　解説
　ヴィヨン年表
　詩篇詳細目次
　あとがき
　関連古地図／書誌／写本と古刊本

◎フランソワ・ヴィヨン（François Villon９
15世紀フランスの詩人、泥棒、殺人者。

◎宮下志朗
1947年生まれ。東京大学・放送大学名誉教授。著書に、「本の都市リヨン」(大仏次郎賞受賞)、「ラブレー周遊記」、「神をも騙す」ほか。訳書に、「ガルガンチュアとパンタグリュエル」(読売文学賞受賞)ほか。

☆mediopos-3186　2023.8.8



▪今野真二『日本とは何か――日本語の始源の姿を追った国学者たち』
（みすず書房 2023/5）

「日本の始め」
それを心情から
明らかにしようとするとき
もっとも古い日本語のテキストを
「丁寧によんでたどる」必要がある

それを明らかにしようとした
江戸の学問が「国学」である

もっとも古い日本語のテキストは
『古事記』『日本書紀』『万葉集』で
散文と韻文ということでいえば
『古事記』『日本書紀』は散文
『万葉集』は韻文である

本書ではそれらを読み解こうとした
契沖・賀茂真淵・本居宣長・富士谷御杖といった
国学者の「テキスト（をかたちづくる言説）」を
「あらかじめ用意された「物語」や
抽象的な「思想」」としてではなく
「精読＝追跡（トレース）」する試みである

古文献は漢字によって文字化されたテキストで
国学者たちはその漢字の背後に
かつての日本語の姿をよもうとし
「日本とは何か」を探った

「国学の鼻祖」といわれた契沖は
仮名発生以前に中国語の文字である漢字により
日本語がどのように文字化されていたのかを探求した

賀茂真淵は「音」に言語の根幹を見いだし
「音節、五十連の音の気づきをもたら」した

本居宣長は「語化されたことばを精緻に読み解くことで
上代の人間のこころを知ろうと」した

「異端の国学者」ともいわれる富士谷御杖は
「心のままを直言しない、
感情のコントロールを経た表出である「倒語」を追求し、
人の感情＝人情のありかたを深く探った」

著者の今野真二は
こうした「国学者のあらわしたテキストを
できるだけ丁寧によむ、
ということを「方法」とした」という

それは「書き手がテキストを生成していく道筋を、
言語表現を頼りにして追跡するという意味合い」をもつ

そうした「書き手の考えや「気持ち・感情」を
実感する、追体験する」というと
非科学的だという批判もあるだろうが
今野氏は「限定的ではあっても、
科学とみなし得る言説といえるのではないか」という

どちらにしても
現代の私たちはおおざっぱにみても
平安時代までの「古代日本語」
鎌倉時代・室町時代の「中世語」
江戸時代の「近代日本語」といった
たくさんのフィルターをとおして
「日本語の始原」を垣間見るしかない

本書はそのために江戸の国学者の「よみ」を
「精緻」に「追跡（トレース）」していく
きわめて啓発されるところの多い労作である

▪今野真二『日本とは何かーー日本語の始源の姿を追った国学者たち』
（みすず書房 2023/5）

（「序章　江戸のエピステーメー」より）

「江戸時代の知がどのような「枠組み」をもっていたかを簡単に説明することはできない。できないのではあるが、その、想定される「江戸時代の知の枠組み」の中で、現在「国学者」と呼ばれる人々がどのような「知」にふれ、どのような「知」にたどりついていたかということについて、国学者があらわしたテキストを丁寧に読み、たどっていくことを緒として考えてみることを本書の目的としたい。

「丁寧によんでたどる」は「精緻」と言い換えてもよいし、「追跡（トレース）」と言い換えてもよい。（･･･）「精読＝追跡」は「テキスト（をかたちづくる言説）」という具体的なことを起点とし、そこを実際に歩いて観察するという、「知」へのアプローチの一つの「方法」でもあり、あらかじめ用意された「物語」や抽象的な「思想」として語らない、ということでもある。

国学者として、契沖（一六四〇ーー一七〇一）、賀茂真淵（一六九七ーー一七六九）、本居宣長（一七三〇ーー一八〇一）、富士谷御杖（一七六八ーー一八二四）四人に注目し、この四人のあらわしたテキストを採り上げ、可能な範囲で、これらの人々が「たどった道」をとらえ、同時に「道のまわり」にも目配りをしたい。「たどった道」をとらえようとする視点は、どのようにして学を形成したか、ということを含んだ「経時的・通時的な視点」である。「まわり」への目配りは、これらの人々のまわりに具体的にどのような人々がいたか、ということを含んだ「共時的な視点」である。「経時的（通時的）視点」と「共時的視点」の交叉点に具体的なそれぞれの人物がいて、具体的なそれぞれの「知」がある。

国学者と呼ばれる人々のあらわしたテキストは、一見するとまちまちに見えるが、その背後には「古代の日本」につよい関心をもち、「日本・日本文化の淵源」を明らかにしようとしたという共通性があるように見える。

さて、日本語を通時的にとらえる時に、「古代日本語」と「近代日本語」とに分けることがある。「古代日本語」は平安時代まで、「近代日本語」は江戸時代からで、鎌倉時代、室町時代を過渡期とみて「中世語」と呼ぶことがある。本書は、言語（日本語）をおもな観察対象としているので、「古代」は「古代日本語」と重ね合わせることにして、平安時代までの時期を指すことにしたい。」

「契沖は自身の悉曇（しったん）学の成果をふまえ五十音図にちかい表をつくっており、表をつくるための整理を通して「音素」的な発想にたどりつく。一方、賀茂真淵は『万葉集』を読み解く過程で、「冠辞」＝枕詞に着目し、そこからさらに「音素」的な発想にたどりつく。この真淵の「音素」的な発想は、後の「音義学派」にそもまま、もしくはかたちを変えて受け継がれていく。」

「人間の感情について配慮しすぎると過剰に心理的な解釈に陥りやすい。宣長た、宣長の息である春庭は和歌を観察対象にして日本語の文法システムを考察した。言語量に制限が加えられている和歌においては、一つの助詞、一つの助動詞、一つの語の選択が重要になる。なぜこちらの語を選んだか、この語ではなくこの語を選ぶと歌意はどうなるのか、という「言語の小さな動き」の読み解きに沈潜したことによって、「システム」のありかたをつきとめたのではないだろうか。」

「国学者たちはほとんど例外なく和歌をつくっていた。『万葉集』を起点とし、『古今和歌集』『新古今和歌集』といった和歌を精読することは和歌をつくるための必須のプロセスでもあった。過去につくられた和歌にどのように「感情情報」がうめこまれているかを知り、自身は和歌を詠むことで、「感情情報」をうめこむ実践的なトレーニングをする。「読む」と「詠む」とをともに行なう。まさに双方向的（interactiv）なアプローチといってよい。

国学者たちは、詩的言語である和歌を素材とした言語観察をいわばごく自然に行なったと思われるが。宣長と宣長の息の春庭は和歌の分析から「係り結びの法則」を発見し、春庭は日本語の活用についての考察をふかめた。」

（「第一章　フィロロジスト契沖」より）

「『和字正濫鈔』が「かなづかい書」であるかどうかはともかくとして、契沖の残したテキストといえば、『万葉代匠記』と『和字正濫鈔』がまずあげられるであろう。その二つのテキストは「回路」で結ばれていることを述べた。「古代の日本」を追求した契沖がたどりついたのは、「漢字」であり、中国語をあらわすための文字である漢字によってどのように日本語を文字化しているかという思索、洞察を通して『和字正濫鈔』というテキストが生まれたと考えたい。漢字について正確に理解するためには、漢籍の精読が前提となる。契沖は漢籍を精読し、それを「自家薬籠中」のものとすることによって、『万葉集』を読み解いた。その過程において「文證」を重視する「文献学的アプローチ」が錬られていった。」

（「第二章　賀茂真淵ーー経験、直感による知覚」より）

「真淵は『万葉集』に沈潜した。それは、上代のことがら、徳に上代人の心を知ることで日本の淵源を知ろうとしたからであったと思われる。心は歌＝詩的言語に盛り込まれるところから、真淵は自信も歌をよむ続けた。現代は「論理的であること」を重視していると少なくとも表面上は思われる。しかし、「論理的とはどういうことか」ということは案外と確認されていないように見える。「直感的アプローチ」は現代では「論理」とはみなされないだろう。しかし、では人間にかかわることがら、人間にかかわらないことがらのすべてが「論理」で説明できるだろうか。そう考えた時に、少なくともアプローチの「方法」として「直感・感覚」を認めることは考えてもよいはずであるし、場合によっては「論理」ということについてもう一度考えてみてもよいかもしれない。「温故知新」はいいふるされた表現かもしれないが、「過去」に丁寧にふれることによって新たな気づきを得ることには終わりはないように思う。」

（「第三章　本居宣長」より）

「音声化された言語＝音声言語によっても、文字化された言語＝文字言語によっても、「事の理義を得る」ことができるというのが現ダウの「みかた」である。音声化されてアウトプットされた音声言語はまさしく言語であり、文字化されてアウトプットされた文字言語も（二次的存在ととらえるみかたはあるが）やはり言語であり。現代の「みかた」では、音声言語も文字言語も実体的な言語である。しかし宣長はそれは「死物」であり、活きた言語はそこにはない、とみている。何らかの手段、媒体によってアウトプットされたものは、アウトプットされた瞬間に死ぬとみているのだろう。アウトプットされる直前の、稿者の表現でいえば「言語化された情報」こそが活きた言語ということになる。」

「文字化されたテキストに沈潜し、それを精読することによって、「日本の古代」就中「日本の古代のころ」に迫ろうとしていた宣長にとっては、テキストは「読み解く」対象であり。そこには「ことがらそのもの」も「こころ＝感情そのもの」もない、と考えていたと思われる。」

（「第四章　富士谷御杖の言霊倒語説」より）

「御杖の「言霊」についての言説を抽出して、まとめれば、それ全体を「御杖の言霊論」あるいは「御杖の言霊思想」と呼ぶことはできるだろう。しかし、「思想」が「考えるの束・みかたの束」であるとすれば、そのように束ねたのは現代人ということになり、そういう「考えの束」が御杖にそもそもあったか、ということにならないだろうか。

御杖の「言語倒語」は「言霊」ではなく「倒語」に重点があると考える。それは思っていることを「直言」しないということで、人がもつ「感情」のコントロールということと深くかかわっている。そして御杖の目は言語化された言語表現を深く読み解くことによって人の「感情」のありかたを深く探っていく。「人の感情」すなわち「人情」を深く探ったということにおいて、荻生徂徠、本居宣長、富士谷御杖は重なり合うと考える。」

（「終章　詩的言語と国学者」より）

「脳内にある「他者に伝えたい情報」がアウトプットされる、そのアウトプットの一つの「方法」として「言語化」があるというモデルを稿者は考えている。視覚的な形式にアウトプットするのであれば。それは「映像化」という「方法」になる。「言語化」を経ずに「映像化」できるかどうか、ということについては考える必要があろうが、とにかく、アウトプットには幾つかの「方法」があると考え、その一つが「言語化」であると考えることにする。

「情報」を大きく「（あまり感情的な要素が入っていない）ことがら情報」と「（感情的な要素が多い）感情情報」とに分けると、和歌を初めとする詩的言語は、どちらかといえば「感情情報」を盛り込む器となることが多い。富士谷御杖の「言霊倒語」説は。和歌を「鬱情」をそらす器ととらえている点において、右のモデルに基づく稿者の「詩的言語」観と重なり合いをもつ。」

（「あとがき」より）

「「日本とは何か」という問いは大きなタイトルではあるが、少しことばを補うとすれば、江戸時代の国学者が「日本の始原」、すなわち時期でいえば「古代の日本」について知ろうとした、それが「日本とは何か」で、知るために「日本語の始原の姿を追求した」ということだ。

「日本とは何か」という問いは（ある程度にしても）最初から答えを見通すことができないような大きな問いといってよい。国学者は残されているテキストを溯っていった。そうしてたどりつくのが『古事記』『日本書紀』『万葉集』という、タイプの異なる三つのテキストということになる。「散文」「韻文」ということばを使うのであれば、『古事記』『日本書紀』は散文で『万葉集』は韻文、『古事記』は古典中国語＝漢文を基準にするならば、少しイレギュラーな漢文で、『日本書紀』はほぼ正則な漢文ということになる。どのテキストを観察対象にするか、に国学者の「みかた」が反映する。

本居宣長について「不可知論」ということばが使われることがあるが、宣長を初めとして多くの国学者たちが文字化されたテキストの「よみ」の「地点」にとどまっていることは、むしろ評価すべきであろう。『古事記』『日本書紀』『万葉集』を超えて日本を探ろうとするのは、いわば海図なしに海に漕ぎ出すようなものといってよい。

漢字によって文字化されたテキストの、その文字の背後に日本語をよみとろうとすることがテキストを「よむ」ことであり、そのことによって「日本語の始原の姿」を追求し、「日本とは何か」を探る。本書は、国学者のあらわしたテキストをできるだけ丁寧によむ、ということを「方法」とした。そう述べると、テキストをよむことは「方法」かという疑問が提示されるかもしれない。宣長は『うひ山ぶみ』において、「古学とは、すべて後世の説にかかはらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事を、つまぶらかに明らむる学問也」と述べている。
（･･･）

テキストをよんで書き手の「肉声」が聞こえてくるはずがない、と述べることは簡単だろうが、それは「肉声」という表現を探ったことの揚げ足取りのように思われなくもない。テキストを丁寧によむ、テキストを精読するということを稿者は「トレース」と呼ぶ。書き手がテキストを生成していく道筋を、言語表現を頼りにして追跡するという意味合いである。書くことによって、自身の考えが整理されていく、と感じることがあるし、書くことによって自身の「気持ち・感情」のありどころがわかる、と感じることがある。「書く」と「読む」とは双方向的な言語行為といってよい。そうであれば、自身が書いたようなつもりになって読むことににによって、書き手に考えや、もしかすると「気持ち・感情」のありどころがわかることになる。そうしたことを、書き手の考えや「気持ち・感情」を実感する、追体験する、と表現すると非科学的とみなされやすくなるだろう。しかし、では科学的とは何かといえば、それは根拠（と思われる）ことがらに基づく推論であろう。古事記が文字化されたルートを逆にたどろうとした宣長の「方法」は（宣長は「方法」とはみていなだろうが）内部観察的ではあるかもしれないけれども、たどることを「方法」としているという点においてーーーーつまり「方法」をもっているという点、そこに反論の余地があるという点においてーーーー、限定的ではあっても、科学とみなし得る言説といえるのではないか。内部観察的であることを批判し、外部観察的にみることを主張したとしても、それは観察点をどこに設定するかという違いともいえ、批判はそうした意味合いにおいて、相対的なものということになる。」

◎目次

序章　江戸のエピステーメー
二つのエピステーメー／古代のテキストを訓（よ）む／言語を分解する／「感情情報」への接近ーーメタ言語と和歌／双六から探る皇朝学／動的な江戸時代の学際／宣長宇宙

第一章　フィロロジスト契沖
一　契沖の『萬葉集』研究ーー万葉仮名を整理する
「正語仮字篇」というテキスト／現在の方法と契沖の方法／いろいろな「よめない」／契沖のアプローチーー漢籍の精読、サンスクリット（悉曇）研究／区別があるから通じる

二　『和字正濫鈔』は仮名遣い書か
『万葉代匠記』から『和字正濫鈔』へ／『和字正濫鈔』ーー漢字で文字化された日本語にたどりつく／思考を図であらわす

三　橘成員との論争
『和字正濫鈔』への批判ーー『倭字古今通例全書』／契沖の論駁ーー『和字正濫通妨抄』『和字正濫要略』／まことと和歌

四　語源・異名への意識ーー『円珠庵雑記』をよむ
語源について／異名について

第二章　賀茂真淵ーー経験、直感による知覚
一　『冠辞考』
あまとぶや／ぬえぐさの

二　直感によるアプローチと論理
いにしへのこころ／真淵と宣長

三　歌を詠むこと・歌を理解することーー実践的解釈論
ひたぶる心／心におもふ事がうたになる／感情の表出

四　五十音図による音義的解釈のさきがけ
「仮字（かな）」と五十音／音義的な語構成観／知のネットワーク／延約転略の説／今夜の月夜／おわりに

第三章　本居宣長
一　文法のダイヤグラムーー『てにをは紐鏡』
「係り結び」の意識化ーー中世から江戸への伝授／『てにをは紐鏡』を観察する

二　仮名によって漢字の発音を示すーー『字音仮字用格』
「假名都加比」と『字音仮字用格』／漢語を仮名で書く・漢字音を仮名であらわす

三　メタ言語としての口語
メタ言語ーー言語を言語で説明する／メタ言語の獲得／「古言」「里言」というメタ言語ーー富士谷御杖『詞葉新雅』／文献密着主義／文献における具体と抽象／日本列島外の日本語ーー岡島冠山『唐話纂用』／日本列島内のさまざまな日本語ーー越谷吾山『物類称呼』

四　宣長の方法ーー『古今集遠鏡』
『古今集遠鏡』を概観する／人文知のとらえかた／真淵との「始対面」／余白に書く／宣長のよみ／人情、感情の言語化／古文辞学の方法ーー荻生徂徠から真淵、宣長へ

五　上田秋成との論争ーー「呵刈葭」
「呵刈葭」を概観する／「呵刈葭」上巻の論争／民族主義的であることと論理的であること／音声言語の位置づけ／おわりに

第四章　富士谷御杖の言霊倒語説
一　異端の国学者
御杖の生きた時代／未分化なテキスト／二十世紀の御杖の評価

二　歌を詠むことで「真言(まこと)」を追究する
人の心のありかた／人にとって歌とは何かーー歌論『真言弁』／歌の「稽古修業」ーー『歌道非唯抄』／古典を照らす「燈」

三　さまざまな言語学的知見
六運／脚結（あゆい）に着目するーー『あゆひ抄』と『俳諧天爾波抄』／『和歌いれひも』／メタ言語としての口語ーー『詞葉新雅』／伝達言語と詩的言語

四　言霊倒語説
おわりに

終章　詩的言語と国学者
国学者が和歌を作るということ／本居宣長『新古今集美濃の家づと』／国学者たちの「連続」の「感覚」／人情にちかいこと／人情と思想のかかわり

註
あとがき

☆mediopos-3187　2023.8.9

「植物」であることをやめた
というのではないけれど
「植物」のもっとも大きな特徴である
「光合成」をやめた植物たちがいる

地球上に生息している約30万種の植物がのうち
1000種ほどがそんな光合成をやめた植物たち

今年ひさしぶりに森で
キノコのようにもみえることから
「ユウレイタケ」と呼ばれることもある
「ギンリョウソウ」を見つけることができたが
それは光合成をやめた植物のなかでは
もっとも目にする機会の多い種類だそうだ
見た目はまったく違っているけれど
ツツジの仲間なのだという

先日見つけることができたのも久々のことで
こうした種類の植物たちの多くは
暗い林床に生えていて
小さくて見つけにくいものが多い
カラフルでユニークな姿をしたものも
たくさんあるようだ（がなかなか見つからない）

かれらは姿もユニークだけれど
その生き方も独特で
光合成をしないので葉ででんぷんをつくる必要がなく
花が咲いて実をつけるわずかな期間しか
地上に姿を現わさない

また自前で養分をつくりだせないので
自分の根にやってきた菌糸を消化し
それを栄養にすることで生きている

暗い森林の中で生きているので
そこには花粉を運ぶ虫がほとんど訪れないため
自家受粉をしたり
腐ったキノコのような匂いを出して
ショウジョウバエをだまして花粉を運ばせる
クロヤツシロランというのもいる

▪月刊たくさんのふしぎ　2023年9月号
『「植物」をやめた植物たち』（文・写真／末次 健司）
（福音館書店 2023/9）

そのクロヤツシロランは
花の時期には３センチほどなのに
果実をつける時期には30〜40センチにまで伸びて
風でタネを飛ばしたりもする

そうした芸当のできない
地上付近に目立たない小さな果実をつける種類は
カマドウマやアマミノクロウサギに
果実を食べさせることでタネを運ばせたりもするそうだ

かつて光合成をしていたのに
なぜやめてしまったのかわからないが
その生活もなかなか大変で
「ほかの生き物との関係性を
劇的に変化させることで」成り立っている

しかもそんな存在が生きていくためには
「光合成をやめた植物が養分を横取りしても問題のない、
生態系に余裕がある」豊かな森である必要がある

こうした不思議な生態をもった植物のことや
それを可能にする生態系に目を向けることは
いま私たちが生きている環境そのものを
問い直すことにもつながっていく

著者は「野外で生き物の不思議を解明する
「フィールドワーク」という活動」を
大切にしているということだが
ぼくのように野山を歩いて
観察のまねごとをするだけでも
ずいぶんと「世界」への見方は深まっていく
なによりこんなに面白いことはない

世界は「不思議」に満ちているから

▪月刊たくさんのふしぎ　2023年9月号
『「植物」をやめた植物たち』（文・写真／末次 健司）
（福音館書店 2023/9）

「自らは光合成をせず、菌類から養分をもらって生きる植物。彼らの生き方は一見するとお気楽なものに思えます。しかし彼らはそんな生き方を可能にするため菌類をだますなどの工夫をしていました。また暗い森で生活するために、咲くことをやめたり、ふつう花や果実にはやってこないような昆虫を、花粉やタネの運び屋として利用したりしていました。
　つまり光合成をやめた生活は、単に光合成を「やめる」という単純なものではなく、ほかの生き物との関係性を劇的に変化させることで成り立っていたのです。
　光合成をやめた植物は、森の生態系に入り込み、寄生する存在です。このため、キノコやカビの菌糸のネットワークが地下に広がっていて、光合成をやめた植物が養分を横取りしても問題のない、生態系に余裕がある森林でなければ、育つことはできません。つまり、光合成をやめた植物が存在するということは、そこが豊かな森であることを示す証拠なのです。」

（「光合成をやめた植物は･･･／いろんなところに生えている」より）

「光合成をやめた植物は、ある特定の場所にんだけ生えているわけではありません。彼らは、北海道から沖縄まで、日本各地の山や森で見ることができます。（･･･）地球上には約30万種もの植物が生息しているといわれますが、そのうちのおよそ1000種が光合成をやめた植物たちです。」

（「「光合成をやめた植物は･･･／見つけにくい」より」より）

「光合成をやめた植物は、葉ででんぷんをつくる必要がないので、花が咲いて実をつけるわずかな期間しか地上に姿を現しません。また小さなものが多く、１センチにも満たないものまで存在します。さらに昆虫に食べられるのを防ぐため、枯れ葉そっくりの種類もいます。このため、見つけるのがとても難しく、研究が進んでいませんでした。」

（「「光合成をやめた植物は･･･／ご先祖様はミドリ色だった」より）

「光合成をやめた植物も、もともとは光合成するふつうの植物から進化したと考えられています。たとえばギンリョウソウは、光合成をやめた植物の中ではもっとも目にする機会の多い種類ですが、なんと赤い花でおなじみのツツジの仲間です。でもツツジとギンリョウソウでは、見た目が全然違っていますよね。」

（「寄生と共生」より）

「自然界にはもともと共生のパートナーであった生物に一方的に寄生するように進化した生物がたくさん存在しています。例えば、花と花粉を運んでくれる動物との関係でも、きれいな花を咲かせるものの、実際には蜜などの報酬を与えず、花粉の運び手をだまして花粉を運んでもらう植物が存在します。
　つまり寄生と共生は正反対というわけではなく、ちょっとした変化でどちらにも変わりうる表裏一体の存在なのです。」

（「光合成をやめた植物のくらし①／キノコを食べる」より）

「光合成をやめた植物の多くは、キノコやカビなどを食べて生きています。（･･･）
　光合成をやめた植物は、菌糸の形で根に入ってきたキノコやカビに糖やでんぷんを与えないどころか、その菌糸を消化して自分の栄養にしてしまうのです。このため現在、光合成をやめた植物は、正式には「菌従属栄養植物」と呼ばれています。」

「実は、光合成を行う植物が菌類に報酬としてあげる糖やでんぷんは、光合成でつくったすべての養分の二割にもおよぶといわれています。光合成をやめて菌類に寄生するようになった植物は、この高い報酬を避けるように進化したと考えられています。
　つまり光合成をやめた植物は、お互いに利益をもたらしていた菌類に、一方的に寄生していることになります。」

「菌類にとっては、光合成をやめた植物に消化されてしまうのは迷惑な話でしかないはずですが、不思議なことに、菌はまるで自分から栄養を与えたいかのように、光合成をやめた植物に向かって菌糸を伸ばします。」

「なぜ光合成をやめた植物の場合は菌類と関係を保つことができるのか、その謎はまだ完全には解明されていませんが、「菌に栄養分を与える」というニセの信号を出して上手に菌をだましていると考えられています。」

（「光合成をやめた植物のくらし②／花粉の運び方を変える」より）

「光合成をやめた植物は、ほかの植物は生育できないうような、非常に暗い森林の中でも生きることができます。しかし、そのような環境には、ハチやチョウといった花粉の運び屋はほとんど訪れません。花粉が運ばれなければ、受粉できないので、果実をつけることができないのです。
　では、そのような環境でどうやって受粉することができているのか調べてみると、多くの種類でm花粉は同じ花の雄しべの柱頭にくっつき受粉することがわかりました。これを自家受粉といいます。」

「また、ふつうは花にやってこない昆虫を花粉の運び屋として利用するものもいます。
　暗い森林の地表近くを飛び交うショウジョウバエは、腐ったキノコを幼虫のえさにします。クロヤツシロランの花は腐ったキノコのような匂いを出すので、ショウジョウバエは、その匂いに誘われて、卵を産みに来ます。（･･･）クロヤツシロランはキノコの匂いをまねてショウジョウバエをだまし、花粉を運ぶ仕事をさせていたのです。」

（「光合成をやめた植物のくらし③／タネの運び方を変える」より）

「クロヤツシロランは、花の時期には３センチほどしかないのに、果実をつける時期には30〜40センチにまで伸び、風でタネを飛ばします。」

「では地上付近に目立たない小さな果実をつける光合成をやめた植物はどんな動物にタネを運んでもらっているのでしょうか？}

「さまざまな生き物が果実を食べていることがわかりました。中でも、カマドウマの仲間が、どの種類についても、果実の大部分を食べていることがわかりました。」

「タネの運び手は虫だけではなく、予想外の動物もいることが最近になってわかりました。
　ヤクシマツチトリモチは、キノコのような見た目ですが、ほかの植物の根に寄生する植物です。果実に訪れる生き物を観察した結果、国の特殊天然記念物にも指定されているアマミノクロウサギが果実を盛んに食べることがわかりました。」

（作者のことば「光合成をやめた植物とフィールドワークの魅力」より）

「光合成をやめた植物の研究には大変な部分もあります。光合成をやめた植物は葉をつける必要がないため、わずかな期間しか地上に姿を現さないばかりか、全長で数mmしかないものも珍しくありません。そのため調査では苦労が絶えませんが、光合成をやめた植物のフシギを徐々に明らかにすることができています。特に光合成をやめた植物に目を向けるきっかけとなった「ギンリョウソウ」の新種「キリシマギンリョウソウ」を発見できたことは印象深い成果です。ギンリョウソウは世界で１種しか確認されていなかったため、どのくらい違っていれば新種といえるかの判断が難しく、様々な証拠を集めて20年かけて論文を発表することができました。今後も地道にコツコツと研究を続けることで、植物がどのようにして「光合成をやめる」という究極の選択を成し遂げたのかを明らかにしたいと考えています。

　私は、野外で生き物の不思議を解明する「フィールドワーク」という活動を重視しています。「フィールドワーク」は、自分の目で観察するというローテクな研究手段ですが、それだけで世界的な発見ができる点が魅力です。光合成をやめた植物のような特殊なものを除くとほぼすべてに名前が附いています。一方で道端や公園に生えている「雑草」であってもその形や匂いにどのような意味があるのかまではよくわかっていません。このため身近な生き物であっても、じっくりと観察すれば、世界中の誰も知らなかった不思議を解き明かすハードルはそれほど高くないのです。ぜひ皆さんも時間をかけて、興味を持った動植物を観察してみてください。どんな生き物でもじっくり観察したら必ず面白い発見があるはずです。」

◎末次 健司(すえつぐけんじ)
1987年、奈良県生まれ。2010年京都大学農学部卒業。2022年から神戸大学理学部教授。専門は進化生態学。光合成をやめた植物の生態を研究し、「キリシマギンリョウソウ」や妖精のランプと呼ばれる「コウベタヌキノショクダイ」など多くの新種を発見。さらに自然界の不思議を明らかにすることをモットーとし、多様な動植物に関する研究も展開。例えば、ナナフシが鳥に食べられても、なお子孫を分散できることを示唆した研究は、驚きをもって迎えられた。 」

☆mediopos-3188　2023.8.10

著者のカミラ・パンは
ADHD（注意欠如・多動性障害）
ASD（自閉症スペクトラム障害）
GAD（全般性不安障害）のある生化学博士である

「地球での生活が始まってから５年目のこと、
私は間違った場所に着陸したのではないかと
思い始めていた」
「言葉は理解できるのに伝わらない。
仲間の人間たちと同じ外見をしているのに、
本質的な特徴はまったく違う」･･･と

「普通」がわからないがゆえに
科学のレンズを通してみることで
人間やその社会的慣習といった「普通」を探求し
自分のための「人間の取り扱い説明書」を書き上げる

ぼくは著者のように生まれてはいないけれど
ずいぶんと「違和感」をもって生きてきた
かろうじてまわりに合わせることはできていて
とくに大きな問題はないものの
どこか「間違った場所」に来てしまった感も強くある

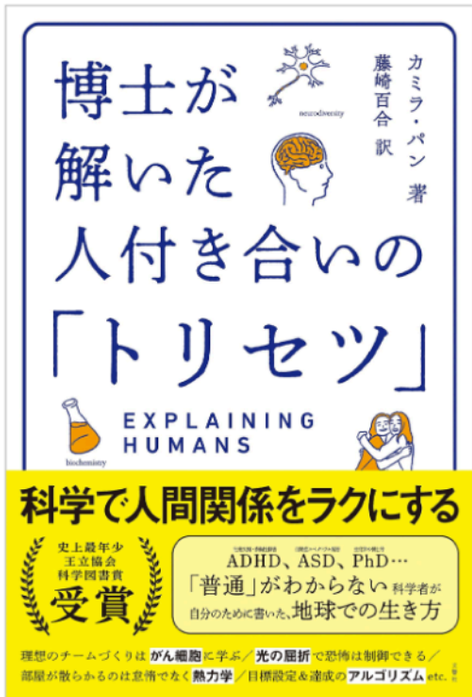
「科学」というレンズを通してではなかったけれど
おなじように「人間の取り扱い説明書」的なものを
じぶんなりに少しずつ意識化しながら
生きてこざるをえなかったので
本書『博士が解いた人付き合いの「トリセツ」』は
深く頷けるところが多分にあった

そのなかから
基本的な視点が示唆されている「第１章」
「機械学習と意思決定／
箱形思考から抜け出して、型にはまらず考えるには」を
とりあげることにしたい

コンピューターの「機械学習」には
「教師あり学習」と「教師なし学習」があるという

「教師あり学習」は
「正しい答え」ありきの
「高速な仕分け・ラベル付けマシン」であるのに対し
「教師なし学習」は
「答えがどうあるべきかという
見解をもたない状態でスタート」し
「データに固有のパターンを
見つけ出すようプログラムされる」アルゴリズムである

それに対応する
わたしたち人間の思考方法が
それぞれ「箱思考」と「木思考」である



▪カミラ・パン（藤崎百合訳）
『博士が解いた人付き合いの「トリセツ」』
（文響社 2023/8）

「箱思考」は基本的に正誤の二択による判断で
選択肢が明確に提示されている場合にしか機能しない

世の中のほとんどの思考パターンはこの「箱思考」で
箱のなかで自足しているときは安心できるが
箱の外にでて「教師なし」で学習することはできない
つまり「箱の外」は存在しないことになる
一見「科学的」とか「エビデンスがある」とか言いながら
その実まったくそれは非科学的で
「箱内」のエビデンスにしか依ることはできない

それに対して「木思考」は
有機的に生長する木のように「たくさんの枝があって、
葉が房（クラスター）となって生い茂り、
そこにはあらゆる種類の複雑さが隠れている」
そのためときに制御不能となったり
「結論のない袋小路や、完全な迷宮」となったりもするが
それでもそれは
矛盾と予測不可能性とランダム性のもとにある
フラクタル性をもった
ほんらいの「科学」を可能にする生きた「思考」である

「箱思考」も「箱」の内で可能なときは必要なのだが
そこで「エラー」が起こってしまったとき
「木思考」がなければ現実という複雑さには
対応することができなくなる

著者にとって「科学」は
「この世界を見るためのレンズ」であり
「科学がなければ、
扉は私の前で閉ざされたままだっただろう」という

そして本書では第２章以降
「がん細胞」からチームワークを学び
体内のたんぱく質から
人間の関係性や相互作用についての新しい視点を学び
ゲーム理論で礼儀作法を学ぶなど
さまざまなテーマが展開されているように
興味深い「トリセツ」となっているのだが

現代においてはともすれば
「科学者」たちの多くが
政治や経済の力によるバイアスの前で
極めて非科学的にさえなってしまっているけれど

本書はほんらいの「科学」という「レンズ」を通し
人間理解のための新鮮な「トリセツ」として
「普通」とされている「常識」の「外」へと
わたしたちを導く貴重な視点を提供してくれる

▪カミラ・パン（藤崎百合訳)
『博士が解いた人付き合いの「トリセツ」』
（文響社 2023/8）

（「はじめに」より）

「地球での生活が始まってから５年目のこと、私は間違った場所に着陸したのではないかと思い始めていた。降りる惑星を間違えてしまったのに違いない。自分と同じ種と暮らしているのに、よそ者のような気分がしていた。言葉は理解できるのに伝わらない。仲間の人間たちと同じ外見をしているのに、本質的な特徴はまったく違う。」

「自分がこの惑星に放り込まれたのには、なにか理由があるに違いないとわかっていた。年月が経ち、自分の状態について認識が深まり、科学への関心も高まると、これこそが理由なのだと気がついた。これまでずっと必要としてきた取り扱い説明書を、自分が、書けばいいのだ。人間を理解できない私のような人たちに向けて、人間について説明する本を書こう。人間を理解していると思っている人たちが、違う物の見方をするのにも役立つに違いない。アウトサイダーのための人生の案内所。それが。この本だ。」

「私は自分のことを「普通」だと感じたことがないのだが、それは私が「普通」ではないからだ。私にはＡＳＤ（自閉症スペクトラム障害）、ＡＤＨＤ（注意欠如・多動性障害）、ＧＡＤ（全般性不安障害）がある。そんなふうに感じることがよくある。自閉症であるとは、コントローラーなしにコンピューターゲームをしたり、フライパンなどの調理器具なしで料理をしたり、音符なしに演奏するようなものだ。」

「このような生活はイライラすることが多い反面、完全に解き放たれてもいる。（･･･）ＡＳＤによって、私は人と違った視点で世界を見ることができる。それも、先入観なしに。また、ＧＡＤとＡＤＨＤによって、極度に集中しては飽きてを繰り返しながら情報を高速で処理できるようになり、自分が置かれた状況から生じうるありとあらゆる可能性を想像できるようになった。私のニューロダイバーシティは、人間であることの意味についてたくさんの疑問を生み出したが、それに答える力を与えてもくれたのだ。」

「科学は、この世界を見るためのレンズを私にくれた。この惑星「ヒューマン」での冒険中に遭遇した、ヒューマンたちの行動の最も謎めいた側面の多くを説明してくれるレンズだ。（･･･）効果的な連携のあり方について知りたければ、チーム育成のどんなプログラムよりも、がん細胞から多くを学ぶことができる。体内のたんぱく質は、人間の関係性や相互作用についての新しい視点を与えてくれる。もっと整理された方法で意思決定を行いたければ、機械学習が助けになる。熱力学は、私たちの暮らしに秩序を生み出すための努力について説明してくれるし、ゲーム理論は礼儀作法の迷路を抜けるための道しるべとなる。そして、進化論によって、人それぞれの意見がなぜこれほどまでにかけ離れたものになるのかがわかるのだ。科学的な原理を理解することで、私たちは、生きることをありのままで理解できるようになる。つまり、恐怖の源や、人間関係の基礎、記憶の働き、意見が食い違う原因、感情の不安定さ、自分が他者の助けを借りずにすむ範囲について、わかるようになるのだ。
　科学とは世界への扉を開く鍵である。科学がなければ、扉は私の前で閉ざされたままだっただろう。神経学的に多様であろうと定型であろうと、すべての人にとって、科学が教えてくれることは重要だと私は信じている。人をよりよく理解したいと思うのなら、人の仕組み、つまり人体や自然界の働きを実際に知らなくてはならない。」

「私は、人間を、そして人間の行動を、外国語として学ばなければならなかたｔ。その過程で、その言語を流暢に話せると主張する人たちにも、語彙や理解に欠けた部分があるのだとわかってきた。この本は、私が必要に迫られてつくった取り扱い説明書だけれど、すべての人にとって、自身の生活を決定づける人間関係や個人的なジレンマ、社会的状況をよりよく理解するための助けになると新じている。
　物心ついたときからずっと、私の人生はあるひとつの問いによって支配されてきた。それは、他者とつながるようにできていない人間が、どうすれば他者とつながれるのか、という問いだ。私は、愛や共感や信頼がどのような感覚なのかを、本能的には理解できない人間である。なのに、どうしても理解したいのだ。そこで私は、自分を材料にして生きた科学実験をすることにした。そうして、完全には人間になれなくとも、少なくともなんらかの機能を果たせて、自分が属する種の一員になれそうな、言葉を、行動を。考え方を。試し続けている。」

（「第１章　機械学習と意思決定／箱形思考から抜け出して、型にはまらず考えるには」より）

「人間の考え方は、コンピュータープログラムの動作の仕方と大差ない（･･･）。
　私たちは皆、スーパーコンピューターを頭に詰めて持ち歩いている。なのに、私たちは日常生活での決断でつまづくことがある。（･･･）「何を考えればいいかもわからなくて」「情報や選択肢がありすぎて決められないんだよね」などと言ったりする。
　脳という強力な機械を好きなように使えるというのに、これではあんまりだ。意思決定の方法を改善したいのならば、この専用器官をもっと有効活用しなければ。
　機械は人間の脳の代用品としては貧弱かもしれない。脳に具わっている創造性や適応能力、感情を理解する機能などはないのだから。しかし、思考と意思決定のより効果的な方法について、機械はたくさんのことを教えてくれる。機械学習の科学を学ぶことで、情報を処理するさまざまな方法を理解して、意思決定の手法を細かく調整できるようになる。」

「私たち人間に必要なのは、機械のように物事を明晰に見る力と。単純化も簡略化もできないような事柄をもっと複雑な方法で考えようとする積極的な姿勢である。」

※「そもそも機械学習とは？」より

「「機械学習」については、最近よく取り上げられるようになった。やはり４文字の「人工知能」（ＡＩ）との関連で聞いたことはあるかもしれない。次に迫る大きなＳＦ的悪夢のように言われることも多い。しかし、人類が知る強力なコンピューター、つまりあなたの頭のなかに納まっているものと比べれば、機械学習なんて大海の一滴といったところだ。意識的な思考、直感、想像力といった能力を備えている脳は、これまでにつくられたどんなコンピュータープログラムとも一線を画している。アルゴリズムは、膨大な量のデータを高速で処理することにかけれ、そしれ標的にするようプログラムされた傾向やパターンを識別する能力にかけて、とてつもなくパワフルだ。反面。その能力は悲しいほど限定的でもある。
（･･･）
　人間の脳からすれば取るに足りないけれど、こういった基本的なコンピューター・プログラムにも、私たちが脳というコンピューターをもっと有効に活用するためのヒントが隠れている。その方法を理解するために、機械学習で最も一般的な２つの方法、教師あり学習と、教師なし学習を見ていこう。」

「教師あり学習は、特定の答えが念頭にあって、それを達成するようなアルゴリズムをプログラムするときに使われる。（･･･）「教師あり」と呼ばれるのは、プログラマーであるあなたが、あるべき答えを知っているから。難しいには、いろいろな可能性をもつ多種多様な入力から、常に正しい答えに到達するようなアルゴリズムをいかにつくるかという部分だ。（･･･）
　この点を支えるのが、「分類」（classification）という、教師あり学習の主な利用法のひとつである。分類をさせるときには、基本的に、アルゴリズムに正しくレベル付けをすることを教え、実世界のありとあらゆる状況において正しくレベル付けできるという信頼性を（･･･）示すように努める。教師あり学習にとってつくられるアルゴリズムはとても効率的に機能し、あらゆる種類の応用例があり。しかし、本質的には、使えば遣うほど性能がよくなる、ものすごく高速な仕分け・ラベル付けマシンにすぎない。」

「これと対照的に、教師なし学習は、答えがどうあるべきかという見解をもたない状態でスタートする。アルゴリズムは、正しい答えを追求せよといった指示を受けない。その代わり、データにアプローチして、そのデータに固有のパターンを見つけ出すようプログラムされる。
（･･･）
　私の仕事は免疫系の細胞構造の研究だが、教師なし機械学習を使って、細胞集団におけるパターンを抽出している。なんらかのパターンを道蹴出したいが、どんなパターンでどこにあるのかがわかっていないので、教師なしの手法を使っているわけだ。
　これは「クラスタリング」（clustering）といって、共通する特徴やテーマに基づく、データのグループ分けである。（･･･）答えありきで結論を押しつけるのではなく、データそのものに答えを抽出させたい場合にも用いられる。」

※「箱を使った考え方と、木のような考え方」より

「私たち人間が決断を下す場合にも、先ほどの説明と同じような選択肢がある。ひとつは、可能性のある結論を好きなだけ想定しておいて、そのなかから選ぶ方法だ。問題へのアプローチはトップダウン型で、望ましい答えから出発する。つまり。教師ありアルゴリズムにかなり似ている。たとえば、企業が求職者を、一定の資格があるか、最底辺の経験があるかといった条件に基づいて判断するような形だ。一方で、下から順に証拠を集めながら上昇し、詳細を確認しながら、結論を有機的に浮かび上がらせる方法もある。こちらは教師なしのアプローチだ。（･･･）このボトムアップ型のアプローチは、自閉症スペクトラム障害をもつ人にとって、最初の関門となる。なぜなら私たちは、結論を出すために、詳細な情報を正確に分類することを生きがいにしているからだ。実際のところ、結論のようなものに近づく前に、ありとあらゆる情報と選択肢を確認しなければ気がすまない。
　これらのアプローチは、箱の組み立て（教師ありの意思決定）と、木を育てること（教師なしの意思決定）にたとえるとわかりやすいだろう。」

「箱というのは心強い選択肢だ。入手可能な証拠や代替案を囲ってきれいな形に整えるので、すべての側面を見ることができるし、選びやすくもなる。箱を組み立てて、積み上げて、その上に立ったりもできる。矛盾はなく、一貫性があり、論理的だ。これはきちんと整理された思考法で、どのような選択肢があるのかがわかるようになっている。
　それに対して、木は有機的に生長し、場合によっては制御不能となる。たくさんの枝があって、葉が房（クラスター）となって生い茂り、そこにはあらゆる種類の複雑さが隠れている。木は、私たちをありとあらゆる方向につれていってくれるのだが、結論のない袋小路や、完全な迷宮が待ち受けていることも多い。
　では、箱と木との、どちらがいいのだろうか？　本当のところは両方が必要なのだけれど、現実にはほとんどの人が箱のなかにはまり込み、決定木の最初枝にすら辿りつけない。
　以前の私は確実にそんなひとりで、根っからの「箱思考」タイプだった。」

「箱思考に従っていると、まるでハムスターとネズミを見わけるアルゴリズムのように、自分が行うあらゆる判断に対して、１００％正しいか間違っているかに分けたうえでラベル付けをするようになってしまう。その結果、ニュアンスや、どちらとも言えないグレーな領域、まだよく考えていないことや見つかっていないことの余地がなくなる。（･･･）
　箱思考はまた、根本的には非科学的である。結論が、手に入ったデータを指し示すのだから（本来はその逆であるべきなのに）。自分はエビデンスを検討するまでもなく人生のあらゆる問題の答えがわかると心底信じているのでない限り、箱思考によって、よい決定を下したための能力は制限される。選択肢が明確に提示されているのは気分がよいものだが。それはおそらく誤った安心感を得ているのだ。
　だからこそ、私たちは、意思決定をする際に普段浸かっている箱の外に出て考えて、教師なしアルゴリズムからいくつかのことを学ぶ必要がある（なんだったら子どもの頃に戻って木登りするおんもいいかもしれない）。」

※「エラーを受け入れよう」より

「意思決定にこのアプローチを採用して。木思考や教師なしアプローチによってカオスと複雑性を自分のメンタルモデルに組み込むことで、私たちは、手に入るエビデンスに基づいて事象を予測し意思決定を行うために、さらに現実的な手法の開発を始められる。」

「エラーに対して反射的に過剰反応するのは、箱思考の主な欠点のひとつだ。教師ありアルゴリズムと同じように行動すると、私たちは、すべてのデータポイントや状況に対して、二択の答えを用意してそのどちらかを押しつけることになる。」

「現実は二択などではなくもっと微妙なので、問題を考えて判断を下すための技術もまた、もっと微妙でなくてはならない。箱を使うと、何か問題が起きたときにどこにも行き場がなくなる。唯一できるのはその箱に「失敗」というラベルを付けることだけで、最初からやり直しだ。木を使う場合は、あなたは代替の枝で囲まれている。つまり、あなたが頭のなかで思い描いていた、先へと進むルートがいくつもある。
（･･･（
　木のような思考が重要なのは。私たちを取り巻く複雑さを反映しているからだが、同時に立ち直る力を与えてくれるからでもある。何百年も前から生えている樫の木の大木のように、決定木はどんな天候にも耐えて立ち続ける。箱が踏まれて壊れて打ち捨てられた、そのずっと後までも、」

（「訳者あとがき」より）

「カミラ・パンは８歳でＡＳＤ、26歳でＡＤＨＤと診断された。幼い頃から自分は間違った惑星に降りたよそ者だと感じ、「人間の取り扱い説明書」があればと願った。強い疎外感を抱えて成長したが、やがて科学に慰めと情熱を見いだす。科学のレンズを（それも広範な分野のたくさんのレンズを）とおして見ることで、外の視点から、人間の社会的慣習を、そして人間の本質を探究するようになった。その試みをまとめた本書は、自分のための「人間の取り扱い説明書」であるだけでなく、家族のための本であり、科学へのラブレターでもあるという。」

「本書を支えるのは、世界をパターンで理解するという著者の能力だ。その文章は、パターンやアナロジー、複数の意味をもつ言葉などが重層的につながり、共鳴しているかのようだ。
（･･･）
　愛や共感が本能的には理解できないという著者の文章に通底するのは、この世界に生まれた孤独と疎外感だけでなく、少しでも人の役に立ちたい、人の気持ちを明るくしたい、人とつながりたいという思いである。」

◎カミラ・パン
カミラ・パンは、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで生化学の博士号を取得した、トランスレーショナル・バイオインフォマティクスを専門とする博士研究員。8歳のときに自閉症スペクトラム障害（ASD）、26歳で注意欠如・多動性障害（ADHD）と診断された。キャリアと学問はその診断に大きな影響を受けており、人間とその行動、人間がどう機能しているかを理解したいという情熱に博士は突き動かされている。

◎藤崎百合
高知県生まれ。名古屋大学の理学系研究科にて博士課程単位取得退学。訳書に『ウイルスVSヒト』（文響社、共訳）、『川と人類の文明史』『砂と人類』（草思社）、『ディープラーニング革命』（ニュートンプレス）、『生体分子の統計力学入門』（共立出版、共訳）などがある。

☆mediopos-3189　2023.8.11

死刑執行という職業がある
日本には死刑がまだ存在しているので
たしかにその職業は存在しているはずだ
そしておそらくその執行人は匿名である

「穢れ」とみなされている職業は
現代でもおそらく存在しているが
その筆頭にあるのは
死刑執行ではないかと思われる
そしてそれを匿名としないわけにはいかない

彼らは決して加害者ではない
役割を引き受けざるをえない
犠牲者であるともいえる

かつてフランス革命期に
ムッシュー・ド・パリと呼ばれた
サンソン家の当主達がいた
彼らは「死刑執行人として恐れられ、
穢れた存在として差別された」

彼ら当主は手記を残しており
３代目サンソンは息子に
「腕は、頭がすることに干渉してはならない」
と教えたという

人を傷つけたり殺したりする際の
軍人や政治家のそうした「心得」は
たとえそれが「加害」につながるときでさえ
「役割」としてなされるためのものだ

しかし軍人や政治家は匿名ではないが
死刑執行人のようなひとは
その「穢れ」のために匿名を余儀なくされる
しかもその執行が
みずからの意志でなされるのではない

そうした「穢れ」を担う存在もまた
ある種の「犠牲者」であるともいえるのだ

㊷腕を持つ頭　石井ゆかり

星占い的思考

"ですが、もし、ある人間があまりにも感受性がありすぎて、社会の外科医に課された義務に耐えられないとしたら？……　刑罰は犯罪人で針わりますが、車裂きの刑、絞首刑、断首刑を執行する善行の人もまた犠牲者なのだということ、人々が考えてくれたことがあったでしょうか？　この犠牲者には、自分が与える死のすべての結果が降りかかるのです"

（オノレ・ド・バルザック著　宮澤正信訳『サンソン回想録』日東書院刊）

フランス革命期、ギロチンはルイ16世やマリー・アントワネット、ロベスピエールなどの著名人を葬送に、数千人の血を吸った。無論これは比喩的な表現で、ギロチンは単なる道具でしかなく、そこには遥昇全動かした人間がいる。現代の日本でも死刑はあるが、死刑を執行する人々のことを、多くの日本人は匿名的な役割としてイメージしている。しかしもし彼らが名前や顔、住所を公表し、「著名人」であったら、どうだろう。「一般の人たち」は、彼らをどのように扱うだろうか。

ムッシュー・ド・パリと呼ばれたサンソン家の当主達

2023.9　群像　624

▪石井ゆかり「星占い的思考㊷腕を持つ頭」
（『群像』2023年9月号）

「穢れ」を担うことも
「匿名」であることも必要なく
軍人や政治家のような存在でもなく
「役割」を引き受ける存在はどうだろう

とくに昨今のワクチン薬害を巡る問題で
結果的に甚大な加害を加えることになった
主要な推進者はいうまでもないが
多かれ少なかれ「役割」を担った人たちには
はたして「犠牲者」たる資格はあるだろうか

さらに「役割」を与えられていないにもかかわらず
積極的にそれを推進した人たちはどうだろう

まだ戦争は続いている
「戦後」がどうなるか
目をしっかりと見ひらいておかなければならない

▪石井ゆかり「星占い的思考㊷腕を持つ頭」
（『群像』2023年9月号）

〝「ですが、もし、ある人間があまりにも感受性がありすぎて、社会の外科医に課された激務に耐えられないとしたら？・・・・・　刑罰は犯罪人で終わりますが、車折の刑、絞首刑、断首刑を執行する善行の人もまた犠牲者なのだということを、人々が考えてくれたことがあったでしょうか？　この犠牲者には、自分が与える死のすべての結果が降りかかるのです」〟
（オノレ・ド・バルザック著　安達正勝訳　『サンソン回想録』国書刊行会）

フランス革命期、ギロチンはルイ16世やマリー・アントワネット、ロベスピエールなどの著名人を筆頭に、数千人の血を吸った。無論これは比喩的な表現で、ギロチンは単なる道具でしかなく、そこには道具を動かした人間がいる。現代の日本でも死刑はあるが、死刑を執行する人々のことを、多くの日本人は匿名的な役割としてイメージしている。しかしもし彼らが名前や顔、住所を公開し、「著名人」であったら、どうだろう。「一般の人たち」は、彼らをどのように扱うだろうか。

ムッシュー・ド・パリと呼ばれたサンソン家の当主達は、そのような存在だった。彼らは死刑執行人として恐れられ、穢れた存在として差別された。しかし一方で徳を尊び、貧しい者を助け、宗教的な罪を犯し続けることの葛藤を生きた。サンソン家４台目の当主シャルルーーアンリ・サンソンは、自身の経験や思索を綴った手記を残した。他の当主達も手紙や日記などの資料を多く残しており、５代目サンソンはそれらを作家バルザックに託した。

誰が加害者で誰が犠牲者なのか。複雑に入り組んだ人間社会では、それが判然としない。一人一人のほとんど無意識による小さな力が、大きくまとまって支配的な力を生み出し、それを背景に決定的に大きなことが行われる。その典型が、死刑執行である。「刑を執行する善行の人」を犠牲者としているのは、現代では一般市民である。だが、それを日常的に自覚している人々は今なお、わずかでしかない。学校や職場で起こるいじめやハラスメントは、多くの傍観者に支えられていると聞く。傍観者のうち数人が異論を唱えるだけでも、いじめはかなりの割合で阻止されるという。世の理不尽や残虐、残酷を遠くから傍観し、無言の内に目を伏せて受容する人々いんは、一切の悪意はない。でも、そうした悪意なき傍観と容認の小さな流れが集まってやがて大河になった先で、執行する犠牲者と、執行を受ける犠牲者とが生まれる。その大きすぎる結果を見てショックを受ける人々もまた、罪を押しつけられた犠牲者と言えそうだ。世の中は犠牲者であふれている。（・・・）確かに広場や川原に人を集めて打ち首や縛り首を見世物にすることはなくなった。しかし、丁寧に隠されてはいても、日本では絞首刑が行われている。「斬首刑を執行する善行の人もまた犠牲者なのだということを、人々が考えてくれたことがあったでしょうか？」この問いは、現代社会においても死んではいない。そして死刑執行に限らず、社会の犠牲者としての仕事人、執行者は、無数に存在するのだ。」

「3代目サンソンは息子に、「腕は、頭がすることに干渉してはならない」と教えた。文民統制、軍人の心得である。しかし「市民」はどうだろう。もとい「市民」という表現は日本ではあまり一般的ではない。ふつうのひとびと、市井の人々、大衆、民間人、生活者等々、様座名言い方があるが、犠牲者であり加害者であり続ける無数の人間としてのアイデンティティを、どのように持つことができるのだろう。私たちは腕あるあると同時に、頭でもありうるはずなのだ。」

☆mediopos-3190　2023.8.12

「無意識のバイアスを克服する」ことは
「個人・組織・社会を変えるアプローチ」として
重要なことだ
（本書のタイトルにまさにそう表現されている）

著者はこの問題に10年にわたり取り組み
だれもが大切にされる社会をつくるために
無意識的に偏見によってなされる行動を
わたしたち個人の心と行動のレベルから
変えていくためになにが必要なのかを探っていく

そうした取り組みを
認知科学や社会心理学などの科学的研究や
職場や医療現場・教育の場・警察など
さまざまな現場でのインタビュー等を行いながら
「無意識のバイアス」を変化させるための方法を試みる

著者は「自分でも意図しない無意識のバイアスは、克服できる」
とし本書はそのための「最初の一歩だ」としているが

意識的なバイアスもふくめ
バイアスを克服することは
それぞれの現場における課題を克服する
という意味ではある程度可能な側面があるが
「バイアス」そのものを克服するのは困難かもしれない

というのも
世界という現象は
「差異化」によって生成・展開していくからだ
それぞれの「差異」にはさまざまな様相があり
必ずしも正しいか否かを明確に分けることはできない

それは時代や地域の文化や思想などによって
さまざまな価値づけがなされている

そうした「バイアス」は
それぞれの世界観や倫理観を形成するものでもあるから
それそのものを変えることそのもをも問わざるをえない

しかもバイアスは無意識だけではなく
意図的なバイアスもあり
その意図的なバイアスゆえに生きている存在にとって
それを変えることは極めて根源的なことと関わってくる

本書を読みながら繰り返し思いだしていたのは
夏目漱石の『草枕』冒頭である

▪ジェシカ・ノーデル（高橋璃子訳）
『無意識のバイアスを克服する／個人・組織・社会を変えるアプローチ』
（河出書房新社 2023/5）

「智に働けば角が立つ。情に棹さおさせば流される。
意地を通とおせば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」

「どこへ越しても住みにくいと悟さとった時、
詩が生れて、画えが出来る。」

「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。
やはり向う三軒両隣にちらちらするただの人である。
ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、
越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。
人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。」

人は論理や思想といった智だけでも
人情といった情だけでも
意気地といった意志だけでも「住みにくい」

けれど「「人の世を作ったものは」
「向う三軒両隣にちらちらするただの人」である
そこから完全に逃げるわけにもいかない

「バイアス」に
智だけ情だけ意志だけの物差しを当てても
ただ住みにくくなるだけだ

それでそうしたベタな生からの解放のために
芸術といった営為も生まれてくる

私たち一人ひとりのバイアスへの気づきから
個人・組織・社会を変えようとする
本書の試みは切実なまでに重要で現実的なものだが
バイアスかバイアスでないかを
判断する視点には特に意識的である必要がある

地域的文化的背景や宗教的歴史的背景
時代や思想によってつくられる世界観
政治的経済的な要請から
とりわけ科学的と称される組織的な方向づけにより
自明とされる意図的なバイアスも強く存在し
それらの根強さと変化のもとで
バイアスとされるものも様相を変えていくことが
意識される必要がある

ともあれまずもって大切なのは
「ヒコクミン」を公然とつくりだすような
「人でなしの国」に住まなくてもすむように
そうなる原因である「バイアス」から
少しでも自由であることだろう

▪ジェシカ・ノーデル（高橋璃子訳)
『無意識のバイアスを克服する／個人・組織・社会を変えるアプローチ』
（河出書房新社 2023/5）

（「はじめに」より）

「他人のバイアスを突きつけられるのはつらい。そして自分自身のバイアスに気づかされるのもまた、心がかき乱される体験だ。本書を書く過程で、私自身の誤った思い込みや不適切な反応が徐々に視界に入ってきた。まるで見えないインクで書かれた文字が炙り出されるようだった。
　はじめはそれを認めたくなかった。自分の書いた記事にパターナリズムな想定があると指摘さてると、そんなはずがないと否定した。怒りを感じ、自分を正当化しようとした。「そもそもあのインタビューが拒否されたから、推測するしかなかっただけだ」。否認、怒り、交渉ーーーーそれは悲哀の過程として知られるものにそっくりだった。私は何を哀しんでいるのだろう。罪のない自分を喪失したことだろうか。エリザベス・キューブラー＝ロスが悲哀の5段階のモデルを最初に提示したときに意図されていたのは、誰かの死を受容する過程ではなく、患者が自分の病を受け入れる過程だった。社会の病理にどっぷりと浸かっていた私は、その病とようやく対峙することになったのだ。作家クローディア・ランキンが言うように、自分のたちの持つイメージが過去の誤った考えに毒されている事実を頭では理解できても、心で受け入れるのは難しい。本書に取り掛かる前の私は、理解はしていても腹落ちしていなかったのだと思う。
　この数年のあいだに、私のなかの感情は怒りから好奇心へ、好奇心から謙虚さへ、そして切実な希望へと変化した。バイアスは変えられる、という事実を目の辺りにしてきたからだ。
　本書には、他者への誤った接し方を変えた人たちや、より公正であるためにやり方を変えた組織が出てくる。バイアス行動がどの程度減ったかを示すデータもある。私自身も、いったん立ち止まって自分の言動に気づき、それを光にかざすことができるようになった。またバイアスについて深く知った人たちが、バイアスをなくすための運動に駆り立てられる様子も見てきた。ベン・パレスは2017年に亡くなるまで、科学界のバイアスと闘いつづけた。科学者の評価や助成金における差別を減らすように国立衛生研究所（ＮＩＨ）やハワード・ヒューズ医療研究所に働きかけ、研究環境と科学の健全な進歩のために力を尽くした。
　生態学に、境界（エッジ）という概念がある。異なる生態系が接する場所のことだ。海と陸が接する塩性湿地や、峡谷を流れる川の河岸地帯。そこは豊かで繁殖に適した場所だ。境界は魚の産卵地となり、渡り鳥の中継地となる。そして人と人が出会う場所にも、一首の境界が生まれる。境界はバイアスが発現する場所であり、危害の可能性に満ちている。しかし同時に、そこはバイアスを阻止できる場所でもある。それまでの思い込みとは異なる見方、行動、関わり方が可能になる場所だ。ふつふつと湧き立つ領域で、何か新しいものが育まれる。洞察、敬意、あまりにも長く顧みられずにいた人間相互の関わり合い。
　リスクは大きい。強い反撥もあるだろう。でも問題は解決可能だ。できることはいくらでもある。
　本書はそのための最初の一歩だ。」

（「第10章　社会の傷を修復する」より）

「個人の考えや気持ちや習慣を変化させるのは、バイアスを変えていくためのひとつの方法だ。もうひとつの道は、すでに見たように、プロセスや構造、組織の文化を変えていくことにある。この両者はもちろん、密接に絡みあっている。人が集まってプロセスや構造や企業文化を作り、そうして作られた文化が今度は人の考えや行動を方向づけていく。
　ただし私たちが影響を受けるのは、所属する組織や集団の文化ではではない。もっと広い文脈で、私たちが日々生きている環境も、人の考えや行動に大きな影響を与えている。」

（「おわりに」より）

「自分でも意図しない無意識のバイアスは、克服できるのだろうか？
　このプロジェクトに取り組もうと思ったのは、答えが知りたかったからだった。
　今ならこう言える。答えは、イエスだ。」

「考え方を変えるのは、けっして楽な道のりではない。どんなに善意に満ちた人でも、つまずきながら進むことになる。それはまた、万能薬でもない。個人のバイアスを減らしたところで、社会の不平等や格差がなくなるわけではないからだ。昔から続く排除、不平等なチャンス、搾取的な経済政策、社会の不当なシステムは、腐敗した基礎の上に立っている。長い歴史を持つ社会の不公正を解消するためには、警察や刑務所の制度改革から経済の立て直しまで、大がかりな構造的変化が必要になるだろう。
　それでも、人が本心から変わることができたなら、それはけっして小さな変化ではない。法律や制度は、人の意識や感情から出てきたものだ。人が制度を作り、人がそれを実行し、人がそれに従う。システムを解体したとしても人の考えは残り、そこから次の制度が作られる。内面の変化をともなわない政治的・社会的なアクションは、そもそもの過ちを生みだした抑圧的で階層的な思考をふたたびなぞるだけに終わるかもしれない。それを避けるためには、自分の心にひそむ有害な思考の癖を解きほぐし、新たな目で相手と自分を見つめると同寺院、人の変容を支えられる文化を作っていく必要があうｒ。そうやって地道に基礎を固めれば、より大規模で根本的な修復が可能になるはずだ。」

「私たちはおたがいのなかに、おたがいを通じて存在している。私たちの人間性は、他者に人間性を認めるとき初めて可能になるのだ。この真実を通して見たとき、バイアスを終わらせることは単にビジネスの問題ではなくなる。それは文化の問題であり、正義の問題である。私たちは他者のために、そして自分のために、バイアスを終わらせるのだ、
　幻想や否認を手放したとき、私たちはどうなるのだろう？
　私たちは人間になるだろう。信頼できる人になるだろう。
　そして私たちはみんな、自由になるだろう。」

【目次】
はじめに
PART I　バイアスを理解する
第１章　バイアスの追跡者
第２章　脳は違いをどう見るか
第３章　微小なバイアスの重大な帰結
PART II　思考を書き換える
第４章　習慣を断ち切る
第５章　生死を分ける瞬間
第６章　ロス市警のジグソーパズル
PART III　新たな場所にとどまる
第７章　不完全な人間のためのデザイン
第８章　多様性の存在証明
第９章　インクルーシブな環境をつくる
第10章　社会の傷を修復する
おわりに
訳者あとがき

◎ジェシカ・ノーデル　Jessica Nordell
サイエンスライター、科学・文化ジャーナリスト。バイアスと差別の問題に長年取り組み、ニューヨーク・タイムズ、アトランティック、ニュー・リパブリックほか多数の有名メディアに記事を寄稿。初の著書である本書で、王立協会科学図書賞をはじめ数々の賞にノミネートされた。 本書は世界経済フォーラムで年間ベストブックに挙げられるなど注目を集め、スタートアップ企業から大学や医療機関まで様々な組織でバイアスの問題を解決するために活用されている。ハーバード大学卒業、ウィスコンシン大学マディソン校修士課程修了。ミネソタ在住。

◎高橋璃子　Rico Takahashi
翻訳家。京都大学卒業、ラインワール応用科学大学修士課程修了。カトリーン・マルサル『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？』、クリステン・R・ゴドシー『あなたのセックスが楽しくないのは資本主義のせいかもしれない』（共に河出書房新社）、オリバー・バークマン『限りある時間の使い方』、グレッグ・マキューン『エッセンシャル思考』（共にかんき出版）など訳書多数。

☆mediopos-3191　2023.8.13

山本圭による「誇示」についての論考である
その論考を読みながら（引用を参照）
なぜ人は「誇示」するのかについて考えてみたい

「誇示」は
「私」を相手よりも上に置くべく
「承認」や「評価」を求めるもので
「自我」のある種の悲しい性のひとつでもある

そこにはいうまでもなく「相手」がいる
「自我はひとりではいられない」
あるいは「自我は自足しない」のである

「天上天下唯我独尊」の釈迦にも
それが本人の意図であるか否かは別として
そこには説法の「相手」がいたが
その場合の「自我」は
「誇示」する「自我」とは異なっている
ある意味究極のパレーシアである

しかし釈迦やその言葉の権威を使い
「承認」や「評価」を求めるとき
それは「誇示」する「自我」となってしまう

あえて「誇示」とまでいかず
ただ「私を見て」とばかりに
じぶんに注目させようとするのも
自足しない自我の承認欲求からのものだろう

「他人の自慢話」は「不愉快」だが
自慢する本人は多くの場合
相手の「不愉快さ」などおかまいなしだ

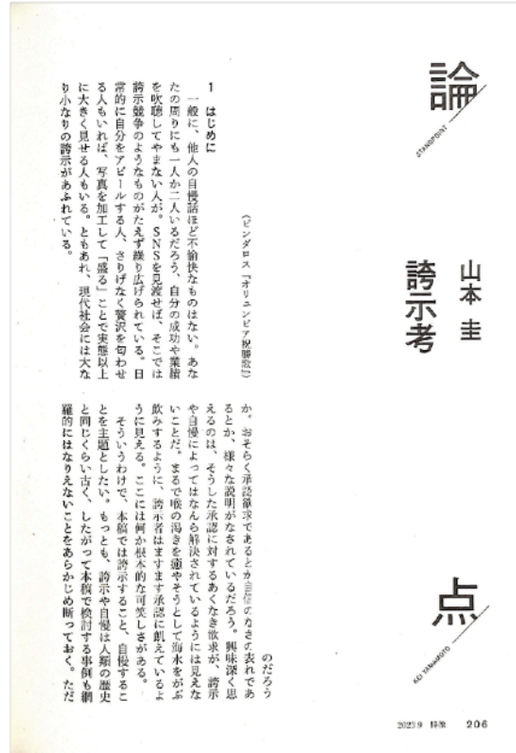
とくに相手よりじぶんが上の立場にあるか
あるいはそう思い込んでいるとき
「誇示」することで
じぶんの「自我」の欲望をみたすか
あるいはそれによる相手の行動を求める
そして相手はその「自慢話」を拒めない
（ある意味「仕方ない」と諦めている）

もっとも「誇示」といっても
それが「共感」に裏付けられているとき
自我は一方通行ではなく
同じ場を持ち得るため
否定的なものとなるとはかぎらない

社会階層などが比較的固定している場合
「誇示」が許される状況は多く存在したが
現代のとくにＳＮＳなどのように
「誇示」が「民主化」されるようになったとき
さまざまなかたちの「承認欲求」が
「自我」をあられもない悲しい姿として
顕在化させるようになる

おそらくそうした「誇示」する「自我」は
そうした「民主化」された場に
みずからを映しながら
ますます「自我」を暴走させるか
（ときには疲弊し空虚ともなり）
同様な波長をもつ「自我」とつながりながら
漂流していくばかりだろう

とはいえ「誇示」も
それが「自己意識」を伴うものであり
じぶんを笑い笑わせる道化的な手法としてならば
むしろ共感や理解を得るものともなり得るだろう



論点

STANDPOINT

山本 圭

誇示考

1　はじめに

一般に、他人の自慢話ほど不愉快なものはない。あなたの周りにも一人か二人いるだろう、自分の成功や業績を吹聴してやまない人が。SNSを見渡せば、そこでは誇示競争のようなものがたえず繰り広げられている。日常的に自分をアピールする人、さりげなく贅沢を匂わせる人もいれば、写真を加工して「盛る」ことで実態以上に大きく見せる人もいる。ともあれ、現代社会には大なり小なりの誇示があふれている。

（ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』）

のだろうか。おそらく承認欲求であるとか自信のなさが表れであるとか、様々な説明がなされているだろう。興味深く思えるのは、そうした承認に対するあくなき欲求が、誇示や自慢によってはなんら解決されているようには見えないことだ。まるで喉の渇きを癒やそうとして海水をがぶ飲みするように、誇示者はますます承認に飢えているように見える。ここには何か根本的な可笑しさがある。

そういうわけで、本稿では誇示すること、自慢することを主題としたい。もっとも、誇示や自慢は人類の歴史と同じくらい古く、したがって本稿で検討する事例も網羅的にはなりえないことをあらかじめ断っておく。ただ

2023 9 特集　206

■山本圭「誇示考」
（『群像』2023年9月号）

▪山本圭「誇示考」
（『群像』2023年9月号）

（「1　はじめに」より）

「一般に、他人の自慢話ほど不愉快なものはない。あなたの周りにも一人か二人はいるだろう、自分の成功や業績を吹聴してやまない人が。ＳＮＳを見渡せば、そこでは誇示競争のようなものがたえず繰り広げられている。日常的に自分をアピールする人、さりげなく贅沢を匂わせる人もいれば、写真を加工して「盛る」ことで実態以上に大きく見せる人もいる。ともあれ、現代社会には大なり小なりの誇示があふれている。

　そもそも、人はどうして何かを誇示したがるのだろうか。おそらく承認欲求であるとか自身のなさの表れであるとか、様々な説明がなされているだろう。興味深く思えるのは、そうした承認に対するあくなき欲求が、誇示や自慢によってなんら解決されているようには見えないことだ。まるで喉の渇きを癒やそうとして海水をがぶ飲みするように、誇示者はますます承認欲求に飢えているように見える。ここには何か根本的な可笑しさがある。」

「ある時期まで、不特定者にむけた誇示は特権的な人々のものであり、そのかぎりで誇示の仕方にも一定の作法や節度があった。しかし、誇示が万人に開かれるろき、そのあり方にも大きな変化が訪れる。誇示があちこちに蔓延っているとき、いわば「誇示の民主化」ともいうべき状況において、それがもっとも弱々しく映るのはなぜであるか。本稿は誇示というごくごく身近な現象を手がかりに、現代という時代を探る一箇の承認論である。」

（「2　なぜ自慢話は不愉快なのか」より）

「そもそも、どうして他人の自慢話は不愉快なのか。プルタルコスの「妬まれずに自分をほめることについて」という論考を見よう。それによると、第一に、自分で自分を褒めることは恥知らずなことであり、たとえ他人に褒められたとしても恥じらうべきである。さらに、称賛とは他人から受け取るべきもので、それを自分で自分に与えることは正しくない。自画自賛は良識に反するのであり、だからこそ私たちはそれをとても苦痛に感じるわけだ。

　そればかりではない。さらに不快に思われるのは、自慢話がともに称賛するよう私たちに強いるからでもある。

（･･･）

　だが、相手を不快にしない自慢というのもある、状況次第では誇示もやむを得ないことがあるのだ。たとえば中傷や告発に対して弁明をするときや「不運に見舞われている」とき、あるいは「不正なめにあった政治家」などがその例として挙げられるが、いずれも虚栄心からではなく、不利な立場を強いられたときの弁明のための誇示であれば、聴衆に不快感を抱かせることはあまりない。」

（「3　度量の広さ」より）

「時宜を得ない誇示はみっともない。ただし、それが立場に相応しく節度を保ったものであればそのかぎりではない。（･･･）
　そのほか、他人への分け前をともなう誇示も人々に受け入れられやすい。」

（「4　奢侈について」より）

「奢侈や贅沢もまた、他人にみせびらかすことと切り離せない。」

「贅沢を徹底的に敵視したのは、いうまでもなくキリスト教であった、贅沢とは「悪魔の誘惑」にほかならず、重大な罪であると考えられ、またときに肉欲や物質的な所有の欲望であるとされた。」

「奢侈や贅沢が新しい表象を獲得したのは18世紀のことである。この時期、イギリスやフランスにおいて贅沢の是非をめぐる、いわゆる奢侈論争が起きている。（･･･）

　私たちの関心からとりわけ重要なのは、やはりオランダ出身のバーナード・マンデヴィルである。マンデヴィルは道徳家のシャフツベリーを批判しつつ奢侈擁護論を展開し、奢侈論争の中心的人物になった。この論争において贅沢はもっぱら経済的、道徳的観点から評価されていたが、マンデヴィルが母国オランダの経済的成功から（ヴェブレンより２００年ほど先に）「誇示的消費」（あるいは「顕示的消費」）という考え方に到達していたことは注目に値する。」

「ヴェブレンによれば、私有財産制において蓄財の目的は身体的な欲求を満たすためというよりも、自分と同じ階級に属する人々をだしぬき、世間の評判を保つためのものであった。つまり、蓄財の主たる動機となるのは比較と差別化にほかならない。」

（「5　誇示の民主化と誇示者の孤独」より）

「19世紀後半から20世紀にかけて、中産階級や労働者階級の購買力も高まり、彼らもまた贅沢品を消費することができるようになった。それにともない、誇示も有閑階級に特有のものではなくなっていく。つまり消費社会のもとで、誰もが多かれ少なかれ誇示する資格を得るようになり、いわば「誇示の民主化」とも言うべき現象が起こるのだ。」

「現代社会もまた、概ねこうした大衆化の延長上にある。ただしいうまでもなく、誇示の主要な舞台はインターネットに移っている。とりわけＳＮＳの爆発的な普及誇示をめぐる風景を大きく一変させている。」

「以前であれば。私たちのアイデンティティは社会階層に大きく規定されており、あえて問われることはなかった。しかし平等な尊厳の時代には、承認は自明のものではなくなり、自分の独自性がいっそう深刻な問題となるというわけだ。こうした状況の変化が「承認をめぐる政治」の背景となっている。」

「同じことが現代の誇示の氾濫についても言えるだろう。誇示者もまた、人々が等しく誇示するなかで、他人とは異なる真正さや独自性を求めてもがいている。しかし問題は、その欲望には決して新の満足が訪れないことである。「誇示の民主化」は万人が多かれ少なかれ誇示的に振る舞うことを可能にしたが、まさにそのことによって誇示そのものの条件が壊れてしまった。自慢が称賛や嫉妬を必要とするとすれば、誇示の民主化のもとでその効用は著しく下がるだろう。まるで漂流する宇宙船から独りむなしくシグナルを送り続けるように、いまや時宜をまるで得ない、宛先不明の誇示だけが繰り返されてる。これがわれらの誇示者の成れの果てなのである。」

（「6　おわりに」より）

「誇示や自慢はみっともないものだ。だからこそ、歴史上の事例が示すように、誇示には様々な作法が付き物であった。しかし現代では、そうしたなにやら深遠な技法はすっかり顧みられなくなっている。」

「誇示が問題になるのは、それが資本主義の論理と強い親和性を持っているからである。奢侈から資本主義の発展を説いたヴェルナー・ゾンバルトを持ち出すまでもなく、誇示が絶え間ない差異化のゲームであるかぎり、その欲望をかりそめにも満たしてくれるのは資本主義をおいておほかにない。そして資本のほうも間違いなく人々の誇示する欲望を利用している。したがって現代左派のコンセンサスになっているポスト資本主義の展望は、いずれ何らかの仕方で誇示者とその欲望を相手取ることになるように思う。

　こうした誇示のゲームを抜け出す方途があるだろうか。もしかするとそれは、「ぼくはチビでデブだけと、それが自慢なんだ」（くまのプーさん）といった、常識を顛覆する「誇示のパレーシア」のようなものではないだろうか。他人との比較の彼方で、自らの特異性をありのままに肯定する、そうした純粋な誇示だけが資本の押し付けるゲームから束の間の離脱を可能にしてくれるかもしれないーーーーたとえそれもまた新しい差別化の論理に巻き取られてしまうにしても。」

☆mediopos-3192　2023.8.14

東南アジアの狩猟採集民（森の民）を研究している
人類学者・奥野克巳と
言語学者・伊藤雄馬による対談と
対談をふまえたそれぞれの「論考」に興味は尽きない

これまでにもこのmediopos では
それぞれの著書についてとりあげてきたが
この対談と論考ではそれらがふまえられながら
ある意味で矛盾によって矛盾を超えていく
そんな道筋に光を当てているように感じられた

基本的な矛盾のひとつは
「パースペクティヴィズム」である

それは「他者の観点（パースペクティヴ）に立って、
自分たちが見ている世界とは違う観点から
世界を捉えること」
つまりは
「見る人が違えば、世界も異なる」という立場のことである

パースペクティヴィズムを厳密に適用させると
「相手の立場にはなれない」
「客観的事実にはたどり着けない」ことになる

伊藤雄馬によれば
そこで否応なく起こる「混乱」は
「おそらく自己が一つに限られる、という考えから来ている」
そしてそれを乗り越えるためには
「複数の自己の存在を認めること」が
「手立て」となるのではないかという

そしてその端緒として
少なくとも自分のなかにある
「科学者の自己」と「芸術家の自己」
という二つの自己を区別する必要があると

その両者のとらえている「世界」は矛盾しているが
「どちらか」だけというのではなく
「この二つの自己は相補的で、
同時に働く時、身体が現れる」

「世界と一体となった芸術家の自己を、
科学者の自己が捉える瞬間、
身体は新しい輪郭を持って生成される」というのだ

もうひとつの矛盾は「have」と「have not」である

私たちの生きている社会では
「have」つまり「所有」が基本であり
それが「至上の価値」とされているところがあるが
プナンでは個人所有が否定され
所有しないということが基本となっている

そのプナンでは
無所有を軸として二つのモードがあり
ビッグマン（共同体のリーダー）は
「何かを誰かにもらったら、
積極的な形で別の誰かに渡すことを率先してやる」
しかしその反対の極には
生きていくために
「せびりまくる人、ねだりまくる人」がいる

ある意味で私たちの社会とまったく逆で
私たちの社会では権力をもったリーダー的な人物は
飽くことなく所有に所有を重ね
生きていくために働く人たちから搾取を続ける･･･

しかしここからが興味深い論点となる

伊藤雄馬によれば
こうした矛盾を現象させている二元性は
「そこの中だけで考えると煮詰まる。
だから三点目を見つけて、三角形をつくる」

その三点目とは
「have と have not、そしてそれらを成立させている
太陽からの視座のような点」であり

「いろいろな三角形を見出すために
物事には二元性があるのかな」というのである

▪奥野克巳・伊藤雄馬
『人類学者と言語学者が森に入って考えたこと』
（教育評論社 2023/8）

この視点は非常に重要だろう

「複数の矛盾した自己」にも
「それらを成立させている太陽からの視座のような点」
を見つけて三角形を見いだすこと

二元性の矛盾のなか
片方の極にシフトするのでも
両極を揺れ動き迷い続けるのでもなく
それらをともに支えている視点を見つけること

ある意味ではそうした視点を見いだすためにこそ
二元性は出来しているのだともいえる
「わたし」と「あなた」という
それぞれの「パースペクティヴ」も同様に

それは仏教における「中論」とも
通底しているところがあるようにも思われるが
それが論理の世界においてではなく
文化人類学者や言語学者によって
具体的な視座として示唆されていることは
私たちが日々生きていることと深くつながるだけに
とても興味深い対談・論考となっている

■奥野克巳・伊藤雄馬
『人類学者と言語学者が森に入って考えたこと』
（教育評論社 2023/8）

（奥野克巳「他者のパースペクティヴから世界を見る」より）

「他者の観点（パースペクティヴ）に立って、自分たちが見ている世界とは違う観点から世界を捉えることを「パースペクティヴィズム」と呼ぶ。パースペクティヴィズムには、明確に切り分けられないのだけれども、「宇宙論的」なものと「実用的」なものがある。」

「パースペクティヴィズムが現代人類学のテーマとなったのは、エドゥアルト。ヴィヴェイロス・デ・カストロがアメリカ大陸先住民の「宇宙論的」パースペクティヴィズムを取り上げてからのことである（ヴィヴェイロス・デ・カストロ２０１６）。ヴィヴェイロス・デ・カストロによれば、動物や精霊は自らを人間とみている一方で、われわれ人間のことを非人間的な存在とみている。それらは、自分たちの家や村にいる時には、自らを人間の姿をしていると、アメリカ大陸先住民は把握しているのだという。現代人類学で扱われるのは、こうした「非人間に対する人間による」パースペクティヴィズムである。」

「コーンは、同じくアマゾニアに住むルナのパースペクティヴィズムを取り上げている。コーンにとれば、ルナのパースペクティヴィズムは、「生き延びていくという難問への応答」（コーン２０１６：１７０）である。ルナのパースペクティヴィズムは捕食すること、捕食される（捕食されない）ことに「実用的」に関わっている。その意味で、コーンのパースペクティヴィズムは、ヴィヴェイロス・デ・カストロやデスコラによるアメリカ大陸先住民諸社会の抽象モデルではなく、捕食と被捕食に関わる「実用的」パースペクティヴィズムのことを指している（コーン２０１６）。」

「パースペクティヴィズムは、プナンのように生態的な課題を「実用的」に達成する以外に、私たちの暮らしの中で、応用的に用いることができるのかもしれない。（･･･）
　パースペクティヴィズムはまた、他者のパースペクティヴィズムから世界を見る方法としてより広く応用可能である。」

（伊藤雄馬「ムラブリとして生きるということ」より）

「パースペクティヴィズムとは、ありていに言えば「見る人が違えば、世界も異なる」という立場のことである。「相手の立場に立って考える」ことをどうやって実践していくかを考える時に、このパースペクティヴィズムはそれに関係の深い多自然主義が重要なヒントになるのではないか、と今も自分は考えている。」

「人の数だけ世界があり、動物やミスなど人以外の世界も無数にある。それが多自然主義やパースペクティヴィズムの見る世界だ。そこでいわれていることはとても魅力的だ。一方で、これまでの科学の営みを否定することにも繋がりかねない。
　パースペクティヴィズムを隙間なく適応すると、「相手の立場にはなれない」という先の問題が浮上してくる。相手の立場になれないのだとすれば、客観的事実にはたどり着けない。科学とは客観的事実によって積み上げられていくものだ。客観的事実がないと、共通の基盤がなくなり、これまで科学的と呼ばれてきた議論は意味を成さないかのように感じられる。もし世界が人によって異なるのならば、別々の世界に住むぼくたちがどうやって言語を用いて議論できるだろうか？」

「パースペクティヴィズムの提示する世界を考える時にぼくの中に起こる混乱は、おそらく自己が一つに限られる、という考えから来ているように感じられる。複数の自己の存在を認めることが、この矛盾を乗り越えていく手立てになると考えるからだ。
　ぼくは少なくともまず、「科学者の自己」と「芸術家の自己」の二つの自己を区別することから始める必要があると考えている。」

「科学者の自己として言語化することには慣れているが、芸術家の自己として感覚を言語化することが難しいと感じる人は多い。どの言葉もしっくりこなくなるのだ。何か言葉を当てはめた瞬間に、自分の感覚ではなくなってしまう。そんな気がして言葉にすることができないと感じるようだ。芸術家の自己の世界は主観的な感覚が全てで、感覚は刻一刻と変化する。それを相手に伝えようとした時に、その術のなさに愕然としてしまうほどだ。つまり、芸術家の自己の世界にいる私たちは「世界は無限に異なる」ため、共有が困難であることを突き付けられているのだ。
　一方で、科学者の自己として言語化する時は、そのような迷いはほとんど現れない。（･･･）科学者の自己は誰もが共有している世界があり、客観的な事実があると考えているのだ。その世界の中では、正しいことがあり、間違ったことがある。それは誰もが同意できる形で共有されうる。つまり、科学者の自己にとって「世界は一つ」なのである。
　このように、科学者の自己と芸術家の自己が感じている世界は矛盾している。」

「科学者の自己にとっては真偽が重要になるが、芸術家の自己にとっては真偽よりも、「自分の感覚に誠実かどうか」、いうなれば「誠か嘘か」の「誠嘘」が指標になる。
　芸術家の自己は、無限の異なりを見せる自己の感覚の世界にいる自己だ。そこで表現する時にできることは、その個別の感覚をなるべく損なわずに言語化することのみだ。」

「現代は科学の時代であり、科学者の自己が優勢である。学校教育では科学者の自己で物事を語ることを訓練し、社会生活でも「個人の感想」を言おうとする芸術家の自己は丁寧に排除される。
　大学教育ではそれが顕著だ。」

「本論の「身体」は、科学者の自己と芸術家の自己が同時存在する瞬間に現れるものであり、多自然主義における身体とは異なる。前述したように、多自然主義の身体は芸術家の自己に近い概念だ。

（･･･）

この二つの自己は相補的で、同時に働く時、身体が現れる。「冷たい」と「温かい」の境界の手が輪郭を持つように、世界と一体となった芸術家の自己を、科学者の自己が捉える瞬間、身体は新しい輪郭を持って生成される。それは身体改造に他ならない。」

（「対談❹　habe notの感性にふれる」より）

「奥野／所有するということに関しては、拙著『人類学者Ｋ』（亜紀書房、２０２２）でも書いたのですが、所有しないこと、「無所有」が基本なんです。われわれは個人所有するということが基本なんですが、プナンは個人所有を否定し、所有しないということが基本です。
　プナンには、無所有を軸として二つのモードがあります。所有しないということが真ん中にあって、一方では、何かを誰かにもらったら、積極的な形で別の誰かに渡すことを率先してやる人がいます。結果、何も所有しない。そういう人がビッグマン（共同体のリーダー）になるわけです。共同体のリーダーは何も持たない。
　何も持たないことがよしとされるのであって、そこから逃れていくことはできません。で、どうなるかというと、反対の極にはせびりまくる人、ねだりまくる人がいるんです。
　一方では、徹底的にもらったものをどんどん人々に回していくことによって、寛大であることで尊敬されるような人。もう一方では、無所有が徳目としてあるので、それに対しては、自分は何も持たないんだけれども、生きていくために、ねだってせびりまくって生きていく人。この二つのモードがあるんです。
　プナンのこの部分が、私たちが生きている現代日本社会とは違う。われわれの社会では、何かを持っていることを基本にして、持つ人と持たない人、haveとhave not に分かれるわけです。われわれの社会では、持つことが目指すべき、至上の価値なんです。持つことが目指されてどのように自分が財産を築くか。モノを持つというのも必要なのですが、まず知識を持つことがそれ以上に大事です。知識を持つこと。知識を所有し、それを財産獲得に繋げるということが行われている。そういったロジックを歩んでいく人と、逆に、知識もモノもお金も持たない人ということがいる。持たない人が have not です。われわれの社会では、所有することが社会の原理としてある。このあたりが、プナンとわれわれの社会ではかなり違うんじゃないかと思っています。」

「奥野／プナンでは贈与交換をめぐるモース的な議論を、敢えて持ち出す必要もない。モースの『贈与論』は、そこでは、正しくもあり正しくもない。われわれは学問を経由しているので、「贈与の霊」、ハウみたいなものが、相手に対して負債をつくり出して、相手はそれを返さなければいけないと思うようになるんだと考えてしまうんだけれども、別にそうでもないんです。」

「奥野／プナンであれマオリであれ、モノを循環させる贈与論は、資本の蓄積と投下、そこに付随する貧富の差を生じさせる仕組みを防いでいるんです。富を人々のあいだでつねに循環させることで、平等主義的な社会を維持していくことができているわけです。富が一カ所に集中しないことにより、権力の遍在が生じないようになっている。」

「伊藤／have と have not のところでも話しましたが、そこから自由になるために、奥野さんの言葉を借りれば、すり鉢の外側に行くために役に立つかもしれないと思っているのが、「三角形」なんです。幾何学的に考えてみることが個人的に好きなんですが、例えばhaveとhave notの二元論が世の中の仕組みですが、そこの中だけで考えると煮詰まる。だから三点目を見つけて、三角形をつくる。have と have not、そしてそれらを成立させている太陽からの視座のような点。太陽からの視座にいれば。たまたま自分がhave側であなたがhave not側だけど、別の場合では逆転することも当然あるということを自覚できると思うんです。
　力学的に三角形って一番安定する形ですよね。その三角形が、色々なところ見出せるなと思っています。いろいろな三角形を見出すために物事には二元性があるのかな、と思ったりもするんです。」

「伊藤／『ムラブリ』を書く時にちょっと意識したことがあって、それは「ぼくたち」と書きたくなるところを、「ぼく」と書くということです。油断すると、すぐ「私たち」とか書いている。
　もちろん、「ぼくたち」と書いているところもあるんですけど、なるべく「ぼく」で通せるところはそう書いたんです。というのは、主語が大きくなると、二元性が自分の中に同時存在するということを、あやふやにしちゃう感じがして。
　だって、ぼくは奥野さんのことが分からないし。編集部の清水さんのことが分からないのに、例えば「日本人」と言えば。奥野さんも清水さんもぼくも、お互いに何か共有できているつもりになってしまう。内省が深まらないんです。カテゴリーとしての「ぼくたち」ではなく、身体を持った個人としての「ぼく」の中で起きていることだと限定することによって、ぼくの中にhaveとhave notの感性が両方ともあることが実感できてくる。両方ともあると感じられるなら、その両方が同時に見えている別の視座がぼくの中にあると感じられてきます。複数の矛盾した自己が自分に中に感じられたら、それは何だと考えざるをえない。
　「自分たち」と言っていたら、自分以外の人は当然違う感性をもつのだから、haveもhave notも両方とも存在するだろうと思える。同時に存在することが不思議に思えなくなる。あまりシリアスには羽化取れない。逃げですね。でも自分という個人の中に二つとも、しかも同時にあるんだと気付いた時に。それらを両立させているもう一つの視座が現れざるをえない状況になるのかなと思っています。
　　ぼくはそこの視座に向かうために二元性があると今は思っているんです。それがぼくがムラブと合った意味だと思います。奥野さんもそうなのかなと感じています。」

「伊藤／すり鉢の向こう側に行くこと自体は本質的には解決にならないと思います。すり鉢から別のすり鉢に移動しても、形を変えて同じ苦しみがある。今のままの自分でより似合うすり鉢は見つかるかもしれませんけどね。そうではなくて、どのすり鉢も、それを支えているものがあると気付くこと。日本でもムラブリでも、太陽はあるとか。それを実感するために、すり鉢状世界の外側に行く経験は大事だと思います。」

◎奥野克巳
立教大学異文化コミュニケーション学部教授。著作に『一億年の森の思考法』（2022年、教育評論社）、『人類学者Ｋ』（2022年、亜紀書房）『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』(2023年、新潮文庫)など多数。訳書にティム・インゴルド著『応答、しつづけよ。』（2023年、亜紀書房）など。

◎伊藤雄馬
言語学者、横浜市立大学客員研究員。1986年、島根県生まれ。2016年、京都大学大学院文学研究科研究指導認定退学。日本学術振興会特別研究員(PD)、富山国際大学現代社会学部講師、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員などを経て、2020年より独立研究に入る。著書として『ムラブリ』（2023年、集英社インターナショナル）がある。

☆mediopos-3193　2023.8.15

「ウォーク（woke）」という言葉がある
それは「wake=目を覚ます」という動詞から派生し
当初は「社会正義」を
実践しようとする人びとに使われていた

その「社会的正義」とは
気候変動・環境保護・人種的偏見や性差別の撤廃
ＬＧＢＴＱ・性的暴力廃絶等といった
進歩的なポリティカル・コレクトネスに関わるものだが

その「ウォーク」は今ではむしろ
「表向きは意識が高いようなふりをしながら、
その実、これらとは矛盾する行動をとる
「えせ進歩主義者」を非難する言葉として
使われるようになっている」という

訳者はその「ウォーク」を
「意識高い系」という言葉で表現している

少しでも「意識」すれば明らかなように
そうした「ウォーク資本主義」現象は
企業が社会問題に取り組むことそのものを偽装し
実際は企業利益に直結する現代資本主義の構造を
如実に表しているといえる

企業による「社会的正義」を偽装した
「ウォーク資本主義」は
「民主主義の価値観と明らかに矛盾し、
富と所得の不平等を拡大し続け、
少数富裕者層の利益のための権力行使を永続させる」

現代日本の不可解で不条理なまでの増税や
それと同時に行われる企業負担等の軽減を見るだけでも
「ウォーク」は「目覚め」ではなく
むしろ人びとを眠らせる仕掛けであることがわかる

公共の利益や倫理に基づいているはずの
メディアや「科学者」たちさえ
人びとを眠らせる仕掛け人となっているのも
その主要広告主の意向に反することが
事実上できなくなっていることが大きな原因となっている

▪カール・ローズ（庭田よう子訳／中野剛志解説)
『WOKE CAPITALISM「意識高い系」資本主義が民主主義を滅ぼす』
（東洋経済新報社 2023/4）

マイナンバーカードに関して
一企業が「納期」を守るようにといった言葉を
抵抗もなく使っていることからだけでも
さまざまな政策が経団連・財界の意向に基づいて
政治が実行しようとしていることは明らかである

地球温暖化やＳＤＧｓなどに関連した
行政上のさまざまな取り組みの意図についても
少しでも「意識」的になることさえできれば同様である

企業倫理も政治倫理も教育倫理さえ
いまでは人びとを眠らせるための
逆説的な「ウォーク」と化している感が強くある

どうすればほんとうの意味で
「目覚め」ることが可能となるのだろうか

▪カール・ローズ（庭田よう子訳／中野剛志解説)
『WOKE CAPITALISM「意識高い系」資本主義が民主主義を滅ぼす』
（東洋経済新報社 2023/4）

（【巻頭解説】偽装された新自由主義（中野剛志）より）

「「ウォーク（woke）とは、「目を覚ます」ことを意味する。１９６０年代頃のアメリカで、黒人たちの間でよく使われたスラングだったらしい。その「ウォーク」というスラングが、今日では、別の意味を帯びて復活してきたのだという。
しかも、近年、「ウォーク」は、あまり良くない意味や冷やかしの意味を込めて使われる言葉になっているという。
それは、環境保護、人種的偏見や性差別の撤廃、ＬＧＢＴＱ（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー等）の権利、経済的平等といった進歩的なポリティカル・コレクトネスや社会正義に対して、表向きは意識が高いようなふりをしながら、その実、これらとは矛盾する行動をとる「えせ進歩主義者」を非難する言葉として使われるようになっているのだという。（･･･）
そう、「ウォーク」という英語のスラングを、日本語の最近のスラングで翻訳するならば、「意識高い系」になるのである。
人びとが使うスラングは、社会の相貌を映す鏡である。「意識高い系」という言葉が流行っているということは、日本にも「ウォーク資本主義」現象が起きているということにほかならない。」

「公共の利益を重視しているかに見える企業活動は、むしろ、企業の経済的な利益を守り、さらには殖やすための手の込んだ策略なのだ。ローズ教授は、そう主張するのである。
まず、社会的正義に熱心であるという企業のブランド・イメージを打ち出した方が、より儲かる。だから、企業は、熱心に寄附を行っているのである。もっとも、それだけなら、たいして悪い話ではないかのように見える。それどころか、企業の私的利益と公共の利益が一致するならば、それは歓迎すべきことではないかと思われるかもしれない。
しかし、問題は、そこにはとどまらない。
富裕者層が巨額の寄付を行って公共の問題に取り組む姿勢を見せるのは、裏を返せば、民主政治が公共の利益を実現する必要はないというジェスチャーなのである。
そのジェスチャーが意味するのは、公共の利益を実現するのは、一部の富裕者層や権力者であって、民主的に選ばれ、国民に対して説明責任を持つ政府ではないということである。
それは、端的に言えば、民主主義の否定にほかならない。富裕者層にとる金権政治である。
富裕者層の金権政治は、公共の利益のために私的利益をある程度は犠牲にするが、もちろん、私的利益を大きく損なうような公共への奉仕には決して応じない。富裕者層の金権政治における公共の利益は、富裕者層の権益を維持できる範囲内でしか、実現されないのである。」

「「意識高い系」富裕者雄による「意識高い系」の社会貢献活動は、実は、進歩主義的なのではなく、その反対に、「富める者はますます富み、貧しき者は持っている物さえも取り上げられる」（聖書マタイ伝）という不平等な社会構造を維持し、富める者の既得権益を守るための極めて狡猾な策略なのである。」

「この悪質な偽装された新自由主義たる「ウォーク資本主義」は、すでに日本にも浸透しつつある。」

（「第１章　ウォーク資本主義に関する問題」より）

「ウォーク資本主義は、現代の経済・政治活動における、とくにわたしたちの生活を多面的に支配する巨大な多国籍企業における、拡大する一方の厄介な側面である。この危険な動向を批判することは、反動的な保守派の論客に同調することを意味してはいない。彼らはウォークネスを、利己的な利潤追求という資本主義の中核を踏みにじるものとして非難する。それに対して、ウォーク資本主義の本当の危険性は、資本主義体制を弱体化させることではなく、政治権力の企業エリートへの集中を一層強化することである。この動向が続くことが、民主主義に対する脅威なのである。それはまた、平等、自由、社会連帯の可能性にあえて希望を持ち続ける、進歩的な政治に対する脅威でもある。」

（「第１３章　ウォーク資本主義から目を覚ます」より）

「新自由主義の秩序は民主主義の価値観と明らかに矛盾し、富と所得の不平等を拡大し続け、少数富裕者層の利益のための権力行使を永続させる、ウォーク資本主義にまで至らしめた。また。また、わたしたちの産業システムは環境を破壊し、この世界を将来の世代にとってますます住みにくいところにしている。ウォーク資本主義はその建前とは裏腹に、こうした問題に取り組むことはない。それどころか、問題を悪化させ隠蔽しようとしている。今こそ、ウォーク資本主義から目を覚ます（ウォーク）ときである。その特徴と政治的影響に気づくときである。すべての人のために世界を平等と正義の道へと導くためにも、介入するときである。」

○目次

【巻頭解説】偽装された新自由主義（中野剛志）

第１章　ウォーク資本主義に関する問題
第２章　企業ポピュリスト
第３章　ウォークの意味の逆転
第４章　資本主義、ウォークになる
第５章　株主第一主義
第６章　ウォークネスの皮を被った狼
第７章　見た目が良くても環境に良いとは限らない
第８章　ＣＥＯアクティビスト
第９章　人種、スポーツ、ウォークネス
第１０章　人種的資本主義とウォーク資本主義
第１１章　ウォークな企業の最高のあり方
第１２章　右手で与える一方で
第１３章　ウォーク資本主義から目を覚ます

◎カール・ローズ
シドニー工科大学UTSビジネススクール学長兼組織論教授
シドニー工科大学組織論教授。主な研究テーマは、企業が市民や市民社会からその行動に対してどのように責任を問われ、また問われるべきかに関すること。この研究は、社会における企業の役割を批判的に問い直し、繁栄を皆で分かち合えるようにすることを目的とする。倫理、政治、経済について、主流派や独立系の新聞に定期的に寄稿している。著者の記事は、『ファスト・カンパニー』、『ビジネス・インサイダー』、『ガーディアン』、『コモン・ドリームズ』、『カンバセーション』などで読むことができる。近著にCEO Society: The Corporate Takeover of Everyday Life(Zed Books, 2018, with Peter Bloom)、Disturbing Business Ethics (Routledge, 2019)がある。著書はこれまで、中国語、オランダ語、ハンガリー語、イタリア語、韓国語、ポーランド語、スペイン語、トルコ語に翻訳されている。

◎庭田 よう子(ニワタ ヨウコ)
翻訳家
翻訳家。慶應義塾大学文学部卒業。主な訳書に、ヤーデン・カッツ『AIと白人至上主義』(左右社)、ダニエル・リー『SS将校のアームチェア』(みすず書房)、ヨラム・ハゾニー『ナショナリズムの美徳』(東洋経済新報社)などがある。

◎中野 剛志(ナカノ タケシ)
評論家
評論家。1971年、神奈川県生まれ。元・京都大学大学院工学研究科准教授。専門は政治経済思想。1996年、東京大学教養学部(国際関係論)卒業後、通商産業省(現・経済産業省)に入省。2000年よりエディンバラ大学大学院に留学し、政治思想を専攻。 2001年に同大学院より優等修士号、2005年に博士号を取得。2003年、論文“Theorising Economic Nationalism”(Nations and Nationalism)でNations and Nationalism Prizeを受賞。著書に山本七平賞奨励賞を受賞した『日本思想史新論』(ちくま新書)、『TPP亡国論』 (集英社新書)、『国力論』(以文社)、『富国と強兵ー地政経済学序説』(東洋経済新報社)、『変異する資本主義』(ダイヤモンド社)などがある。

☆mediopos-3194　2023.8.16

ベンヤミンは現代社会を
「複製技術時代」と呼び
「アウラの失われた時代」とした

ベンヤミンにとっての「複製技術」は
「写真」に代表される手法であり
逆にいえば複製ができず
「真正性」をもっている「本物」には
「アウラ」があるということができる

つまり「オリジナルのもつ〈いまーーここ〉的性質が、
オリジナルの真正さという概念を形づくる。」
「真正さの全領域は、技術的ーーーー
そしてもちろん技術的なものだけではないーーーー
複製の可能性を受けつけない。」
というのである

しかし現代はベンヤミンの時代には
想像しえなかっただろう技術を可能にしている

ＮＦＴ（Non-Fungible Token：非代替性トークン）である

それは「潜在的には無限に複製することが可能な
デジタルデータに対して、
本物と偽物の違いを区別できるようにする技術」であり
「まったく同じ外観をした無数のデータのなかで、
一つだけの本物を特定することを可能にする」

しかしＮＦＴに「アウラ」は存在しない

「アウラ」は
「ただ事物の唯一性を指すだけの概念ではない」からだ
「〈芸術作品が「いまーーここ〉にあるという性質」がある

つまりそこには
「経年変化」する「作品の物質的構造」があり
そうした「質料の経年変化が
オリジナルの歴史性を支えている」

たとえＮＦＴの「ハッシュ値の記録」が
そのデータの真正性を判定することができたとしても
「一回しか生起しない〈いまーーここ〉を
開示すること」はできない

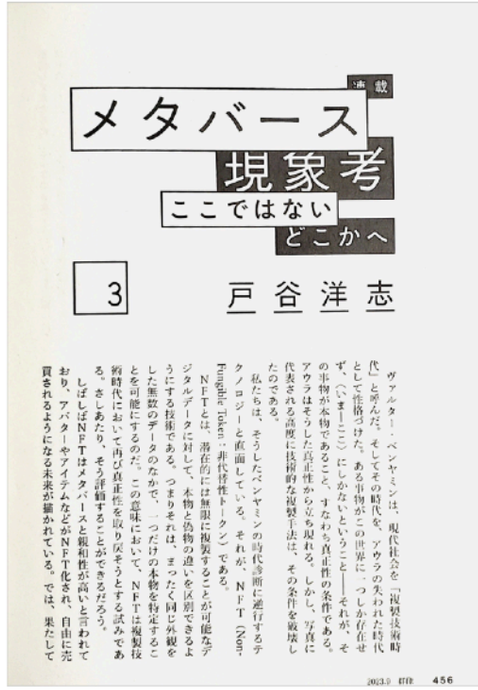
ＮＦＴは「アウラなき真正性の技術」なのだ

私が私であるということも
たとえ私のクローンが存在し
そこに記憶データがインプットされていたとしても
それはこの「一回しか生起しない〈いまーーここ〉」に
存在している「私」ではない

私は身体をもって生まれ
「経年変化」しながら
「私」という「歴史性」を生きている

とはいえさまざまなかたちをとって
「複製技術」は展開していくだろう
そして「アウラ」を見いだす力を失ったとき
「複製技術」に呑み込まれもするだろう

しかし「アウラの失われた時代」にこそ
「アウラ」を見いだすことのできる力を
育てていかなければならない



連載

メタバース現象考

ここではないどこかへ

3

戸谷洋志

ヴァルター・ベンヤミンは、現代社会を「複製技術時代」と呼んだ。そしてその時代を、アウラの失われた時代として性格づけた。ある事物がこの世界に一つしか存在せず、〈いまーここ〉にしかないということ――それが、その事物が本物であること、すなわち真正性の条件である。アウラはそうした真正性から立ち現れる。しかし、写真に代表される高度に技術的な複製手法は、その条件を破壊したのである。

私たちは、そうしたベンヤミンの時代診断に逆行するテクノロジーと直面している。それが、ＮＦＴ（Non-Fungible Tokens：非代替性トークン）である。

ＮＦＴとは、潜在的には無限に複製することが可能なデジタルデータに対して、本物と偽物の違いを区別できるようにする技術である。つまりそれは、まったく同じ外観をした無数のデータのなかで、一つだけの本物を特定することを可能にするのだ。この意味において、ＮＦＴは複製技術時代において再び真正性を取り戻そうとする試みである。さしあたり、そう評価することができるだろう。

しばしばＮＦＴは親和性が高いと言われており、アバターやアイテムなどがＮＦＴ化され、自由に売買されるようになる未来が描かれている。では、果たして

2023.9 群像　456

▪戸谷洋志「メタバース現象考　ここではないどこかへ　３」
（『群像』2023年9月号）

▪戸谷洋志「メタバース現象考　ここではないどこかへ　３」
（『群像』2023年9月号）

「ヴァルター・ベンヤミンは、現代社会を「複製技術時代」と呼んだ。そしてその時代を、アウラの失われた時代として性格づけた。ある事物がこの世界に一つしか存在せず、〈いまーーここ〉にしかないということーーーーそれが、その事物が本物であること、すなわち真正性の条件である。アウラはそうした真正性から立ち現れる。しかし、写真に代表される高度に技術的な複製手法は、その条件を破壊したのである。

　私たちは、そうしたベンヤミンの時代診断に逆行するテクノロジーと直面している。それがＮＦＴ（Non-Fungible Token：非代替性トークン）である。

　ＮＦＴとは、潜在的には無限に複製することが可能なデジタルデータに対して、本物と偽物の違いを区別できるようにする技術である。つまりそれは、まったく同じ外観をした無数のデータのなかで、一つだけの本物を特定することを可能にするのだ。この意味において、ＮＦＴは複製技術時代において再び真正性を取り戻そうとする試みである。さしあたり、そう評価することができるだろう。

　しばしばＮＦＴはメタバースと親和性が高いと言われており、アバターやアイテムなどがＮＦＴ化され、自由に売買されるようになる未来が描かれている。では、果たしてそれは、本当に「複製技術次代」への抵抗になりうるのだろうか。ＮＦＴが作り出す事物の真正性は、ベンヤミンの考えていたそれを復活させることになるのだろうか。」

「結論から言えば、そうした望みはない。

　たしかに、ＮＦＴは複製可能なデータに対して唯一性を付与することができる。しかし、ベンヤミンの言うアウラは、ただ事物の唯一性を指すだけの概念ではない。

（･･･）

　アウラとは、芸術作品が〈いまーーここ〉にあるという性質、言い換えるなら「一回的にあるとう性質」に他ならない。そしてその一回性を支えているのは、何よりもまず、「作品の物質的構造」である。すなわちその作品が質料を持ち、物質によって担われているということだ。作品は、それが質料に根ざして存在するからこそ、まさに〈いまーーここ〉に存在すると見なされるのである。

　質料によって存在するからこそ、作品は経年変化する。そうした経年変化は、その作品が一つの歴史のなかに置かれ、その歴史に居合わせる存在であることを意味する。ベンヤミンは、アウラのうちに、そうした「歴史的証言力」を洞察する。それに対して、複製された作品はオリジナルの歴史を継承しているわけではない。たとえその複製が、オリジナルとまったく同じ外観をしていたとしても、オリジナルの辿ってきた歴史はそこから抹消されてしまう。なぜならその歴史は、オリジナルの質料がもつ一回性に基づくものであり、複製はオリジナルと別の質料によって存在しているからだ。

　質料の経年変化がオリジナルの歴史性を支えている。これと似た構造を、ＮＦＴのうちに見いだすことはできる。たとえば、ＮＦＴはハッシュ値の記録を辿ることによって、そのデータの真正性を判定する。ハッシュ値は、一回一回の取引によって更新されるため、データの内容がまったく同一であったとしても、どのように取引されてきたかによって変化する。ＮＦＴにおいてオリジナルとされるデータは、このハッシュ値の軌跡の唯一性によって支えられているのだ。それは、ベンヤミンが洞察するところの、作品のアウラに対してその物質的構造がもつ歴史性が果たす役割に、ある意味ではよく似ている。

　しかし、結局のところ、ハッシュ値の軌跡は事物の歴史的証言力とは違ったものである。なぜならハッシュ値は、どこにも居合わせないからだ。たしかにハッシュ値には時間の経過を通じた唯一の連続性がある。それはどこかに存在するものではない。それが私たちに、一回しか生起しない〈いまーーここ〉を開示することはない。私たちはオリジナルなＮＦＴを所有していれば、それをいつでも、どこでも見ることができるのである。

　それでも、ＮＦＴに注目することで、私たちはベンヤミンの思想に新たな知見を付け加えることができるのではないか。たとえば彼は次のように述べている。

　　オリジナルのもつ〈いまーーここ〉的性質が、オリジナルの真正さという概念を形づくる。〔･･･〕真正さの全領域は、技術的ーーーーそしてもちろん技術的なものだけではないーーーーー複製の可能性を受けつけない。

　すなわちベンヤミンは、アウラを真正性という概念の条件として捉えている。しかし、仮にＮＦＴがデータの真正性を保証しうる概念であるとしたら、私たちは彼の言を次のように修正する必要があるだろう。すなわち、オリジナルの真正性は、〈いまーーここ〉という特質なしに、技術的に成立させることができる。

　もちろんそれが、ベンヤミンの考えていた真正性とは異なる概念であることは、自明である。しかし、彼を参照することで初めて見えてくることがある。それは、ＮＦＴとは、アウラなき真正性の技術である、ということだ。」

☆mediopos-3195　2023.8.17

永井玲衣の哲学エッセイを読むと
そのことばにすうっと引き寄せられる

そのことばは読みやすくやさしいけれど
それまで自明のものであった世界を
ふしぎでわからないものにしてしまうような
魔法のことばでできている

『水中の哲学者たち』は
そんなエッセイが集められた魔法の本

２年ほどまえにでていたけれど
まだとりあげていないことに気づいたので
その魔法を少しおすそわけしておくことにしたい

永井玲衣は
「いつからか、世界をよく見れるひとに
なりたいと思うようになった」という

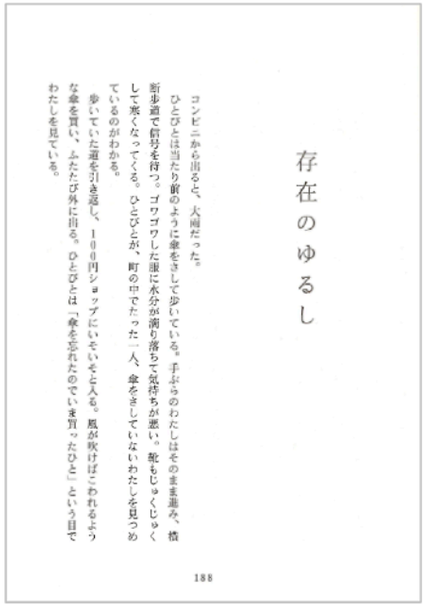
しかし「世界をよく見」ようとすると
「くっきりしたり、ぼやけたり、かたちを変えたり」
「揺さぶられ、混乱し、思考がもつれて、
あっちへこっちへ行き来」たりもする

永井玲衣は問う
「世界に根ざしながら、
世界を見ることはいかにして可能だろうか」と

世界を見るということは
世界から離れることではない

見られた世界は変化しつづけ
世界を見るわたしも変化し続けるなか
合わせ鏡のなかで
じぶんと世界が照らし合っているように
世界に居ながらにして世界を見るのである

そうして哲学することばのなかから
「存在のゆるし」という
きわめてラディカルなテーマをとりあげてみる



存在のゆるし

コンビニから出ると、大雨だった。
ひとびとは当たり前のように傘をさして歩いている。手ぶらのわたしはそのまま濡み、横断歩道で信号を待つ。ゴワゴワした服に水分が滴り落ちて気持ちが悪い。靴もじゅくじゅくして冷くなってくる。ひとびとが、町の中でたった一人、傘をさしていないわたしを見つめているのがわかる。
歩いていた道を引き返し、100円ショップにいそいそと入る。風が吹けばこわれるような傘を買い、ふたたび外に出る。ひとびとは「傘を忘れたのでいま買った」という目でわたしを見ている。

188

▪永井玲衣『水中の哲学者たち』
（晶文社 2021/9）

「ただ存在する」ということ

これも永井玲衣の魔法だ
そしてそれは禅の「無位の真人」を
問うようなことば

それを試みようとすると
「ただ存在する」ことの困難さのなかで
行方をなくしてしまいかねないことがわかる

ひとは
なにかをしようとしてしまう
なにかになろうとしてしまう
じぶんを位置づけ語ろうとして
名や経歴や役割やの付箋を貼る

けれどそれらは
じぶんをべつのなにかに
置き換えてしまうことになる
そしてじぶんがじぶんであることの
自由をなくしてしまうことに気づく

「ただ存在する」
ただいるということ

なにかをするのではなく
なにかになるのでもなく
「ただ存在する」ひととしてある

その魔法は
世界やじぶんを
「問い」の迷路のなかへ
というよりも
問いの源へと
みずからを解き放つ存在へと導くことばとなる

▪永井玲衣『水中の哲学者たち』
（晶文社 2021/9）

（「まえがき」より）

「いつからか、世界をよく見れるひとになりたいと思うようになった。
それは幅広さというよりも、奥行きの探求への欲求であった。机上に転がるペンを見る、使い古された言葉を見る、向かいに座るあなたを見る、社会の構造を見る。刺しゅう糸をはじめて触ったときのことを思い出す。一本の糸かと思ったものが、何本にもほぐれて息をのむ。世界は刺しゅう糸のように、たくさんの糸でよりあわさっている。一本一本の糸に目をこらすと、それぞれがほんの少しずつ違う色をして、また何本にもほぐれていく、
そうして「見る」をつづけていくと、世界はまた、見えなくなる。当初の相貌からはとおく離れて、よくわからないものになる。ぼやけたり、全く違ったものになったりして、手からすりぬけていく。
哲学することは、世界をよく見ることだ。くっきりしたり、ぼやけたり、かたちを変えたりして、少しずつ世界と関係を深めていく。揺さぶられ、混乱し、思考がもつれて、あっちへこっちへ行き来する。これは、朝に目を覚ましたときの感覚に少しだけ似ている。」

「世界に根ざしながら、世界を見ることはいかにして可能だろうか、とよく考える。「見る」ことは、世界を額縁に容れてうんと高い場所に飾ってしまうことでもあり、自分を世界から切り離し傍観することでもある。だがわたしたちは、世界に投げ入れられ、関係し、はたらきかけ、世界を新しくつくりつづけてもいる。」

「そんな問いをもとに、世界に根ざしながら世界を見つめて考えることを、わたしは手のひらサイズの哲学と呼ぶ。それは、空高く飛翔し、高みから世界を細断し、整然とまとめあげるような大哲学ではない。なんだかどうもわかりにくく、今にも消えそうな何かであり、あいまいで、とらえどころがなく、過去と現在を行き来し、うねうねとした意識の流れが、そのままもつれた考えに反映されるような、そして寝ぼけた頭で世界に戻ってくるときのような、そんな哲学だ。」

（「2　手のひらサイズの哲学」〜「存在のゆるし」より）

「存在することは、やるせない。存在は白々しい。わたしたちは「ただ存在すること」が苦手だ。
（･･･）
10年以上前に見た番組で、オードリーの若林正恭が「楽屋でペットボトルを読み込んでいる」という話をしていた。ただ座っているのはつらい、だけどドリンクのラベルを見ていれば「ラベルを見れるヤツになれる」と。
「なれる」という言い方が記憶に残る。ただ存在していることは、いたたまれない。だから、わたしたちは何か役割を得たいと思う。それは、アイデアを出すひとだったり、議論を記録するひとだったり、荷物を運ぶひとだったりする。もしくは、傘をさしているひとだったり、ラベルを熱心に読んでいるひとだったり、スマホをいじっているひとだったりする。
反対に、役割を持っていないひとをわたしたちは軽視する。まなざしの圧力でそのひとを押しつぶそうとする。まなざしは、存在を小さくすることができる。役割を持て、役に立て、と叱りつけることができる。
だがその声は、呪いである。そして呪いの杖はつねに壊れている。呪文をよなえて繰り出される魔法は、あたり一面に撒き散って、わたしにも突き刺さるだろう。呪いはあっという間に血管をかけめぐり、わたしを殺すだろう。いつまでも、いつまでも、呪いを撒き散らしながら。

少し前から「ただ存在する」運動を始めた。駅に着くまでの電車の中で、ただ存在するひとになる。町の中で、植え込みに座って、何もしないひとになる。
「話しかけられるのを待っているひと」になってはいけない。「待ち合わせをしているひと」にも「ぼーっとしているひと」「疲れたから休んでいるひと」にもなってはならない。そうではなく、わたしはただ、存在するひとになりたい。
ひとと目が合う。ひとは少しだけぎょっとした顔をする。スマホもいじらず、ぼーっとしているわけでもなく、ただ植え込みに座っているひとというのは、奇妙だ。「なる」に飛びつかずに、存在そのものにしがみついていることは難しい。存在の不安に押しつぶされそうになりながら、わたしは「存在」をやってみる。
大雨の中、傘をさしているひとにならなくてもいいことを、自分にゆるそう。目の前のペットボトルを読み込まなくてもいいように。エレベーターの中で、ゆっくりと点滅する階数を見上げなくてもいいように。役割を得ることだけが価値にならないように。
これはわたしのささやかな社会運動であり、抵抗運動である。」

☆mediopos-3196　2023.8.18

川上和人は
小笠原や西之島などを主なフィールドとしている
鳥類学者である
その鳥類学者が「島」の進化を語る

「鳥」ではなく「島」である
二つの漢字はよく似ている

一説ではあるそうだが
「島」という漢字は
「海にある山の上に鳥がとまる様子」を
表しているという

大海原に「島」が生まれ
新天地を求め鳥たちが飛来し
鳥たちが運んだ種が根づき
その生態系のなかで
独自の進化が始まっていく

島とは「海により隔離されていること」
そして「相対的に小さいこと」という
主要な特徴を持っている

海によって隔離されているため
生物は生息地から海を越えて
島にやってこなくてはならない

島にやってくることのできた生物のみが
生息できることから
そこには島独自の生態系が生まれ
進化や絶滅などが展開される

その島が
かつて大陸の一部であった大陸島ではなく
水深の深い海洋プレートの上に生じた
海洋島であるばあい
海を越えてくることのできない生物は
基本的に島には存在しない

たとえば海水の苦手なカエルなどの両生類や
海を渡るリスクの大きい大型哺乳類などは
海洋島へと渡ってくることができない

また大型哺乳類などの捕食者が希薄なことから
飛ばない鳥として進化したりもする
空を飛ぶ大きな理由のひとつが
捕食者から身を守るということでもあるからだ

ある閉じられた環境で
どんな生態系が形成されていくかを観察するには
「島」は格好の場所だ

とはいえそこでつくられる
生態系やその進化を観察するには
とほうもなく長い時間がかかる
島で実際に起こることが観察できるのは
観察可能な範囲にかぎられはするけれど
その視点で「島」を観察することで
見えてくるものはたしかにある

いうまでもなく
日本はすべて島でできている
日本で生まれた人は島人である
そしてその独自の生態系のもとで生きている
その生態系を「島」のそれとして
観察してみるのも興味深いところだ

しかも著者も示唆しているように
大陸島や海洋島といった性格を越えて
「島」という現象をとらえるとき
自然界には通常の島以外にも
さまざまな島があふれている
「人間による新たに生まれた都市にも
島は存在している」のだ

とはいえ人間の関与があると
そこには通常の生物環境以外の
人為的な環境がさまざまに影響してくる

「地域」「共同体」「組織」といったものも
また「島」ということができるのではないか
そうした「島」も生まれ「進化」し
独特の生態系をかたちづくり
ときに絶滅などを繰り返していく･･･

▪川上和人『そもそも島に進化あり』
（新潮文庫　2023/6）

▪川上和人『そもそも島に進化あり』
（新潮文庫　2023/6）

（「はじめに」より）

「私は鳥類学者である。本日は私がナビゲーターを務めることをご容赦いただきたい。だって、島と鳥は字が似ているのですもの。
　そもそも島という漢字は、海にある山の上に鳥がとまる様子を表すという説がある。島には、鳥がいて当然という寸法だ。」

（「序　そもそも島は」より）

「日本の国土はすべて島なので、日本で生まれた人はみな島人である。日本の人口の９割以上は、北海道、九州、死国を含む本土部に住むが、これらの島は大きすぎて島在住という意識が希薄だ。このため、島とう空間の特異性を自覚することが難しい。
　逆にいわゆる島嶼部に住んでいると、本当は独特極まりない環境も日常の風景になってしまう。やはりユニークさを実感できない。」

「島はミニチュアの世界だ。複雑な生態系から少数の要素を抽出して構成され隔離された箱庭である。構成要素がシンプルで特殊なほど、島という事象の理解を進めるショーウィンドウとなる。とくにメインランドとの対比による、島の性格はより明確に浮き彫りになるだろう。
　島らしい島を知ることで、島とはなにかという理解を深められるのだ。」

「島の生物学の面白さは、特殊性と一般性の２点に集約される。
　飛翔を最大の特徴とする鳥類であるにもかかわらず、島では飛ばない鳥が進化するという特殊性。飛ばない鳥は島で進化しやすいという一般性。飛ばない鳥が島の条件に合わせて獲得する行動の特殊性。その特殊な行動の生じる背景に合理的な解釈を与える一般性。特殊性と一般性の輪廻を嗜むことが、島の生物学における最大の愉悦である。」

「多様な島を比較することで、一般的な法則が見いだされる。各々の島をつぶさに見れば、独自の背景に成立した特殊な事象が見いだされる。一般性と特殊性は生物学全般の魅力でもある。島を知り、島に行けば、誰もがこの二つを同時に体感できるのだ。」

（「第１章　島が世界に現れる）

「島の重要な点は、「海により隔離されていること」と、「相対的に小さいこと」の二つである。（･･･）
　海による隔離により、生物は生息地から海を越えて島に到達しなければならない。この生物の供給場所との関係が、生態学で考えるところの「島」の主題である。この意味で、生物の供給元となる場所を「大陸」と表現し、供給先のことを「島」と呼ぶことも多い。」

「島を二つの分類せよ（･･･）といわれたら、即座に「大陸島」と「海洋島」の二つに分けよう。（･･･）
　一般に大陸島とは、水深の浅い大陸プレートの上に位置する島のことを呼ぶ。
（･･･）
　これに対して、海洋島とは水深の深い海洋プレートの上に生じた島のことである。このような島は、直接にしろ間接にしろ、過去に大陸とつながったことがないことが多い。」

「日本に島のうち９割以上が大陸島だ。（･･･）日本列島の基礎的な部分は、１５００万年前にはユーらしさ大陸の一部だった。しかし、その後に日本海が生じて、島となったのだと考えられている。また、その後に繰り返し訪れる氷河期と間氷期により、大陸と一部がつながったり途切れたりを繰り返している。」

「日本で代表的な海洋島といえば、沖縄県の大東諸島、東京都の小笠原諸島である。」

「世界の海に無数の島が浮かぶ。正確には海底に基礎を置いているので、浮かんでいるわけではないのだが。そこはそれ詩的表現だ。とにもかくにも島々にはそれぞれの歴史があり、異なる個性を宿している。その来歴の違いゆえに、すべての島に固有の生態系が生じる、
　生物学者の私にとって大切なのは、島の上にへばりつく生物たちである。しかし、その正確を決するのはとりもなおさず無生物である島の本体そのものの履歴なのだ。」

（「第２章　島に生物が参上する」より）

「大陸の一部がプレートの移動に伴って分裂し、大陸島ができたとしよう、その島が独立しらとき、そこにはすでに土があり、森林があり、動物が住んでいる。しかし、海洋島が生まれたとき、そこにはなにもいない。
　このような島に陸上生物が生息するためには、海を越える必要がある。
（･･･）
　まず考えられるのは、自発的に移動することだ。陸上生物にとって、自ら海を越える方法は三つある。飛ぶか、泳ぐか、地中を潜行するかだ。
　空を飛べる動物といえば、もちろんなによる鳥類である。なぜ筆頭が鳥なのかといえば、もちろん私が鳥類学者だからだ。」

「空を飛べる動物は鳥だけではない。自発的な飛翔は、（･･･）哺乳類であるコウモリや昆虫も行う。」

「鳥の飛翔力がもつ意味は自発移動だけではない。ほかの生物の乗り物となり分布拡大に寄与することにもある。
　最も容易に想像されるのは種子散布である。鳥は、さまざまな植物の果実を食べ、種子をばらまく。これを被食型散布、または周食型散布と呼ぶ。」

「鳥に被食型散布されるのは種子だけではない。動物を運ぶこともある。」

「もう一つ、鳥の食物として運ばれる方法として貯食型散布がある。鳥の中でも鳥やヤマガラ、どんぐりキツツキなどは、種子が豊富な時期にたくさん集めて蓄える性質がある。」

「島における鳥散布植物の半分は付着型散布である。」

「小笠原諸島の植物の約１５％は、風散布を主な移動手段とする植物と考えられている。」

「ただし、風による移動のためには、メインランドからの距離や風向きがとても重要な役割を果たすことになる。ハワイでは風散布植物の占める割合はわずか２％しかなく。小笠原諸島の１５％に比べて非常に低いことがわかる。」

「動物にしろ植物にしろ、生きて行くには条件がある。水分や絵エネルギーがあり、適した生息地があること、強烈な死亡要因がないこと、といったところだろう。（･･･）
　島に最初に現れる生命は、動物でも植物でもなく地衣類かもしれない。（･･･）
　地衣類は軽い胞子や栄養生殖する散布体として風に乗って各地に降り注ぎ、海の隔離ものともしない。（･･･）
　一方で植物も負けてはいない。火山の噴火により溶岩に覆われ、生物相がリセットされたクラカタウ島、海底火山により生じたスルツェイ島では、初期の段階で海流散布や風散布の植物が進出した。」

「では、動物はどうだろう。
　（･･･）
　ある種の海鳥は陸上生態系に依存せずに陸上で繁殖が可能である。」

「島に定着した生物にとって、長旅はもう終わりである。
（･･･）
　島に到達した生物たちは、島での生活を始める。そして必要に応じて島の内部を。ときには島と島の間を移動していく。小さな世界には小さいなりのコミュニティがある。大移動で疲れた体をビーチで癒した後には、諸島内での陣取りゲームの始まりだ。

（「第３章　島で生物が進化を始める」より）

「海洋島の生物相はアンバランスである。
　それは海を越えられる生物のみが分布できるからだ。」

「海を越えられない代表は、カエルを含む両生類である。彼らは水に依存して生きているものの、（･･･）海を渡れない。」

「陸生哺乳類はおおむね海を泳いで島に到達することができない。その理由は、泳ぐのはそれほど得意でないことと、悠々と泳いでいるとサメなどの捕食者に襲われてしまうことに集約されるだろう。このため、海洋島にはコウモリ以外の陸生哺乳類は基本的に分布していない。」

「ドングリや陸生哺乳類、両生類、ミミズなどは、一般に海を越えられない。しかし、これはあくまでも一般的な話だ。」

「島の生物相を決めるのは、移動する生物の性質だけではない。島の地理的な要因にも左右される。
　なによりも先ず重要なのは面積だ。島の面積が広ければ広いほど、多くの生物が住める。面積の広い島にはそれだけ多様な環境がある。」

「メインランドから離れているほど生物の種類は減り、生物相の構成はアンバランスにねる。このことは、単に種類が少ないという以上の意味をもつ。
　地上性の哺乳類がいないことは、植物にとっても動物にとっても、大型の捕食者がいないことを意味する。
（･･･）
　捕食者の存在は、食べられる側にとって文字通り死活問題となる。地上性の捕食者からの解放は、被食者の生存率に大きく影響する。
　また、単に種類が少ないことだけでもそれは大きな意味がある。種類の少なさは、競争者の少なさを意味するからだ。面積が狭くろも、競争者がいなければそれだけ集団を維持しやくｓくなるだろう。
　捕食者と競争者の少なさこそが、島の生物相の最大の特徴である。」

「このようにアンバランスな生物相をもつ生態系を、不調和は生態系と呼ぶ。島には、面積や距離など地理的条件に関わる多くのハードルが用意されている。そのハードルが島の生物相をアンバランスにすることに貢献し、そのアンバラナスさは島の生物の進化を促進する原動力となっていく。」

「島という地域は固有種が生まれやすい場所である。面積が狭いにもかかわらず、島には多くの固有種が分布している。」

「島では、飛ばない鳥が進化する。」

「地上で襲いかかってくる捕食者が少ないことが最大の理由だ。」

（「第４章　島から生物が絶滅する」より）

「海という障壁は生物の侵入を阻み、進化のゆりかごを守る衛兵として機能してきた。しかしのこの障壁は、生物を鳥かごに幽閉し、逃亡先を奪う結界ともなっている。（･･･）
　島での進化は、移動性の低下を推奨する方向に進んでいる。そのおかげで、島の生物は危機に脅かされたときに逃げ場を失う。進化の時間が長く、島でも特性を研ぎすましているほど、偉大なる海を前になす術がない。袋小路ともいえる島において、生物たちは古来、何度も危機を経験してきた。

（「第５章　島が大団円を迎える」より）

「森林の中に点在する草地、草地に点在する裸地、河川敷に点在する河原、いずれもまた島である。
　こうしてみると、自然界には島があふれているのだ。」

「自然界だけではない。人間による新たに生まれた都市にも島は存在している。
　都市に点在する公園は、島である。
　道路に囲まれた家の庭は、島である。
　道路の脇にある側溝は、島である。
　路上にできた水たまりは、島である。
　屋上のコンクリの隙間にたまった土は、島である。」

「明日の朝いつも通りに目が覚めたら、いつもの散歩道であなただけの島を見つけてもらいたい。身近な生活の中で、島を見いだすことができたなら、あなたも立派な島類学者だ。
（･･･）
　島類学者となったあなたの目に映るのは、きっと以前とは違う島の姿だろう。葉っぱの小さなトゲにすら、進化のドラマを感じることができる。海辺ではしゃぐパンフレットの宣伝文句とは一味違う島の魅力との出会いに向けて、一歩を踏み出してみてほしい。」

☆mediopos-3197　2023.8.19

創造とは
「外部」を召喚することである

「外部」を召喚するのは
「天然知能」である

「天然知能」による「表現」は
「自己表現」ではない
「わたし」は創造の当事者ではあるが
「外部」に「自己」はないからだ

「芸術にたずさわる多くのアーティスト」にとって
芸術は「自己表現」ではないように
「自己表現という意味での表現」は否定される

「「わたし」の中なんて空っぽで何もない。
わたしの中ではなく、むしろ外から来る何か、
インスピレーション（霊感）を受け取る」のだ

「天然知能」の「わたし」は
「外部」に接続する装置である

ちなみに「外部」は「外側」ではない
わたしの「内側」と「外側」が
「内部」という全体を成している
「外側」はわたしに想定可能だが
「外部」は知覚不可能で窺い知れない

「天然知能」による「創造」は
想定されるものを能動的に創るのではなく
未知のものを受動的に召還することである

能動的でなければならないのは
「外部」に接続するための当事者となることである
「人工知能」は当事者となることができない
「人工知能」には「わたし」がないからだ

さて「外部」を召還し創造する装置について
その「トラウマ構造」が示唆されている

トラウマ構造とは
二項対立的なものが「わたし」を支配しているとき
「対立する二項を共に成り立たせる肯定的矛盾と、
共に否定する否定的矛盾が共立」することである

ここで例として挙げられているのは
津波の被害者に見られる被害者意識と加害者意識
そして「お昼をラーメンにするか蕎麦にするか」と
決められないでいる状況だが
（二つの例が極端なのも天然なのかもしれない）

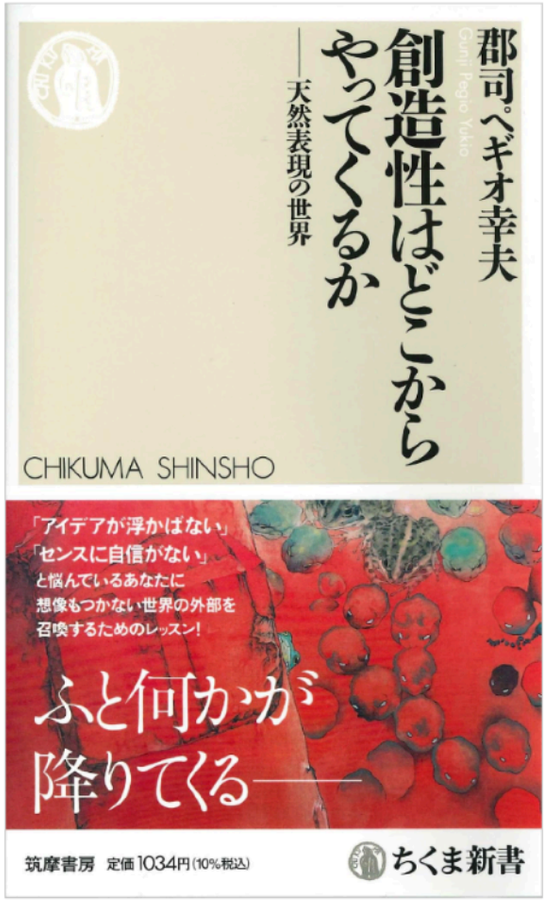
津波の被害者のトラウマにおいては
被害者意識と加害者意識という二者択一がもつれ
「被害者かつ加害者」をつくり出し
「その脱色の果てに「被害者も加害者もなくなり」、
そこへ「癒やし」が現れ」るように

二者択一でもつれた「閉域の外部を召喚」することで
「外部に触れることができ」
それが「創造であり、癒やし」となるのだという

ちなみに「ラーメンか蕎麦か」では
迷った挙げ句蕎麦とラーメンの意味が「脱色」され
著者は結局どちらかを選んだりせず
「帰って寝る」ということになる

「帰って寝る」のを「創造」と呼ぶかどうかは別として
「天然知能」によって「外部」が召還されるのは
「肯定的矛盾と否定的矛盾の共立」という
トラウマ構造のもとにみずからを置くときである

ある意味でこうした「トラウマ構造」は
禅問答のようなものでもあるかもしれない
その矛盾を生きるためには
「閉域の外部を召喚」しなければならない



▪郡司ペギオ幸夫
『創造性はどこからやってくるかーー天然表現の世界』
（ちくま新書　筑摩書房 2023/8）

▪郡司ペギオ幸夫
『創造性はどこからやってくるかーー天然表現の世界』
（ちくま新書　筑摩書房 2023/8）

（「はじめに」より）

「本書は、アートに基づく「創造入門」である。」

「アート作品を手がかりにしてはいるが、何の創造であるかは問わない。創造とは、「わたし」において、新しい何かを実現すること、「わたし」の外部との接触を感じることである。「やった」「できた」「わかった」という新たな扉を開くものだ。他の誰かがやっても意味がない。創造とは、自分でやるからこそ、意味がある。本書では、創造の当事者性という問題が明らかにされ、創造の当事者であることの意味と方法が論じられる。
　人工知能が、あなたより評価される絵を描き、あなたより評価されるコンセプトやアイデアを打ち出し、あなたより評価される小説を書く。そういうことは、近い将来たやすく実現されるだろう。しかし当事者における創造の評価は、定量化したり、他と比較することができない。他人と比較しても意味がないように、むろん、人工知能と比較しても意味はない。人工知能が何をしようが、あなたはあなたなのである。
　あなたは、「それは自己満足ではないか」と思うかもしれない。そうではない。自己満足は、「わたし」の中でも閉じた理解や納得を意味する。閉じているので創造体験の実感がない。しかし、自分を納得させるために自分を欺く理論武装だけはする。「自己満足ではないか」と言われることを恐れる状態が、自己満足である。「当事者として外部に接触する」体験は、そのような閉じたちっぽけなものではない。そんなものは吹き飛んでしまう。
　それだけではない。本書での創造は、創ることが困難なものを創る実践的意味を持っている。」

（「第１章　「天然表現」から始める」より）

「近年、私は、いわゆる機械で実装された知能という意味での人工知能に留まらず、得られた経験やデータだけから推論し判断する知性のあり方全体を、広い意味で、「人工知性」と捉え、これに対して、想定もしなった自分にとっての外部を受け入れる、徹底して受動的な、しかし、それこそが創造的な「天然知能」という知性のあり方を提唱した。
　「天然知能」は、知能というより創造的態度、創造の装置であり、だからそれは、制作それ事態とも言える。そして実は、制作された作品それ自体かもしれないのである。」

「本書は、「天然知能」に関する予備知識など、一切必要のないように書かれている。」

「「天然表現」は、創造し個物化する生成の現場として、制作過程を描いている。ただし、本書で制作はかなり広い意味で用いられる。作品の鑑賞もまた制作と考えられている。だからこそ、完成した「作品」もまた「天然表現」を実装している。」

（「第１章　「天然表現」から始める」〜「外側と外部」より）

「読者は。表現、表現活動というと、カタカナのアートの話であり、いわゆる美術（ファイン・アート）に限定しない、身体を含むさまざまな媒体を用いた「表現」をイメージするかもしれない。もちろんそれも含むのだが、アートや表現として多くの読者が想像する、自己表現であるとか、「わたし」の中にあるものの吐露であるとか、そういうことではない、むしろ芸術にたずさわる多くのアーティストは、自己表現という意味での表現を否定する。「わたし」の中なんて空っぽで何もない。わたしの中ではなく、むしろ外から来る何か、インスピレーション（霊感）を受け取るのだ。そういう言い方をする。ここでいう天然表現は、この感覚を拡張することで構想される。そして、自然現象や、人間の意識、心の形成まで、天然表現として展開していくものなのである。」

「天然表現は、表現の結果であったり、表現を説明したりするものではない。そのような終わったことを後付けることはしない。天然表現は表現に向かうための態度であり、完全な不完全体である。芸術家は、「外から来る何か、インスピレーション（霊感）を受け取るのだ」と言ったが、その受け取るための態度である装置は、形式化できる。それは、何がもたらされるかはやってみないとわからないものの、「やってみよう」という賭けに出るだけの仕掛けなのである。」

「天然表現とは、「外部」に接続する装置であり、外部に接続することが「作品化」される営みである。ここに二つ説明すべき言葉がある。第一に「外部」であり、第二に「作品化」である。外部とは、「わたし」が想定する世界、その外にある無限の宇宙とでもいうべきもので、認識不可能なものである。」

「私はしばしば、窺い知れない外部とか、知覚不可能だが存在する外部、という言い方をするが、そうすると、「そういう、解決不可能なものを特権化するのがダメで、内と外をつないだ世界観を構想することこそ大事なのだ」などとお叱りを受ける。しかし、わたしの知っている内（こちら側）とつなげられるように想定された外（向こう側）とは、内から勝手に規定された外に過ぎないだろう。むしろ、そのようにつなげられた内と外によって構成される全体こそ、「わたし」が想定する、閉塞的な世界なのである。私は常にそのように反論するのだが、わかってくれる人はそう多くない。
　まだ行ったことはないが、存在するらしい向こう側とか、わたしはあなたではないが、同じ人間として理解可能な、あなたとか。このような向こう側やあなたは。こちら側にいるままにして、「可能なもの」と想定されている。現に知覚できたり現れていなかったりしても、知覚できるとしたらこのようなものであろうと、そのあり様を想定できる。このような、いまだ現れないが可能なもののいる場所を、本書では「外側」ということにする。すでに現れ、知覚しているもので満たされた場所が内側であるが、外側は、この内側と対を成すものと定義される。内側と外側から構成される全体は、しょせんわたしが想定する世界である。
　これに対して、外部とは、この内側と外側の成す全体からは窺い知れない、その全体の外に位置づけられるものである。（･･･）「内と外をつなげることこそ重要な問題である」という場合の外は、外側のことであって、外部ではない。外部は可能なものとして想定できない。」

「外部に触れる体験とは、どのような体験だろうか。（･･･）とりあえず、以下の三つをあげ、次の節以降、なぜそれらが外部に触れる体験なのか述べることにする。創造という行為、とりわけ芸術家の営みは、これに当たると言っていいだろう。そして死を感じる体験である。他人の死を外から経験することはできても、わたしの死は生きている限り知覚しようがない。死はわたしの外部にある。しかし、不幸にも私は、それを直観してしまう。もう一つ、ここではトラウマにおける癒やしをあげておこう。本来、外部に触れる体験は日常的に起こっているのだが、なかなか気づくことがない。その日常的な外部に触れる体験に気づき、これを作品化していくことで、天然表現を起動する。」

「創造が外部に触れることであるなら、それは決して有限の形式で捉えられない無際限さを含むことになる。わたしが決定する価値は、無際限さに開かれ、自分でさえ確定的に記述できないものの、わたしにおいては自明である。かくして、わたしが感じる創造とは原理的にはわたしだけのもの、当事者のものとなる。創造とは何かという問いは、客観的に創造を定義しようという問いであったが、問い自体がむしろ解体され、当事者性という性質が現れたことになる。」

「外部に触れることの最も端的な例は、死を想うことだろう。」
「死を想うことで発生する議論、および私の死に対する直観さえ、このように、その全体が原理的にわからず、宙吊りのまま進行する。生から死を想いながら、同時に生と死の関係自体をも疑い、しかし、それを超越した絶対的な死を感じながら、仮のものである生と死自体が、曖昧模糊としたものになる頃、すべてが押し流されていく。生きようとして苦闘しているものを押し流すものこそ、死ではないか、というように。このどうしようもない本流の感覚こそ、私にとっての死を感じる感覚だ。そしてそれこそ、外部に触れる感覚なのである。」

「トラウマとは心的外傷、すなわち心の傷を意味し、それがもとで、その後の人生に大きな影響を与えるものだ。」
「津波の被害者に見られるトラウマ（･･･）。彼らは端的な被害者であるにもかかわらず、自分だけ生き残ってしまったことに罪悪感を覚える。それはおおよそ、被害者の一割程度との報告がある。それはサバイバーズ。ギルト（生存者の罪）と呼ばれている。つまり津波の被害者は、同時に加害者の感覚も持ち合わせている。」
「被害者意識と加害者意識は、明確に区別されながらも、糸が絡まってほどけなくなったように分離しがたいものとなる。」

「創造の本質は価値に依存する点にあり、価値は確定的に書き下ろそうにも、後かあ後から書き足りない部分に気づかされ、「これが価値だ」と決められるものではない。その無際限さが価値の肝なのであり、だからこそ、既存の価値からはみ出る創造は、あらかじめ規定できない外部との接触において起こるのである。この点は極めて重要な点だ。」

（「第２章　外部へ出るために」より）

「大学で、お昼をラーメンにするか蕎麦にするか、散々迷った挙句、帰って寝ることに決めた。自分には得てしてこういうことが、よく起こる。人によっては、そんな馬鹿な、と思うかもしれない。なにしろ、選択肢二つの中で選んでいたにもかかわらず、その土台を台無しにするというのでは、お話にならないからだ、しかし、この「帰って寝る」がいかにして現れるのか。これは考えるに足る問題だろう。それは素朴ながら。創造の種に関与しているからだ。」

「これは、何かに似ていないか。そう、トラウマと同じではないか。本来なら二者択一であるはずの被害者意識と加害者意識が、もつれにもつれ、両義的構造、つまり、「被害者かつ加害者」をつくり出してしまい、その脱色の果てに「被害者も加害者もなくなり」、そこへ「癒やし」が現れた、その津波の被害におけるトラウマ構造だ。」

「蕎麦かラーメンか悩んだ挙げ句、帰って寝るという選択に、トラウマ構造を見出し、むしろトラウマ構造を、創造の準備の構造として一般化する。これを考えていこう、両者に共通に認められた第一の構造、それは、二項対立的な二つの概念だった。二項対立とは、二つのものからどちらかを選ばなければならない。のっぴきならない状況であり、世界観である。
　（･･･）
　第二に、想定された二項対立の項目がもつれにもつれ、共に存在する状況が共通に認められた。それが「被害者かつ加害者」であり、「蕎麦かつラーメン」であった。二項対立である二つの概念が、もちろん同時に存在することはない。（･･･）相反するものが共に存在する矛盾を。肯定的矛盾（肯定的アンチノミー）と言うが、まさに、被害者意識と加害者意識が共に存在する状態、そして、蕎麦とラーメンが共に存在する意識状態は、肯定的矛盾を実現しているのである。これが、二つの事例に共通な「第二の構造」である。
　しかし、そのもつれ状態は、解消するわけではなかった。
（･･･）

　二項対立的状況があって、トラ今では、強度においてその各々が存在せず。蕎麦かラーメンかでは、意味を理解する点においてその各々が存在しない。そういう状況が、完全に脱色された状態である。とするなら、それは二項対立的二者のいずれもが存在しないことで生じる矛盾であり。それは一般的に否定的矛盾（否定的アンチノミー）と呼ばれるものである。
　世界は二項対立的な二者によって構成され、そのいずれかを選択するしかない状況と仮定されている。だからこそ、その二者を共に成立させることも矛盾（肯定的矛盾）だが、そのいずれもが存在しないことも矛盾（否定的矛盾）なのである。これこそ、トラウマと蕎麦かラーメンかの事例に共通な「第三の構造」である。」

「こうして肯定的矛盾と否定的矛盾を各々定義しておくとき、トラウマとは、肯定的矛盾が作り出す二項対立的二者の「もつれ構造」を維持したまま、その二者の強度を限りなく弱めたものだった。つまり、ここｒは、「もつれ」において肯定的矛盾が、強度を脱色する意味において否定的矛盾が、見出される。これは、両者が共に存在している状態、「肯定的矛盾と否定的矛盾の共立」という形式で規定できるものと考えられる。これを、「蕎麦かラーメンか」と「トラウマ」という、二つの事例に共通な、「第四の構造」とみなることができる。特にこの、第四の構造を「トラウマ構造」と呼ぶことにする。」

「二項対立的なものが、そこから抜け出せない閉域のように「わたし」を支配しているとき、対立する二項を共に成り立たせる肯定的矛盾と、共に否定する否定的矛盾が共立することを、トラウマ構造と呼ぶ。わたしがトラウマ構造にあるとき、わたしは、この閉域の外部を召喚し、外部に触れることができる。それが創造であり、癒やしである。トラウマ構造は、創造のための構えであり、装置ということができる。」

◎郡司ペギオ幸夫（ぐんじぺぎおゆきお）：
1959年生まれ。東北大学理学部卒業。同大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。神戸大学理学部地球惑星科学科教授を経て、現在、早稲田大学基幹理工学部・表現工学専攻教授。著書『生きていることの科学』（講談社現代新書）、『いきものとなまものの哲学』『生命壱号』『生命、微動だにせず』『かつてそのゲームの世界に住んでいたという記憶はどこから来るのか』（以上、青土社）、『群れは意識をもつ』（PHP サイエンス・ワールド新書）、『天然知能』（講談社選書メチエ）、『やってくる』（医学書院）、『TANKURI』（中村恭子との共著、水声社）など多数。

☆mediopos-3198　2023.8.20

昨日のmediopos3197（2023.8.19）でとりあげた
郡司ペギオ幸夫の「天然知能」で
「外部」を召還する装置である「トラウマ構造」
についてとりあげた

それは二項対立的なものが支配的なとき
「対立する二項を共に成り立たせる肯定的矛盾」と
「共に否定する否定的矛盾」が共立することだが

今回とりあげた清水高志の
「トライコトミー（三分法）」という
三種類の二項対立を組み合わせ
それを変化させることで二元性を調停するという方法論も
「外部」を召喚する「トラウマ構造」と
通底しているのではないかと思われる

どちらも二項対立的なありようを
二項対立によって克服する道を示唆しているからだ

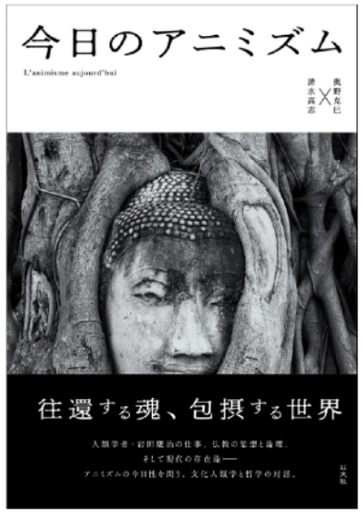
清水高志の「トライコトミー（三分法）」に関連したことは
mediopos-2591（2021.12.20）
清水高志「トライコトミー（三分法）、禅、アニミズム）」や
mediopos2646（2022.2.13）『モア・ザン・ヒューマン』で
すでにとりあげているが

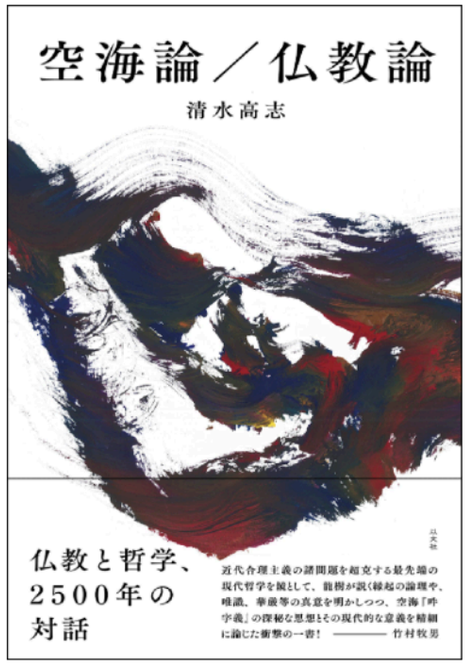
清水高志『空海論／仏教論』の第一部に収められている
「二辺を離れるーーーー上七軒講義」
（清水高志×師茂樹／亀山隆彦（聞き手））では
そのテーマがさらにわかりやすく講義されている

インドでは西洋的な二者択一に対し古くから
「Ａである」「非Ａ」であるという命題に加え
「Ａであり、かつ非Ａである」
「Ａでもなく、かつ非Ａでもない」という
二つの命題が加えられたテトラレンマが説かれてきたが

それをふまえながら清水高志は
「主体／対象」「一／多」という二つの二項対立に加え
「内／外」という二項対立を加え組みあわせた
「トライコトミー」という思考法を提案しているのである

それは超越的な「一」なるものに
原因が還元されてしまうことなく
仏教的な縁起のように
何らかの様態や属性に対し主語を立てず
無自性で「空」であるとすることで
二元性が調停される視点が示唆されている





- 清水高志『空海論／仏教論』（以文社 2023/4）
- 奥野克巳・清水 高志『今日のアニミズム』（以文社 2021/12）
- 奥野克巳・近藤祉秋・ナターシャ ファイン (編集)
  『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ／人類学と環境人文学』（以文社 2021/9）

そうすることで西洋的な論理に見られる
矛盾律に囚われた思考・経験を
拡張させていくことが可能となっていく

「二項対立」をただ否定するのではなく
「二項対立」をふまえながら
複数の「二項対立」の二項の「関係を、
逆転させたり、ツイストしたり」することで
二項対立から自由になろうとする
そんな思考法はおそらく
二項対立的な矛盾を抱えている思想に
出口を示すという意味で
想像以上に豊かさと可能性を持ちえている

ウィトゲンシュタインは
「ハエ取り壺のハエに出口を示してやること」を
哲学の目的として示唆したが
トライコトミーはまさにその出口のひとつでもありそうだ

▪清水高志『空海論／仏教論』（以文社 2023/4）
▪奥野克巳・清水 高志『今日のアニミズム』（以文社 2021/12）
▪奥野克巳・近藤祉秋・ナターシャ ファイン (編集)
『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ／人類学と環境人文学』
（以文社 2021/9）

（清水高志『空海論／仏教論』〜
清水高志×師茂樹／亀山隆彦（聞き手）
第一部「二辺を離れるーーーー上七軒講義」〜「唯識、二項対立、三項構造」より）

「清水：『今日のアニミズム』でも触れたんですが、いわゆる二元論の問題をどう克服するか、ということは人類にとって非常に大きなテーマであり、西洋でもそれを考えてきたし、日本でも、仏教においてもつねに問われてきた。自分がこの問題を考えるなかで気がついたのは、二元論の二元性、二項対立性というのが生み出される背景には、異なった種類の二元論が複数混ざり合ってしまっている、ということがあるんですよね。それが優性の項、劣性の項を固定化する傾向を生み、それによって二元性が解消できなくなっていく。そしてまた、このように無自覚に混じり合っている二元性を、丁寧に分離していくというのが、哲学が昔からやってきたことでもある。
（･･･）
清水：プラトンの対話篇を見ても、ソクラテスやパルメニデスが出てきて議論しているのは、たとえば「一なるもの」がある、そして「多なるもの」がある。「一なるもの」というのは、実は「同じ」「同」ということではないだろうか？　「多なるもの」というのは「異」ということじゃないか？　といったようなことなんですね。「そうかもしれない」というので吟味を進めていくと、微妙に違ったりするところがあり、これらの概念をまた別の概念対として区別しようということになる。そうやって、次々にばらばらにすることで、哲学のもろもろの概念が生まれてきたわけです。
　また、西洋哲学には、複数の二項対立を扱う独特の傾向というものがあり、それらが分離しきっていない部分や長年かけて癒着してきた部分がある。二項対立が解決できそうなある二項対立があると、それに「相乗り」させるようにして別の二項対立を結びつけて解いていこうとするので、どうしても癒着してしまうのです。西洋の哲学の発想では、たとえば主体と対象という二項対立であれば、主体と一というものと、対象と多というものの性格が、比較的癒着する傾向にあって、主体の側は合理的に、対象世界のもろもろの現象を整合する、という関係がしばしば固定されているんです。

亀山：統合体としての主体ですね。

清水：一方ではそのように受動的に統合された果てに、世界はあると思っているので、客観的な世界は一つだと思っている。これが近代西洋の考え方で、今述べた仏教とは違うわけです。ところが、今西欧でもそれが逆転した関係になっていることに注目が集まり始めています。対象がまずあって、それに向かう主体的なアプローチが複数あって競合する、という構造からモノを考えた方が、実際にはモノの能動性を読み取れるのではないか、というものですね。これが、ブリュノ・ラトゥールらが方法論的に提示した、アクターネットワーク論（Actor Network Theory,ANT）ですね。科学や技術の対象が生まれるにあたって、モノのエージェンシー、能動的作用がどう働いているか、また複数の主体の側の相互作用がどのようになっているのかをネットワーク的に考えるのが、この科学人類学の方法論です。こうした例では、一と多、主体と対象という二種類の二項対立の関係が逆転しているわけですよ。それらの結びつきが従来とは逆転している。こうした構造のほうが、一つの主体のアプローチに還元されない、対象の意想外な働きというものもはっきりと分かる。主体と一、対象と多が結びついていたときには、多様性はどんどん回収される要因としてあるだけで、そこを増やしてもこの構造が仕切り直されるだけで、どんどん主体性が強くなってしまう。二元性が強くなっていく。それでこうした関係を、逆転させたり、ツイストしたりしてみようというのが僕の考えです。」

（清水高志『空海論／仏教論』〜
第一部「二辺を離れるーーーー上七軒講義」〜「「野生の思考」とテトラレンマ」より）

「清水：（「トライコトミーと離二辺」は）三種類の二項対立を組み合わせて、それを変化させることで、それらの二元性を調停するという方法論ですね･･････。最初に図で三つのポイントをあげておきます。

※図２　トライコトミーと離二辺
①tricotomyトライコトミーは、三種類の二項対立を組み合わせ、その結びつきを変化させるこｙとで、それらの二元性を調停するという方法論である。
②仏教では「離二辺の中道」で説かれている思想、テトラレンマ（「Ａ」「非Ａ」「Ａかつ非Ａ」「Ａでもなく非Ａでもない」）が、それによって定義される。
③「含むもの（外）」と「含まれるもの（内）」、「一なるもの」と「多なるもの」。「主体」と「対象」という三種の二項対立がそこでは扱われる。

清水：仏教ではよく「離二辺の中道」という形で説かれている、テトラレンマという発想があります。これは、伝統的に四句分別（しくふんべつ）ともいいますが、インド人が非常に古くから用いてきた独特の論理のあり方ですね。
　「Ａである」とか「非Ａである」とか「Ａかつ非Ａ］、ある命題Ａについて、そこから考えられる命題を四つ列挙していくわけです。これを順番に第一レンマ、第二レンマ、第三レンマ･･････と言いますが、西洋では第一レンマとその否定である第二レンマを考え、第三レンマは排中律によって否定されるわけですね。ところがインドでは、第三レンマはおろか「Ａでもなく非Ａでもない」という第四レンマというものまで定義しようとします。
　不生不滅など、仏教ではそういうものが一番安定的な形だというふうに言われているわけですが、『今日のアニミズム』で僕が提示したトライコトミーtricotomyという理論は、複数の二項対立の結びつきのなかで、もっとも絞られた形で理論が一巡し、すべてが第四レンマ、すなわち二項対立のどちらの極でもないという構造をつくろうとしたものだったんです。そのために結びつけられる、重要な二項対立の要素としてチョイスしたのが、「一なるもの／多なるもの」「主体／対象」、これはこの本のテーマが人間と自然の問題、アニミズムの問題だったからというのもあります。そして僕の考えでは、「含むもの／含まれるもの」の関係、言い換えると「内／外」の二項対立っていうのは非常に本質的なんです。この関係は、今のパルメニデスとソクラテスの話でも、まさにこれが最大のアポリア（難題）になったんですね。ここがギリシャ人たちが分からなくなったところで、それが解決できないと、イデア界と感性的世界が分離したままになってしまう。
　これは人類全体の問題として、レヴィ＝ストロースが語っていることでもありますね。文化と自然の分離とか、そうした主題を、色々な文化圏の人々が執拗に考えている。「含むもの」と「含まれるもの」が分離したり、入れ替わったりするという話は、たとえばレヴィ＝ストロースだと『神話論理』の二巻によくそういう話が出てきます。」

「清水：エンペドクレスや「野生の思考」がやっていることは何かというと、まず二項対立があります。その二項対立を別の二項対立に分裂させます。それを感性的なものに寄せます･･････。そしてそれらが、全体として環を描くようにして調停されるということが大事なんです。媒介となる第三項が次々と出てきて、結果としてどこにも《始点》が来るわけではない構造ができる。そうやってできるのがテトラレンマなんです。
（･･･）
清水：ようするに、第三項が先に繰り延べられていく。そうしたどの項もその役割を負うという形で、第三項の位置が一巡すうｒと、そこで《原因はどの項でもない》という、第四レンマが言える。レヴィ＝ストロースが自分で構造という概念を説明して、サイエンスーーーーこれは多分、フランス語のScience、つまり「学問」のことだと思うんですがーーーー学問には、還元的な方法化構造的な方法の二通りしかない、と語ったことがありました。構造的な方法というのは、レヴィ＝ストロースの場合には、第三項的なもの、つまり二項対立をまずつくっておいて、それらを共存させる具体物、これを《媒介》と言いますが、その具体物、《媒介》の位置をただ先送りにするだけじゃなく、順繰りに取り換えて一巡させることで、すべてを説明する形をつくる、ということだったのではないかと思うんですよ。」

（清水高志『空海論／仏教論』〜
第一部「二辺を離れるーーーー上七軒講義」〜「《相依性》は巡る」より）

「亀山：レヴィ＝ストロースの『神話論理』だと、ジャガーと何かが対立しているとか、その対立を兼ねた第三項が出てきたり、またその第三項に対立するものがでてきたりして･･･。結局、それらの構造が閉じるんですよね。神話っていうのは。
清水：環を描いて閉じる。まさにそう。そうすることによって、無限に第三項が繰り延べられていくというだけではない論理が作られるんです。
亀山：そうすることがまた還元主義の、乗り越えにもなるのか。
清水：乗り越えられるわけです。縁起について語ったところで、吉蔵が他の原因によって結果が招来するというだけの考えだと、縁起が無窮（むぐう）になる（原因の無限遡行になる）から駄目だと言っていますが、それと一緒なんですよ。
（･･･）
清水：ある結果が、他のなんらかの原因から生じると言ってしまうと、そうした他因は無限遡行になるからいけない。吉蔵はこれを、「無窮になる」と言って拒絶した。なので、なんらかのものに自性がある（自己原因である）というと、縁がいらなくなって、無因論になると。だから、縁起が無窮にならないためには、縮約が生まれないといけない。こうした縮約をもっともシンプルに定義して、Ａと非Ａだけで作ってしまったのが、仏教で言う「相衣性（そうえしょう）」ですね、「Ａがあるから非Ａがある、非ＡがあるからＡがある」「Ａがないから非Ａがない。非ＡがないからＡがない」･･････。
亀山：『今日のアニミズム』のナーガルジュナの解釈で出てきたものですね。
清水：そうです、絶対こういうことをやっているはずなんです。それともう一つ、『ティマイオス』のなかで、プラトン三通りに現象世界が分かれるとも言っていますねーーーー「イデアそのもの」と「生滅の世界」がある。さらにその「生滅が起こる場所」というのがあって、この「生滅の起こる場所」というのは、イデア（形相性）を受容するもっと抽象的な土台として出てくるものです。「場所」（コーラ）というものですね。ようするに、原因やそれがどこにあるのかという話が出て来る前に、生滅の世界。第三レンマの世界を一回経由するわけですよ、仏教でも、第三レンマの世界を、生じていく方と、滅していく方で両方やってますね。十二支縁起で。
（･･･）
清水：順観と逆観（還滅門）があって、その操作を挟むと、ちょうど一巡して縮約が生まれ、おそらくこの論理は相依性になるようにできているんですよ。」

（清水高志『空海論／仏教論』〜
第一部「二辺を離れるーーーー上七軒講義」〜「主語性から属性へ」より）

「清水：何らかの様態や属性に対して、それが属する主語を立てて納得してしまうと、駄目なんですよ。そんな風に主語を立てて、そういう主語があるから当然そういう様態なのだ、とその様態の原因を主語の側に帰してしまうのは、項に自性（自己原因性）があるということを認めて、そこからボトムアップで考えることになるので、逆にこの自性がないということが、無自性で「空」ということなんです。
（･･･）
師：ナーガルジュナというのは、ニヒリストだと言われているわけです。つまり、否定ばっかりしていると思われているんですが、実は否定が入ってこないとそもそも二項対立が出てこない、Ａがあったら非Ａを持ってこないと二項対立を作れないので、否定は絶対出てこざるを得ないわけです。でもそこで、すべてがないと言っているわけでは全然なくて、釈尊が語った縁起といのはこうやって説明できるんだと言おうとしているのがナーガルジュナなんです。
（･･･）
師：無限に後退するとか、無限の否定とかが嫌いな人たちが何をするかと言うと、ストップポイントを置いて、それを「真如」だと言ってしまう。それか逆を言えば、究極のなんでも受け止めてくれるストップポイントというか、最後の受け皿みたいなものをつくって、これさえあれば全部説明できるとしてしまうような仏教的な一元論になってしまう。
（･･･）
清水：あらゆる二項対立の、分節以前ということを語り始めて、ようするに二元論を「一」で解いてしまう。そうすると大体、「多」という問題が宿題のように残ってきて、というのがあるんですね。」

◎清水高志
東洋大学教授。井上円了哲学センター理事。専門は哲学、情報創造論。著書に『実在への殺到』（水声社、2017年）、『ミシェル・セール　普遍学からアクター・ネットワークまで』（白水社、2013年）、『セール、創造のモナド　ライプニッツから西田まで』（冬弓舎、2004年）、共著に『今日のアニミズム』（奥野克巳との共著、2021年）、訳書にミシェル・セール『作家、学者、哲学者は世界を旅する』（水声社、2016年）、G.W.ライプニッツ『ライプニッツ著作集第II期 哲学書簡　知の綺羅星たちとの交歓』（共訳、工作舎、2015年）などがある。

☆mediopos-3199　2023.8.21

小学校に入ったころの思い出がある

幼稚園を入園してすぐに逃げ出して以来
もちろんそれ以前もそうだが
もっぱらひとりあそびをしていた

そのほうが
あそびに熱中できるし
ひとに気をつかわなくていいので
らくだったからだが

気を利かせたらしい先生が
「いっしょにあそんであげなさい」と
クラスメートにいったらしく
「いっしょにあそぼ！」と言ってきた

いっしょにあそべることは
とくになさそうだったので
かまわずひとりであそんでいたのだが
学校というところはどうも
ひとりでいてはいけないところらしいと
そのことではじめて気づかせられた

いっしょにあそんでほしい
そう思っている子どももいるのだろうが
ぼくのばあいは少なくともそうではなかった

そのことをよくおぼえているのは
いっしょにあそぶということが
非常なストレスとなったからだ

だれともいっしょにあそばない
というわけでもなかったけれど
望まないにもかかわらず
だれかといつもいっしょでなければならないような
強制的な「社交性」に慣れずにいたということだ

それでもその後は
しだいにそれなりの対処はできるようになり
コミュニケーション上の問題で
とくに問題になったようなこともなくなったが
「非社交」的な性格はいまでも変わらない

さて前置きが長くなったが
宇野常寛の連載
「庭の話 14.孤独を与える都市」に
「いま「孤独」は不当に貶められている」
という話があった

宇野氏は「世界でいちばん嫌いなものに
「飲み会」がある」というのだが同感である

「飲み会」的な場を必要とする人にとっては
「孤独」は社会問題となるのかもしれず
イギリスでは２０１８年に
「現代の公衆衛生上、最も大きな課題の１つ」として、
世界初の「孤独担当大臣」を任命し
その対策に乗り出した」という

日本でも１９７０年代に
保健学の研究者である足立己幸が
「孤食」という言葉をつくって
「孤食」でないほうが
栄養学的に充実した食につながるとしていた

歴史学者の藤原辰史は「孤食」の豊かさを
ある程度認める立場をとり
対案として「縁食」という概念を提示したが
それはあくまでも
「孤食は共食に回収されていく過程、
もしくは共同体の縛りの弱い共食を
縁食と言い換えているもの」だ

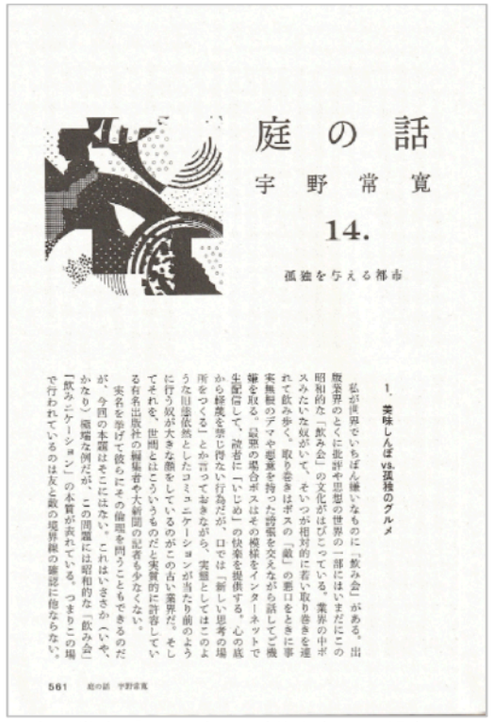
さきの小学校の先生の善意のごとく
「ひとりでいる」ことが問題であるという意識は
多くのばあい根強くあるようだ

しかし宇野氏の示唆するごとく
「人間はときに孤独にあるべきなのだ」
「「ひとり」だからこそ人間は
純粋に事物と向き合うことができる」
という視点をなおざりにしたとき

ひとは「集団」「共同体」を離れて
ひとりでものごとを考えることができなくなる

そして「学校」や「お上」といった組織
マスメディアなどから与えられることを覚え込み
それに応じることしかできなくなる

「いっしょにあそんであげなさい」は
「いっしょでないと許さない」となり
かつての大政翼賛的な状況のように
レミングの大移動へと向かいかねない



庭の話

宇野常寛

14.

孤独を与える都市

1. 美味しんぼ vs 孤独のグルメ

私が世界でいちばん嫌いなものに「飲み会」がある。出版業界のとくに批評や思想の世界の一部にはいまだにこの昭和的な「飲み会」の文化が根づいている。業界の中でスみたいな奴がいて、そいつが相対的に若い取り巻きを連れて飲み歩く、取り巻きはボスの「厳」の悪口をときに事実無根のデマや憶測を持った噂話を交えながら話して「機嫌を取る。「厳」の場合ボスはその模様をインターネットで生配信して、「厳」の快楽を提供する。「心の底から修羅を崇じ得ない行為だが、口では「新しい思考の場所をつくる」とかいっておきながら、実態としてはこのような旧来依然としたコミュニケーションが当たり前のように行う奴が大きな顔をしているのがこの古い業界だ。そしてそれを、世間とはこういうものだと受容的に許容している有名出版社の編集者や大新聞の記者も少なくない。

実名を挙げて彼らにその倫理を問うこともできるのだが、今回の本論はそこにはない。これはいまさか（いやかなり）陳腐な例だが、この問題には昭和的な「飲み会」の本質が表れている。つまりこの場で行われているのは友と敵の境界線の確認に他ならない。

561　庭の話　宇野常寛

▪宇野常寛「庭の話 14.孤独を与える都市」
（『群像』2023年9月号）

▪宇野常寛「庭の話 14.孤独を与える都市」
（『群像』2023年9月号）

（「１．美味しんぼvs.孤独のグルメ」より）

「私が世界でいちばん嫌いなものに「飲み会」がある。出版業界のとくに批評や思想の世界の一部にはいまだにこの昭和的な「飲み会」の文化がはびこっている。業界のボスみたいな奴がいて、そいつが相対的に若い取りまきを連れて飲み歩く。」

「ＳＮＳのプラットフォーム上で行われている相互評価のゲーム（承認の交換のゲーム）はこれを、低コスト化し、時間と場所の制約から解き放ち、簡略化したものだと考えればいい。」

（「２．福祉の敵」より）

「いま「孤独」は不当に貶められている。２０１８年、イギリスは「孤独」を「現代の公衆衛生上、最も大きな課題の１つ」として、世界初の「孤独担当大臣」を任命しその対策に乗り出した。背景には国民ーーーー特に高齢男性ーーーーの社会的な「孤立
」があるという。主観的な感情をさす「孤独」と、社会的な状態をさす「孤立」は異なる概念だが、この両者は常にセットで語られる。今日においては社会的なネットワークから離脱してしまった「孤立」と、人間の内面的なものである「孤独」な感情は同等に扱われており、そしてどちらも社会的な「ケア」の対象になりつつあるのだ。」

「イギリスの「孤独」解消に向けた取り組みを高き評価し、それに追随し世界に二番目の「孤独」対策担当閣僚を設置した国家がある。その国は「孤食」という概念を１９７０年代に「発明」し、社会問題として指弾してきた。そしてそれがどこかは、もはや説明する必要はないだろう。

（「３．「孤食」を再評価する」より）

　そもそもこの「孤食」という言葉は１９７５年、保健学の研究者である足立己幸による造語であった。（・・・・）足立は「家族と食卓を囲むこと」が栄養学的に充実した食につながるという前提で啓蒙活動を行ってきたが、約半世紀を経た今日では、この孤食／共食という図式を提示したことを「反省している」と述べている。
（・・・）
　この足立の「転向」は常識論的に考えて妥当なものだと思われるが、その一方で正しく栄養を得るという「保健学」的な観点から食をとらえることそのものの限界も露呈している。足立の力点は、他の人間と「つながる」こと（食卓を囲むこと、食事の内容を共有すること、料理を共にすること）などが、結果的に品目が多く栄養バランスに優れた食事につながるというものだ。足立の議論は、食事を精神的な活動として位置づけることを優先しない。そのため、「孤食」そのものの豊かさを発見することがないのだ。」

「対して歴史学者の藤原辰史は「孤食」がその批判のために生み出された言葉であることを前提に、その豊かな側面をある程度認める立場を取る。」

「封建的な家族の食卓や、「残すことを許さない」といったイデオロギーのもとに児童の管理の手段として用いられる学校給食が「食」という体験を、特に子どもたちにとって恐怖の体験にしてしまうーーーーそういった痛みを知らない、もしくは若い頃に経験したその痛みをビニールハウスの中でとっくに忘れてしまった文化人や研究者や社会起業家が「孤食」を批判するとき、私は強い失望を感じる。孤食によってはじめて救われる人間が存在することを、この人たちは想像もできないのだ。

　しかし、藤原は孤食を単純に擁護する立場は取らない。孤食はその言葉が生まれたときから指摘されている通り、単に社会的な孤立の結果として望まざるかたちでそれを強いられているケースが少なくないからだ。

　そして藤原が一連の議論の中で、対案として提示するのは「孤食」と「共食」の間の「縁食」という概念だ。孤独に食事を摂るのでもなく、仮定や職場といったメンバーシップの確認のための食卓を囲むのでもなく、見知らぬ誰かと偶然に知り合うためにこそ誰かろ食卓は囲まれるべきだというのがその主張だ。
（・・・）
　藤原の議論は、「縁食」と「共食」の境界線が曖昧で、はっきりしない。「縁食」が成立するのは誰かとそこで遭遇し、交流が生まれたとしても、共同体への取り込みを回避したときのみだ。藤原の述べる「縁食」は実質的には孤食は共食に回収されていく過程、もしくは共同体の縛りの弱い共食を縁食と言い換えているものだ。「子ども食堂」や、藤原自身が飲食店でたまたま出会った人々と関係を結んだ例が挙げられているが、そこで醸成されるコミュニケーションは、実質的には家族よりもその拘束力の低い「共食」以外の何ものでもなく、ここについては全体敵に立論に失敗している。
（・・・）
　そしてこちらがより重要なのだが「縁食」もまた人間のコミュニケーションで目の前の食べるものから人間を遠ざける。少し意地悪な視点になるかもしれないが、「異業種交流会」や業界の「立食パーティー」といった共同体「未満」の「縁」をつなぐための会食のことを考えてもらいたい。私はこの種の人間関係そのものを目的とした会合が苦手でほぼ顔を出さない。
（・・・

　誤解しないで欲しいが別に私は孤独を愛することを主張したいとは微塵も考えていない。もちろんＪＴＣ敵、文壇／論壇的な「飲みニケーション」には軽蔑しか感じないが、それはむしろ人並みの繊細さと現代的な人権感覚を有しているか否かの問題だ。ここで重要なのは、事物と純粋に向き合うためには、人間は一時的に孤独になること「も」必要だということなのだ。」

（「５．ひとりあそびのすすめ」より）

「誤解しないで欲しい。私は他者が、社会的な関係が必要ないと述べているのではない。むしろ逆だ。適切に他者とコミュニケーションを取るためにこそ、人間は孤独に世界につながるための回路が必要なのではないか、と問うているのだ。

　人間はときに孤独にあるべきなのだーーーー共同体への回帰は強者たちによる傲慢な主張だ。既に社会的な地位が確立された人々ーーーーマスメディアや大学など温室に暮らす人々ーーーーの語る仲間という言葉に、絆という言葉に、関係性という言葉に、人並みの理性と繊細さがあれば浅薄さと卑しさ以上のものを感じることは難しい。それは自分が強い立場で臨めば、あるいは他の場所で生活が保証された状態で外部から気軽に触れれば、地元の人の集う商店街のカフェもスナックも居心地がいいだろうし、大きな声でそれが弱者のためのセーフティネットであると善人顔して主張することもできるだろう。しかし、本当に必要なのは「独り」でいても寂しくない場所なのだ。

　そして前述したように「ひとり」だからこそ人間は純粋に事物と向き合うことができる。孤食だからこそ、会話の与える印象に左右されずに人は目の前の食べ物に集中できる。」

「一人でコミュニケーションを取るとは、どういうことだろうか。

　それは、完全な自己責任の世界だ。自分は強いと誇るために弱肉強食の野蛮な世界を肯定したがる短慮の塊のような政治家やジャーナリストやビジネスマンの振りかざす「自己責任」は単なる愚かさと卑しさの証明に過ぎない。本当の自己責任はむしろここにある。」

「私は長くランニングを趣味にしているが、一定の距離をこれだけの時間で走り切るといった記録にはまったく関心がない。疲れれば歩くし、喉が渇けばコンビニエンスストアで水を買ってきて飲む。（・・・）

　このようなひとりあそびにおいては自分との競技も解除することが一つの目安となる。（・・・）自己との競技すらも捨て去ったとき、はじめて人間が事物そのものと対峙できる。走ることそのものを目的としたときに、人間はその行為について相対的にだがもっとも純粋に触れることができるのだ。

　これは言い換えれば、事物とのコミュニケーションを他の目的のための手段にしてはいけないことを意味する。

（・・・）

　他者との交流は暴力的に「ゲーム」を発生させ「目的」を付与してしまう。」

☆mediopos-3200　2023.8.22

「文學界 2023年9月号」に
「エッセイについてのエッセイ」の特集がある

エッセイとは何なのかよくわからないが
論文でも小説でも詩でもない
なにかではないというノンジャンルの文章を
とりあえずエッセイと呼んでいるようだ

ときに随筆と呼ばれもするが
エッセイと呼んだほうが
軽さと裾野の広さが増す感じがある

その特集のなかに
永井玲衣の「他者の気配」というエッセイがあり
寺山修司のエッセイがとりあげられていた
まさに「エッセイについてのエッセイ」である

寺山修司は当初歌人として登場し
前衛演劇グループ「天井桟敷」を主宰
劇作家として活躍した
その比較的短い四十七年の生涯のあいだに
エッセイも多数残している

寺山修司は「虚構の名手」であり
とくに短歌においては
虚構の私像を展開した作家として知られ
その作品は「虚言のひかり」に
充ちているともいわれていた

しかしそれらはたんなる「虚構」でも
「虚言」でもない

永井玲衣のエッセイのなかの表現を使えば

「本当のことでなくとも、
「ほんとう」のことが書かれている」
「彼は、言葉で「ほんとう」の世界を
構築することに注意を払っているのかもしれない」

▪永井玲衣「他者の気配」（文學界 2023年9月号／エッセイが読みたい・エッセイについてのエッセイ）
▪寺山修司『さかさま博物誌　青蛾館』（角川文庫　昭和五十五年三月）

事実と真実（ほんとう）はちがう
「日々の出来事」についての
「事実」だけが書かれてあっても
そこに真実（ほんとう）がなければ
そのエッセイは退屈なだけだ

読みたい言葉は
「わたしは○○○しました」
「○○○がありました」
というような凡庸な自己露出ではない

その奥にある
あるいはそのことをきっかけに
おとずれた「なにか」である

その「なにか」を
永井玲衣は「他者の気配」
「書き手自身も、わけのわからない部分」
と示唆している

寺山修司が「私という謎」というエッセイのなかで
「私は二匹のカメを飼っている。
一匹が質問という名で、もう一匹が答という名である」
「答よりも質問の方がはるかに大きい」
というのもそれに似ている

問うのは
「わからない」からだ
聞きたいのは凡庸な「答」なんかではない

私は○○です
というような答え（事実）が聞きたいのではない
私というわからなさを重ねながら
見えない彼方にある「ほんとう」へと彷徨いたいのだ

▪永井玲衣「他者の気配」
（文學界 2023年9月号／
エッセイが読みたい・エッセイについてのエッセイ）
▪寺山修司『さかさま博物誌　青蛾館』
（角川文庫　昭和五十五年三月）

「ざわめきの中にいることが好きだ。どことなくざわざわして、声やら、音やら、とにかく他者の気配がする場が好きだ。そこは街でもいい、森でもいい。他者の表れがあること。かれらとは直接的に関わらなくてもいい。ただそこにいて、たまに行き交って、また去っていくような関係でいい。

寺山修司のエッセイは、とにかく他者の気配がする。他者だらけだ。あまりに多くの何かがうごめいている。寺山は、自分のことを喋っているようで、ほとんど喋っていない。彼が虚構を生き延びたひとであることはよく知られている。言葉があふれて、うごめいて、広がって、それが愉快でたまらなくて、世界の方を変えてしまったのだろう。

このところ、私は二匹のカメを飼っている。
一匹が質問という名で、もう一匹が答という名である。問題は、答よりも質問の方がはるかに大きいことであり、たずねてきた友人達は「質問が答より大きいというのは、どういうことだ？」と訊くことになる。（寺山修司『私という謎　寺山修司エッセイ選』講談社学芸文庫、二〇〇二年、「私という謎ーーーールッセル」）

本当のことでなくとも、「ほんとう」のことが書かれている。エッセイで肝要なのはそれだ。ほんとうのことを支えきるには、ひとりではもたない。たくさんの他者が必要になる。だから寺山のエッセイには、おびただしい記憶の断片や、誰かの語りや、言葉や、詩や、顔や、問いが、ないまぜになっている。

子供の頃、「死ぬ」と言えずに「死む」と言っては、叱られた。
しかし、いくら叱られても、私にとって人生の終わりは、「死む」であって、「死ぬ」ではなかった。（同右、「童謡」）

人生の終わりは、彼にとって「死む」なのだ。死む、とつぶやいてみる。味わって、飲み込んでみる。だが寺山は、すぐにそんな話など飽きたかのように、酒場のホステスのまゆみから教えられた「赤い鳥」という童謡について語り、いくつかばらばらと思いついたことを問いかけ、童謡を勝手に作り替え、そして再び、まゆみの話をしてふいに終わってしまう。これは一体何なのだろう。他者の言葉たちをつくり直し、自らのものにしてしまうことについて語っているエッセイだと説明することはできる。だがやはり、自分の話の話をしていない。いや、もちろん自分の花詞をしているのだが、そこにあまり関心がないように思える。彼は、言葉で「ほんとう」の世界を構築することに注意を払っているのかもしれない。

エッセイは無数にある。だが、日々の出来事がつらつら書かれているだけのエッセイも、ただ聞いた話が書かれているエッセイも、わたしにはどこか退屈だ。それは寺山のエッセイに育てられたしまったからだろう。」

「エッセイのこわさは、ひとりよがりになることだ。それはつまり、他者の声に耳を傾けられなくなったときとも言える。とりかえのきかない言葉を書いたとしても、それはあまりに堅牢で、誰もおらず、冷たくしんとしていたのならば、読者はきっと居心地がわるいだろう。他者の気配がするということは、書き手自身も、わけのわからない部分があるということだ。わからなさは隙間をつくり、そこには風がふき、音が聴こえ、ざわめいている。書き手にも完全にはわかっていない。わたしはそういうエッセイが読みたい。」